

〔世間物語〕○維新史料編纂會所藏本

正月廿一日、昨夜かゆき降つゝ、今朝三寸程つもる、晝か天氣、今日、御老中堀田備中守様、海不う掛り御役人御召連、京都へ御出立、

〔高麗環雜記〕○東京帝國大學所藏本

正月廿日、曇、○中略、

一御目付岩瀬肥後守今朝京都に出立、○中略、

正月廿一日、今曉か雪、夕刻止、

一今朝、備中守殿京都に出立、○中略、

正月廿二日、

一御勘定奉行川路左衛門尉今朝京都に出立、

○本書ニ岩瀬ノ出發チ二十日、川路チ二十二日トナスノ誤ナルハ、上ニ掲ゲシ川路聖謨ノ都日記其他ニヨリテ明カナリ。參考ノタメ附記ス。

〔東坊城聰長日記〕○宮内省圖書寮所藏本

正月二十七日、○中略、

一堀田備中守去廿一日江戸發足、來月五日比京着之由、附武家書取兩公被申入、附議奏、

〔九條家記録〕○東京帝國大學所藏本

正月廿七日、

一廣橋前大納言殿、（光成、武家傳奏）

堀田備中守事、爲

御使、去ル廿一日江戸表發足、道中滯無御座候者、來月五日京着仕候旨、申越候之付、此段申上候事、

正月廿七日、

正月廿八日、

一廣橋前大納言殿、

堀田備中守、去ル廿一日江戸表可致發足候旨申來候間、此段爲御心得申進候事、

正月廿七日、

〔土山武宗日記〕○宮内省圖書寮所藏本

正月廿七日、

一堀田備中守殿、爲御使去ル廿一日江戸表發足、道中無滯候ハ、來月五日頃上京之旨、本

堀田正陸江
戸出發ノ旨
ヲ上申ス

このへしよ
都 筑 駿 河 守

多美濃守殿ヨリ被申越候段、御附衆達有之、

○附 錄

〔如坐漏船居紀聞〕○松代藩士山寺源大夫雜記
久保來復所藏本

應下士ノ書

佐倉上京天
下ハ亂世

幕府ノ當路
者ニ人物ナ
シ

江戸ヨリノ
來書

堀田上京十
萬兩用意ノ
風聞

或應下の士之元方、正月十一日付にて、内密申來候よしの抄、
去十二月廿九日、亞人一條ニ付、外様大名并溜詰呼上、夜五ツ時退散、大晦日柳之間・帝鑑之間同斷、元日表 出御前
より、閣老衆人拂開港相談、田安・一ツ橋居残り、二日仙臺居残り、元旦閣老衆昨日迄七ツ時過退出、十二月十四日
林大學頭京都へ出立、右一件ニ付、又々來ル廿一日佐倉上京、并川路左衛門御目付上京、如何成行候哉、天下ハ最早
亂世と相成候、志量有之候者ハ、一己毎ニ覺悟いとし居候事ニ御座候、
一亞人も當月末ニハ一度下田へ引取、又々三月比江戸へ參り候と申風聞ニ御座候、何卒上ニ耳目之開候者、兩三人も
不出ハ益大變と可相成候、京都ハ 皇國魂ニて頻りに打拂ひ之評議之由、何卒上京之通相成候様いとし度候、海防
掛亞人應接掛りに相成候所、何迄も亞人ニ隨ひ申候趣、實ニ當節ハ大事中之大事ニ及び候へとも、一向ニ閣老初中
以上ニハ人物無ニ困り申候、如何成行候哉、不心事共ニて言語ニ絶し候事而已ニ御座候、

戊午正月十五日付、江戸より來書抄、

舊冬以來アメリカ之説もまち／＼ニ御坐候内、先神奈川邊ニ通商町相立候儀ニ御決着与申風聞實事と被存候、然處京
都六ヶ敷、舊冬十四日林大學頭殿・津田半三郎殿上京御座候處、輕輩之者相登候儀故、更ニ奏聞相成兼候よし、右ニ
付、此度別番之通、御役人當月廿一日御上京之由、堀田侯も十萬兩程も御内々御用意御登り之由、イキリス下田 三艘
渡來致し候よし、其外八丈ハニ數十艘相掛り候風聞ニ御座候、實ニ舊冬以來不穩風説取々故、何分申上候程取留無之
當惑仕候、水府兩公も、御老中其外御役人衆御目通り被願候得共、更ニ御逢等御斷ニ御坐候、加州侯も若殿正月八日江
戸着ニ御座候、紀尾家老衆七種ニ御在所ニ出立杯申大混雜之よしニ御座候、尙追々實説承り次第可申上候、

江戸來書抄、色々風説、

一備中守殿、來廿一日當地發足、

又、

亞奴・イキリス之強情、大延之形勢、定而追々御聞及可有御座、嘆息之次第、終ニ諸處交易之地も、御取開之趣ニ御内
定之處、流石ハ水府老公御合點之場ニ不至候由、國主方凡御承諾、乍去表向而已、右之内仙臺ハ未御承諾ニ不至、土
州ハ決而承知と被仰切候由、近頃日下部内咄ニ承り候、舊冬林家ハ 京都へ被遣候御趣意ハ、今以御武備御調
兼大小銃も不揃、旁不得止先暫彼の願ニ任せられ、諸處ニ而交易御取開ニ可相成旨之處、關白殿下御逢無之、三條大
納言殿御逢、伺之趣中々御取上ニ不相成、兼而先達而 勅命之梵鐘鑄換之儀、今以等閑置早晚調達之期可有之哉、下
田貸地之事も後而之伺ひ、甚以輕蔑之次第、其外共五箇條余ニて、本邦興廢之場、將軍如何相心得候哉と、嚴敷御詰
問有之申譯難立、既ニ昔し中山殿の如く、三條殿江戸御下向ニ可相成處、暫御猶豫被申立、早打を以、舊臘廿九日早
朝伺有之、堀田侯御上 京ニ相極り候へ共、迎も交易御許容ニも相成間敷との事ニて、孰も今年中ニも動搖之姿ニ
可及哉と氣遣敷由、水府老公思召々、全體彼等願も遂其意ニ任せられ候ハ、怯弱之次第、御貸地之内ニ寺院取建、切
支丹宗の願を行ひ候へハ、信長・秀吉兩公より之禁制、殊ニ三代將軍ニ至斷然と罰せられ候を、當將軍より又候御引
起しと申之ハ、御義理合而已ニ而も相濟申間敷与之御事之由、

〔中山忠能履歷資料〕○宮内省
書寫所藏本

江戸表方來書之寫、

墨利加一件愈不容易形勢に相運ひ申候、舊臘廿九日諸侯伯登城之命有之て、墨利加所置振相談有之候處、諸家議論少
々つゝ異同候へ共、皆々格別之正論も無之、一同貿易風に靡き候由相見候、水府公は川路左衛門尉殿・岩瀬肥後守殿龍

安政五年正月二十一日

堀田ノ上京
前後ニ於ケ
ル江戸ノ情
勢

堀田ノ上京
モ無効カ

林邊等上京
不首尾

水戸老公開
港ニ反對

水戸老公ノ
激論

江戸ノ有志
ハ京師ノ卓
論ニ期待ス
堀田ノ上京
ハ異論ヲ消
滅セシムル
手段

幕府ノ當路
者洋風ニ化
ス

堀田發途

出し處、御承知之通り老公之勇奮果決之御議論に、兩人とも一言も御答出來不申罷歸由、一橋公御中人に先々相
止み候由承及候、子細は官吏之頭を刎覺悟を極て、必戰之御所置有之様との御劇論にて有之候由、併是は彼是申立候
も御採用には相成不申様に存候、古來方大器は用を難成と申も如此候哉、殘念之次第に御座候、其他之諸侯兩三家不
心服之義も有之候様承り、跡は皆々夷狄之加勢致候様之說而已にて恐入候、扱始之風説にては、京師之正論中々卓然
たる事にて、林家など申上にては御評議にも不相成、閣老相登り候て、奏聞不申ては、容易御評議無之との事にて、定
る天下之人心を奮發せしむる號令有之、人心を振發せしむる様に可相成哉と奉存、此表有志之面々、京師之拔卓論
にて關東之因循苟安之姿を一洗に致し候勢に奮躍仕居申候處、又々近日之説には京師にも格別之正論も無之、多分關
東之御所置之通りに相成候は、六ヶ敷事にも相成不申、幕府公方は諸侯伯貿易凡一致仕候處を、堀田侯上京御奏聞に
て、人心を定、異論無之様致し候手段と相見へ候様、如何に致し候ても、此度之上京不容易義にて、天下之形勢に關係
いたし候儀と奉存候、不安心之義に存候、何卒賢兄御地へ御滞寓之事故、可相成は御忠慮御周旋にて、其御表卓立之御
議論に相成、夷狄之姦計を摧き度、何分ミニストルを京師に差置、港を大坂・堺等へ相開候義は、決して不相成義と存候、
且勝手交易場所數ヶ所相開候義、不相成義と存候、此等之義は隨分宜しき所置も可有之義と存候、萬古卓立之神州、今
日に到て勢を推き、夷風に一變致し不遠内には兵亂と相成可申、且又日本中も異變可有之、只今變之無之内に拒絕被
致候へば、拒絕致度物に御座候、此表政府之勢は、全く西洋風に相成、妖風に化せられ義を以斷する處は無之、岩瀬殿
などは日本様に御座候處、此節は西洋偏好と相成候、追々 神州之義氣衰廢仕、愈以挽回之勢相見へ不申、口先にては
頻りに富國強兵を相唱候へ共、約る處は商賣國に致候積りと相見候、責ては有志之面々始終之見當を定、斷然と異論
邪説之大害を打消、必死之力を極め國恩を報候様に致度候、賢兄は御自由之御身に候へば、何卒十分を御盡し候様に
と奉存候、

天下之形勢賢兄御前察之通り相成、堀田侯廿一日立にて、來月五日其地御着之旨宿割御座候、夷人も堀田侯と同日

に發足、下田へ中歸り仕候、何れ御地之云々相決次第、又出府と被察候、

前水戸藩主德川齊昭權中納言 老中堀田正睦備中守○佐倉藩主 ノ上京ニ先テ、書ヲ前關

白鷹司政通ニ致シ、暴ニ外交拒絕ノ斷ニ出ヅルコトナク、姑ク國防ノ
整備ヲ待ツベキノ意見ヲ陳ブ。

〔德川齊昭書翰〕○水戸藩史料所載

春寒之節候得共、益御機嫌克被爲渡奉南山候、扱ハ追々沙汰承り候得ば、此度老中初上
京仕候由、何義候哉御用之品ハ勿論承知不仕候得共、若哉夷狄之義候付事も可有
御坐哉と推察仕候處、夷狄之義候付事ハ、先年打拂を不被止候得バ、無此上極御上策と奉
存候故、追々打拂之論下官にて認候義にて、天下一統に存居候處、只今もハ登城を被申
付、懇切之譯に相成候上ハ、又無謂打拂と申事も相成兼可申候得バ、何分只今より御内
備御手厚御整相成、彼より兵端開候節、大和魂を振起防禦も聊指支無之様相成候方と、下
官ハ奉存候、叡慮之程ハ勿論難奉測、殿下御初之尊意も如何と奉存候得共、下官之存意ハ
如此候へバ、全御内々此段奉申上候、謹言、

正月廿一日

齊 昭

太 閤 殿 下

(前關白鷹司政通)

安政五年正月二十一日

五二五

無謂打拂モ
出來ズ先ヅ
國防ノ整備
ヲ要ス

別紙本文、先日認置候處、老中等登り之義、沙汰のみこて否も不相分候處、今日發足之由承り及候故、先日認置候一書奉指上候、

〔鷹司政通書翰〕

○公爵島津重所藏本
安政雜集所載

○二月朔日近衛忠熙宛

○上(正月二十八日)
略、一昨夜水戸前黃門ヨリ來狀、下官所勞深被案見舞申來、且打拂ヒ止候事極上策、外ナク

存候由、深カツテン參リ、此上ハ格別武備張、万一の砌無由斷、國忠和魂專務ニ存候、
叡慮イカ、ト奉存候由申來、則内々入

天覽候、返シ被下候ハ、尙又可入貴覽ニ候、○中略、

翠山君

玉几下

梅翁

二朔

〔德川齊昭使者口上書〕

○子爵東坊城
德長所藏本

○議奏萬里小路正房へ

〔東坊城廳長自筆〕
是、水前黃門方万大へ密々被申越候口狀書ニ候、昨日万大より被爲見、兩人嘆息仕候事、

但、太閤へも直書ニ布、先同様申來候、

攘夷モ俄ニ
行ヒ難シ

劇劑ヨリモ
柔劑

公武一體ト
ナルヲ要ス

舊臘、林大學頭等上京、未下向之事も承知不被致候處、又此度堀田備中守上京之由、何御用歟勿論承知不被致、此節之事故、夷狄之儀ニ付布之御事歟杯被存候得共、打拂之儀ニ、先年より持論有之ニ付、先年より之儘ニ候得共、打拂ニ越候上策ニ無之候得共、右ハ天保寅ニ御止ニ相成、猶又此度登城御目見迄致、御懇切之御扱ニ相成候上ハ、只今打拂ニ致候事、此方より名を被求候と申者故、只今ニ布ニ、打拂之儀ニ相成兼、病ニ譬候得事、最初ハ劇劑を用ひ候も得即功候得共、數日病候上ニ、柔劑ヨリして内被補候方利も可有之故、今と相成候事、内を補候外無之理と被存候由、偕公邊よりハ如何様御申立ニ相成候哉、又叡慮如何様ニ可被爲在哉ハ、乍勿論不相分候得共、
叡慮御尤之御儀ニ、勿論於公邊御取用ニ相成候半、又公邊無御據儀ニ、於叡慮乍恐 御勘辨被爲在、御雙方御持合、御一體ニ不相成候事、夷狄之儀ニ暫ク差置、内地之儀如何と心配被致、内敗れ候得事、外よりハ入易き道理故、甚心配被致候由、叡慮之儀ニ何等申上様ハ勿論無之候得共、公邊と御間、御目おれニ相成候得事、御雙方之御不爲と被存、此處甚心配被致候との趣、

〔中山忠能手記〕

○宮内省圖書寮所藏本
中山忠能履歷資料所載

一、二、三、建通卿内話、水戸前中納言、從來蠻夷之儀愁歎、太閤へも度々打拂等勸申、既先日

齊昭變心言
語道斷

安政五年正月二十一日

五二八

迄も文通有之處、一昨日別早飛脚を以て、俄變心之儀申越、言語道斷之事也、(松平慶永)越前同變改之、様子有之由也、
依之昨夕公純卿、實萬公亭へ被行向、内談之處、於内府も少有恐改之氣云々、如何如何々々、後剋内々一見之處、全變意にもあらされ共、打拂を主とし申入候へ共、登城迄、もすむ上は、無謂打拂も不宜由、甚鈍き文面にて、是迄の書勢一向无之短札也、

○参考

〔水戸〕安島彌次郎書翰○水戸藩史料所載

公武ノ間圓滑ヲ要ス
齊昭ヨリ鷹司太閤ヘ致書セントス

當今之時勢に至候ては、公武の御合、萬々一御われ、に相成候様にては、勿論天下之爲不可然、叡慮御尤之義は、公邊にても御用に相成候様被遊度、又公邊無御據御事柄は、乍恐少々、叡慮をも御曲に罷成、とにかく御双方御和談之上に無之候ては、夷狄之義は先づ指置、内地之治り方も始終いかゞと、此程之處、別て老公御配慮被遊候、實は太閤殿下へ御直にも被仰上度思召候へ共、叡慮云々之義等指付御申上も御程合如何との御遠慮も被爲在、御内々御沙汰之趣も御座候間、右之御意味柄何と歟太閤殿下へ御聽に達、御舍にも相成候様御扱に致し度候、しかし勿論御内々之義に付、其段は御舍に相成候様にと存候、以上、

正月六日

安島彌次郎

〔知信水戸藩京都留守居〕
鵜飼吉左衛門様

米國總領事「ハリス」Harris 條約改訂談判ヲ了ルヲ以テ、是日、觀光丸ニ乗ジ、下田ニ歸ル。二十二日著ス。

〔亞米利加應接掛〕井上清直等上申書○合原猪三郎筆記所載

亞米利加使節歸豆之儀ニ付申上候書付

井上信濃守

岩瀬肥後守(忠實、亞米利加應接掛、目付)

米使歸豆ニツキ觀光丸借用ノ件

亞米利加使節儀、一先歸豆之儀、御聞届相成候ニ付、觀光丸御船拜借いとし、水路罷越度旨申聞候ニ付、其段承置申候、依之此段申上候、以上、

午正月

〔亞米利加應接掛〕井上清直願書○合原猪三郎筆記所載
御船拜借之儀申上候書付

井上信濃守

米使附添ノ下僚歸豆ニツキ君澤形船ノ借用ヲ請フ

〔上掲〕別紙申上候通、近々亞米利加使節歸豆致し候ニ付、附添罷越候支配向并使節雜具等、積入持越候積之處、觀光丸御船而已ニ、右取計難行届候間、君澤形御船貳艘拜借仕度、此段奉願候、以上、

午正月

○指令

覺

安政五年正月二十一日

五二九

安政五年正月二十一日

五三〇

君澤形御船壹艘、并魯西亞返上之スクーナル船壹艘拜借被仰付候間、掛之面々可被談候事、

〔亞米利加應接掛下田奉行井上清直上申書〕○合原猪三郎筆記所載

亞米利加使節出立之節乗船場之儀を付申上候書付

井上信濃守

米使出立ノ際芝新錢座ヨリ乗船ノ件

亞米利加使節儀、觀光丸御船拜借、歸豆仕候を付りて、右御船品川沖合に繫居候を付、右取寄迄に着府之節之振合に準じ可罷越處、左候りて、彼是刻限も相移、出船都合も不宜候間、芝新錢座より乗船を罷越、觀光丸に乘移候積御座候、尤出府掛一同にも申談候處、存寄無之旨申聞候間、此段申上候、以上、

午正月

〔亞米利加應接掛下田奉行井上清直上申書〕○合原猪三郎筆記所載

亞米利加使節病氣を付歸豆爲仕候義申上候書付

井上信濃守

亞米利加使節儀、來ル廿四日、出立之積申上置候處、同人此程々之不快兎角不相勝、既に條約書に彼方而已調印いよむし度趣等申立、其段御聞置相成、然ル處、今朝に至り、不快何分曉

米使病ニツキ急ギ歸豆ヲ欲ス

條約ノ清書成ル

伊東貫齋ノ門人ヲ「ハリス」ニ附添ハシム

与不致、下田表をて、本國より持越候藥等差置候間、今廿日、出立歸豆之上、服藥養生いよし度、尤條約書清書等之手續も有之候間、通辯官殘し置可申旨、詰合支配向に申出候由、右支配向之もの申聞、無餘儀次第を付、御聞届相成可然、尤病氣を候上を、支配向而已爲差添、萬一之義有之候りて不都合を付、何れも、通辯官附添歸豆爲致候方と、右等掛り役々にも及談判候處、存寄無之旨申聞候間、使節旅館に罷越面會之上、前書之趣夫々申聞、尙條約書之義を、兼り談判相整候條約、今廿日、和文英文蘭文貳通り、出來、二綴を致し、右壹綴を此方、壹綴を使節下田表に持歸、追り和文二通蘭文壹通を此方、英文二通蘭文一通を彼方より出來、此方より出來候和文二通之内、壹通下田に差送り、使節に相渡候得と、同人手許を出來候英文と綴合、再度出府之節持參仕候積、今廿日、此方に受取候全備之壹綴、并此方より追り出來候和文貳通之内、壹通、并蘭文壹通、再度使節出府双方爲取替之節、前書四通とも月日認加、彼方より出來候英文と綴合候積申談、且今日出立之儀を、御船支度等相整不申候間、差延、明廿一日六半時、出立爲致候積、然ル處、使節儀、是迄伊東貫齋に治療頼聞、調劑罷在候を付、猶爲附添候様も可取計處、同人ハ、紀伊殿抱之ものより、差遣し候こと、夫々手續も有之、急速相辨兼候間、貫齋門人壹人、治療相應を出來候もの相撰爲附添候積、支配向之儀を、組頭壹人・調役壹人・同並出役壹人・同下役貳人・同心三人差

安政五年正月二十一日

五三一

添罷越候積御座候、依之此段入御聽申候、以上、

正月廿日

下 本文之通、備中守殿に申上候後、尙勘辨仕候處、追弔出來可仕貳級之義に、使節再出府仕候上之取計に付、歸
ケ 豆中和文武通之内壹通相認、下田表に差遣不申候とも、差支無之筋に付、昨夜使節に對話之節、其段申聞、再
札 出府之上、前書之和文武通、并蘭文壹通共相渡、四級一同調判可仕段申聞承伏仕候、依之下ケ札を以申上候、

〔海防掛上申書〕

○子爵小笠原長生所藏本
脇坂安宅日記所載

正月廿日、

一御城に相詰候部屋番持歸候海防掛差出書付、爲見合記之、

上

海防掛

米使歸豆
日時

亞墨利加使節病氣保養之爲、只今こも下田表に罷歸度旨申出候付、今日井上信濃守義蕃書
調所に罷越應接之上、品に寄候ハ、明日に茂出帆爲仕候旨申聞候、尤右之趣委細、紀伊守
様に同人より申上候、此段爲御心得申上置候よふ、御同人様被仰聞候付、奉申上候事、

〔亞米利加應接掛
下田奉行〕

井上清直通達
○帝國圖書館所藏本
外國事件書所載

町奉行衆

井上信濃守

亞墨利加使節、來ル廿四日、出立、芝新錢座を乗船、海路歸豆之趣、御達およひ置候處、同人

米使二十一
日出發歸豆
ノ件

病氣に付、急に歸豆致度旨申立承届、其段備中守殿に申上、明廿一日六半時、出立爲致候筈
有之候、依之此段及御達候、

正月廿日

〔町奉行跡部良弼通達〕

○外國事
件書所載

美作守殿

跡部

甲斐

守

亞墨利加使節、來ル廿四日、出立之積有之候處、病氣に付、急々歸豆願濟相成、明廿一日朝
六半時、出立之旨、掛り込達有之候、差掛候儀に付、別紙寫之通、町觸差出申候、尤出役勤方
(下二掲)
等之儀に、參府掛與力共々、貴様御組頭役に申談取計候様申渡候、依之別紙書類相添此段
御達およひ候、

正月廿日

○別紙

町觸

明廿一日、亞墨利加使節御當地出立に付、飯田町蕃書調所を雉子橋御門外御堀端通、常
盤御門外左に、本町二丁目を日本橋通、柴井町より松平肥後守屋敷脇、江川太郎左衛門
(深保、會津藩主)
調練場、夫々乗船之積に候間、兼町觸之趣堅相守、通行中、都而取締之儀無之様、嚴

米使江戸出
立ノ町觸

安政五年正月二十一日

五三三

重可相心得候、

右之通、道筋并寂寄町々、不洩様可觸知也、

正月廿日

〔亞米利加官吏出府取扱掛目付鵜殿長銳等通達〕

○外國事
件書所載

町奉行衆

明廿一日六半時、亞墨利加使節江戸出立付、別紙道書之通致通行候間、見物制し方等、兼申達置候通、御心得可有之候、此段申達候、以上、

正月廿日

鵜殿民部少輔

岩瀬肥後守

○別紙

藩書調所々、雉子橋御門外御堀端通り、常盤橋御門外左に、本町貳丁目より、日本橋通り、柴井町より、松平肥後守屋敷脇、江川太郎左衛門調練場、

〔小倉藩江戸日記〕

○伯爵小笠原
長幹所藏本

正月廿日、○中略、

一從御目付鵜殿民部少輔様・岩瀬肥後守様、御小人目付鹽澤彦四郎を以、明廿一日亞墨利

米使通行道
順

米使通行道
道筋取締

加使節當表致出立候付、御預三番明地立固、往來制方等、是迄之通相心得候之様、道筋之義を、藩書調所々雉子橋御門外・神田橋御門外・鎌倉川岸・常盤橋御門外、本町貳丁目日本橋通、芝新錢座江川太郎左衛門様調練場船乗之旨被仰渡候段、勝野兵馬申出之、

御留守居

明廿一日、亞墨利加使節當表致出立、御預三番明地前通行付、立固足輕拾六人、江戸

小倉組申合可被差出候、

外様物頭

右同斷、

下谷市ヶ谷
大目付

右同斷、

一右通行付、掃除中間三人差出候様、御賄被及沙汰、

〔老中連署書翰〕

○堀口貞明
筆記所載

午正月廿一日、備中守旅中申遣候趣、

亞墨利加使節并通辯官、下田表中歸致候付、今朝五ツ時過、藩書調所出立、芝新錢座より乗船、觀光丸御船に乘移、九ツ時、品川沖出帆致し候、此段爲御心得申進候、以上、

米使一行ノ
下田へ中歸
ヲ報ズ

安政五年正月二十一日

五三五

安政五年正月二十一日

正月廿一日

堀田備中守様

尙以、本文之趣、所司代に爲心得相達、傳 奏衆にも、無急度相達置候様与申遣置候、

〔老中達〕

○脇坂安宅
日記所載

大目付に被達候書付

亞墨利加使節一應談判相濟、下田表に中歸いゝ候付、觀光丸御船拜借被 仰付、今廿一日、出帆いゝ候、此段爲心得向々に可被達候事、

正月廿一日

正月廿一日、右書取、伊賀守殿渡之、(松平忠固、老中)
○脇坂安宅日記

正月廿一日、伊賀殿御渡、即日觸、○幕府
沙汰書

〔水戸藩〕御城書海防部

○公爵徳川
閑順所藏本

正月二十一日、

一大目付堀伊豆守(創製)方、松平伊賀守申渡諸向に相達候由に申、御城附共に爲心得爲見申候書付寫、

亞墨利加使節一應談判相濟、下田表に中歸致し候に付、觀光丸御船拜借被 仰付、今

五三六

連名

米使觀光丸
ニ乗シ出帆

(幕府沙汰書 温恭院殿
御實紀 高麗環雜記)

廿一日出帆いゝ候、此段爲心得向々に可被達候事、

〔大目付回達〕

○侯爵池田仲博所藏本
公儀齋留所載

一正月廿一日、大御目付中方之御達書、阿州様衆方到來、薩州様衆に致順達、○公儀
齋留

松平伊賀守殿御渡候御覺書寫壹通相達候間、被得其意、無遲滯早々順達、從留、田村伊豫守(頭影、大目付)方に可被相返候、以上、

正月廿一日

大目付

松平越前守殿(慶永、福井藩主)

松平阿波守殿(蜂須賀齊裕、徳島藩主)

松平薩摩守殿(島津齊彬、鹿児島藩主)

松平三河守殿(慶倫、津山藩主)

御(松平相模守慶徳、鳥取藩主)

松平兵部大輔殿(慶盛、明石藩主)

右留守居

覺

亞墨利加使節一應談判相濟、下田表に中歸致し候付、觀光丸御船拜借被 仰付、今廿一

安政五年正月二十一日

五三七

米使歸豆
ツキ回達

安政五年正月二十一日

五三八

日出帆致し候、此段爲心得向々に可被達候事、

正月廿一日

同日、右御同様持廻り、仙臺様衆仕出し、(伊達慶邦、仙臺藩主) 薩州様衆連名ニ布到來、例之通取扱、(淺野舜暲、廣島藩主) 屬留
一正月廿二日朝六時過、大御目付方之御廻狀、松平薩摩守殿衆方到來、(明石藩家老日記)
○高崎藩書附類・川越藩記録・延岡藩萬覺帳等、マタ本文ノ回達ニ關スル件ヲ記載ス。但、其内容略々同一ナルヲ以テ、之ヲ略ス。

〔竹垣三右衛門日記〕○維新史料編纂會所蔵本

正月廿一日、蕃書調所見廻、○亞米利加官吏、通辯官、明六半出立相濟、

〔海防秘聞集〕○維新史料編纂會所蔵本

正月廿一日、

觀光丸御船乗組

大御番

矢田堀景藏

浦賀與力

福岡金吾

同

佐々倉相太郎

下田調役

脇屋卯三郎

下田調役下役

齋藤源之丞

同

高木安次郎

醫師

東條英庵

下田奉行支配與頭

若菜三男三郎

觀光丸乗組員

同 合原猪三郎

同 同心 金子龍大夫

浦賀同心

岩田平作

同

山本金次郎

長崎地役人

竹内卯吉郎

〔石川成章日記〕○維新史料編纂會所蔵本

正月二十二日、○中略、

一昨日、脇屋方差越、(卯三郎、下田奉行支配調役) 俄官吏今日出立相成候之付、右附添、卯三郎今朝船ニ布出立い多し候

旨申來候、

〔勘定組頭高橋平作書翰〕○宮内省圖書寮所蔵本
川路聖謨京都表御用留所職

(本書) 午正月廿三日、沼津宿ニ到來、

川 左衛門尉様

從東海道小田原宿 高橋平作

以宿繼啓上仕候、然之亞墨利加使節、昨廿一日朝五ツ半時出立、芝新錢座江川太郎左衛門調練場々乗船出帆い多し候旨、江戸表々宿繼御用狀到來い多し候段、原彌十郎申聞候間、此段申上候、右之外相替儀も無之、御役々家來下々迄、是迄之如何之儀も相聞不申安心仕候、右之段申上度、如此御座候、以上、

安政五年正月二十一日

五三九

正月廿二日

高橋平作印

川 左衛門尉様

〔東坊城聰長日記〕○宮内省圖書寮所藏本

二月二日、晴、卯過刻參 内、○中略、

米使歸豆ノ件京都へ上申

一 亞墨利加使、一應談判相濟、下田表へ致中歸_レ付、觀光丸御船拜借被 仰付、去月廿一日

致出帆候、此段無急度兩人へ可申置、年寄共申越候旨、美濃守申越、兩公申入、附于議奏、

一 美濃守、明日も依風邪不參之旨、附武士申越、三日、早朝議奏へ申入、

〔柿崎村名主日記〕○子爵澁澤榮一所藏本

一 正月廿一日、北風晴天、時々曇り、今日、引網取極出會仕ル、夕方物役人出合、

蒸氣船下田入津

今夜八ツ時頃、(午前二時)上氣舟御船、江戸表方登り來り當湊入津致候_レ付、夜番之者方届ケ來候、

異人ノ荷物ヲ運ブ

尙曉方、御役所方役々様御出張被成候_レ付、小てんま舟_レ布、名主與平次并_レ人足貳人_レ布、右御船へ御乗らせ申候、同時、漁舟壹艘、人足拾人御差圖_レ付、差出し、異人荷物、

磯崎并_レ鵜嶋へ_レしけ候、右荷物、磯崎_レ玉泉寺持込、人足拾五人差出し相勤候、名主、

年寄・五人組迄立合仕候、

(二十一日ノ部、關外記事)本朝、上氣舟入津、但し、此時明ケ廿二日也、

正月廿二日

高橋平作印

川 左衛門尉様

〔東坊城聰長日記〕○宮内省圖書寮所藏本

二月二日、晴、卯過刻參 内、○中略、

米使歸豆ノ件京都へ上申

一 亞墨利加使、一應談判相濟、下田表へ致中歸_レ付、觀光丸御船拜借被 仰付、去月廿一日

致出帆候、此段無急度兩人へ可申置、年寄共申越候旨、美濃守申越、兩公申入、附于議奏、

一 美濃守、明日も依風邪不參之旨、附武士申越、三日、早朝議奏へ申入、

〔柿崎村名主日記〕○子爵澁澤榮一所藏本

一 正月廿一日、北風晴天、時々曇り、今日、引網取極出會仕ル、夕方物役人出合、

蒸氣船下田入津

今夜八ツ時頃、(午前二時)上氣舟御船、江戸表方登り來り當湊入津致候_レ付、夜番之者方届ケ來候、

異人ノ荷物ヲ運ブ

尙曉方、御役所方役々様御出張被成候_レ付、小てんま舟_レ布、名主與平次并_レ人足貳人_レ布、右御船へ御乗らせ申候、同時、漁舟壹艘、人足拾人御差圖_レ付、差出し、異人荷物、

磯崎并_レ鵜嶋へ_レしけ候、右荷物、磯崎_レ玉泉寺持込、人足拾五人差出し相勤候、名主、

年寄・五人組迄立合仕候、

(二十一日ノ部、關外記事)本朝、上氣舟入津、但し、此時明ケ廿二日也、

米使二十二日曉下田着

下田奉行支配ノ下條二十五日歸着

一同廿二日、西風晴天、今朝右之通、異人荷役仕候、次_レ玉泉寺長屋御詰所、今朝御引拂_レ相成候、

尙、此度江戸表方御登り被成候役々様へ、御機嫌伺_レ手札持參、吉藏相勤候、但、御役所人足、今日_レ休_レ、

〔老中連署書翰〕○維新史料編纂會所藏本 伏見宮侍御牧家諸留所藏

正月廿六日、次飛脚を以、備中守旅中_レ申遣、

亞墨利加使節事、去廿二日曉、下田表_レ着船致候旨、下田奉行届申聞候、此段爲御心得申進候、以上、

正月廿六日

連 名

堀田 備 中 守 様

〔下田町奉行中村時萬上申書〕○合原猪三郎筆記所載

支配向之者拜借之御船_レ乗組下田港着船仕候儀申上候書付

御 届

中 村 出 羽 守

亞米利加使節_レ差添出府仕候支配向之内、調役下役二人、同心二人、其餘足輕等、拜借之君澤形・并魯西亞返上スクーネル御船_レ乗組、去ル二十二日、品川出帆、二十五日、下田港着

船仕候、依之此段申上候、以上、

正月廿六日

〔亞米利加官吏出府取扱掛大目付土岐賴旨等上申書〕

○合原猪三郎筆記所載

蕃書調所引渡之義申上候書付

米使歸豆ニ
ツキ蕃書調
所引渡ノ件

土岐(賴旨大目付)丹波守

筒井(政憲大目付)肥前守

永井(尚志勘定奉行)玄蕃頭

鵜殿民部少輔

井上信濃守

塚越(元邦勘定吟味役)藤助

亞米利加使節・通辯官、一ト先下田表に立戻候處、再度出府仕候こと、いま三日間も有之候間、逗留中蕃書調所ニ布相用候諸品取纏、同所内に差置、新規御取建物等其儘ニ仕置、發足跡取片付相濟次第、支配向爲引拂、右場所一ト先古賀謹一郎(蕃書調所頭取)に引渡候様可仕与奉存候、此段申上候、以上、

午正月

下田奉行支配組頭以下ニ賞賜ス

○次ニ、下田奉行支配組頭若菜三男三郎以下「ハリス」ニ附添ヒ出府セル者へノ賞賜・手當給與等ニ關スル史料ヲ收ム。

〔老中申渡〕

○内閣記録課所藏本
安政年録所載

金三枚
時ふく貳

下田奉行支配組頭

若菜三男三郎

名代 伊佐新次郎

同調役

脇屋卯三郎

名代 宮田文吉

同並

菊名仙之丞

合原猪三郎

名代 大沼又三郎

金貳拾兩ツ、

御暇ニ付、被下之、

正月廿一日、右於躑躅間、紀伊守申渡之、

〔亞米利加應接掛井上清直願書〕

○合原猪三郎筆記所載

安政五年正月二十一日

(高麗環雜記
御城書海防部)

下田奉行支
配ノ者ニ賞
賜ノ件

安政五年正月二十一日

五四四

支配向之者御暇被下物之儀ニ付申上候書付

井上信濃守

御暇

下田奉行

支配組頭

若菜三男三郎

金三枚
時服二枚

同

同調役

脇屋卯三郎

金貳枚
時服二枚

同

同調役並

菊名仙之丞

同

同調役並出役

金貳拾兩宛

合原猪三郎

右ニ、亞米利加使節ニ差添出府いし候ニ付、下田表出立以前、御暇代御手當并旅御扶持方其外被下方之儀奉願候處、御暇代御手當ニ、追テ可被及御沙汰旨被仰渡、外被下物而已

下田奉行支
配向ノ者手
當ノ件

ニテ、出府罷在候、然ル處、使節御用濟次第、猶書面之ニ共差添、下田表ニ罷歸候ニ付テ、此節前書御手當并別段彼地ニ之御暇拜領物之儀可奉願處、兩様申上候義恐入候儀ニ付、前書御手當之方ニ、最早不奉願候間、書面之通り、夫々御暇拜領物被仰付候様仕度、此段奉願候、
〔朱書〕
本文御暇拜領物之儀、此程之儀ニ、全臨時御用之儀ニ付、支配組頭并調役ニ、先達而大坂表ニ爲御用被差遣候箱館奉行支配組頭ニ、金三枚時服二、調役ニ、金貳枚時服二被下候振合、調役並同出役ニ、御勘定方改並并支配勘定与モ、遠國御用之節、金貳拾兩被下候振合ニ見合、本文之通申上候、
以上、
午正月

〔亞米利加應接掛
下田奉行〕井上清直願書
○合原猪三郎筆記所載

支配向之者御手當之儀ニ付申上候書付

井上信濃守

下田奉行支配調役下役元

壹人

金五兩

安政五年正月二十一日

五四五

安政五年正月二十一日

五四六

同支配調役下役

同見習共

金四兩ツ、

五

人

同支配同心

同假抱共

金貳兩ツ、

七

人

右に、亞米利加使節に差添出府罷在候處、使節儀、御用相濟次第、猶差添歸豆爲仕候に付、支配組頭并調役等、御暇拜領物奉願候振合に准し、書面之通、御手當被下置候様仕度、尤今般出府之儀、使節滯留日數も相延候に付、銘々諸失費等不少、格別難澁仕候儀に付、出格之譯を以、前書奉願候通、御手當被下置候様仕度奉存候、依之此段奉願候、以上、

午正月

○指令

覺

老中指令

書面之者共に、願之通御手當被下候、且又組頭始拜領物并書面之者共御手當之儀も、此度之出格之譯を以、御品宜願之通被下候儀に付、以後之例に被心得間敷候事、

〔亞米利加應接掛 井上清直願書〕
下田奉行 〇合原猪三郎筆記所載

下田奉行支配向ノ者へ拜領物ノ件

支配向御暇拜領物之儀に付、別段奉願候、

井上 信濃 守

〔上二掃之〕別紙奉願候、亞米利加使節に差添歸豆仕候支配向之者、御暇拜領物等之儀、今般使節歸豆仕候に、中歸之筋に付、再度出府之砌、猶差添罷越、右御用濟歸豆之節に至り、夫々可奉願哉之處、最早使節に之引合筋も、大本治定仕、既條約書取調方出來、再度之節に、調判迄之儀に、外取扱向等先を無之、全使節出府に附候御用を、則今般相濟候姿に有之、且此後之儀に、猶乗船に、出府之積、使節申立之趣も有之、陸路に候得に、警衛向其外人馬繼立、食料扱方等之手數も有之、相應之人數差添、御手當等御入用も相掛候儀之處、乗船に候上、右等之所置無之、外差支も無御座候間、人數相減、自然御入用をも相省、其餘外御用等之模様を寄候に、今般出府之者共之内、其儘爲差支候譯にも難至、殊に數月出府罷在、一同苦勤仕、無滯歸豆之場合にも至候儀に付、旁別紙奉願候通、今般御暇拜領物等夫々被仰付候様仕度奉存候、尤右拜領物等被仰付候者共再度出府之上、歸豆之節に、別段御暇拜領物等不奉願候、依之此段奉願候、以上、

午正月

〔亞米利加應接掛 井上清直上申書〕
下田奉行 〇合原猪三郎筆記所載

安政五年正月二十一日

五四七

米使持參ノ
長持證文ノ
件

長持御證文之儀申上候書付

井上信濃守

一使節持參之長持四棹

右に、亞米利加使節儀、觀光丸御船拜借、其餘君澤形御船并魯西亞返上之スクーテル船共
貳艘拜借、差添支配向之内、其外使節供方之ものを共乗組、近々海路一ト先歸豆之積、尤使節
等夫々持越候荷物之儀を、右御船々に積入候儀差支候に付、陸路差立申候、就而を、使節出
府之節持參之長持貳棹之持人足、御證文被下置候儀之處、右出府之上拜領物被仰付、其節
右御品入長持三棹被下置、其後品々被下物等有之、荷物相嵩候に付、前書貳棹之外尙今般
拜領物入長持三棹并被下物等入候長持壹棹、都合四棹之持人足御證文被下置候様仕度奉
存候、依之御證文案を、表御右筆所に相達、此段申上候、以上、

午正月

御證文案

來ル十六日、受取申度候、

表御右筆組頭衆

井上信濃守

亞米利加使節一ト先歸豆に付、持參之長持四棹從江戸下田迄、急度可持參をの也、

午正月

御名

右宿中

〔亞米利加應接掛
下田奉行井上清直等上申書〕○合原猪三郎筆記所載

亞米利加使節を支配組頭に贈物之儀を付申上候書付

御届

井上信濃守

中村出羽守

下田奉行

支配組頭

若菜三男三郎

一銘酒壹瓶

右に、今般亞米利加使節御地より乗船をり、下田表に連越候節、彼是世話相成候趣を以、相
贈候段届出候間、兼而伺濟之通受納爲仕候、依之此段申上候、以上、

午正月

幕府、福江藩主五島盛成左衛門尉ノ致仕ヲ聽シ、嫡子盛德近江守ヲシテ家ヲ繼

ガシム。

〔老中申渡〕○内閣記録課所藏本
安政年録所載

安政五年正月二十一日

五四九

米使ヨリ下
田奉行支配
組頭へ贈物
ノ件

安政五年正月二十一日

五五〇

五島左衛門尉

名代 藤堂佐渡守(高橋久居補主)

嫡子

同 近江守

病氣之付、願之通隱居被 仰付、家督無相違、嫡子近江守に被下之、

正月廿一日、右於波之間、老中列座、紀伊守申渡之、○安政 年録

(溫恭院殿御實紀)

〔脇坂安宅日記〕○子爵小笠原 長生所藏本

正月廿一日、

一今朝評定所出座、大和殿、

一登 城前逢無之、

一四御太鼓之布平服登 城、四半之二寸前、○中 略、

一表廻り出懸、波之間列坐、壹万貳千五百三拾石余五嶋左衛門尉四十五 名代藤堂佐渡守、嫡子近江

守三十一、病氣之付、願之通隱居被 仰付、家督無相違嫡子近江守に被下之旨、紀伊守殿被

申渡、

五島盛成隱居シ嫡子盛徳家ヲ繼グ

〔福江五島家譜〕○東京帝國 大學所藏本

五島

盛 繁繁千賀 彈正

從五位下彈正少弼

文化六己巳七月晦日承統

同年十二月十六日敘任

後改大和守

文政十二己丑十二月二十四日致仕

改玄蕃頭

慶應元乙丑四月廿八日卒七十七歳

法名法蓮

女子

戸田淡路守氏宿室

運 善

繁 綱

盛 成万次郎

從五位下大和守

文政十二己丑十二月二十四日承統

安政五年正月二十一日

五五一

安政五年正月二十一日

五五二

同廿八日敘任

後改左衛門尉

嘉永二己酉七月十日爲城主

安政五戊午正月廿一日致仕

盛保 保五郎 金五郎

忠泰 銳吉

松平信濃守近信養子

牧野平右衛門忠興養子

後離別

女子

本多肥後守忠隣室

女子

内田豊後守正道室離縁後

再嫁堀田加賀守正誠

女子

齋藤攝津守三理妻

盛德 豊熊 孫次郎

從五位下近江守

安政二乙卯十二月十六日敘任

同五戊午正月廿一日承統

後改飛驒守

明治二己巳三月版籍奉還

同六月廿三日任福江藩知事

同四辛未七月十五日因廢藩知事免職爲東京府貫屬

女子

阿部駿河守正恒室

某 萬五郎 早世

源二郎

盛繁、文化六年七月晦日、家繼て、同し年の十二月十六日、從五位下の彈正少弼ふ任後、

のち大和守、文政十二年十二月廿四日致仕し、玄蕃頭と、あらとむ盛成り家をゆつりて、慶應元年四月廿八

日、七十七歳にて卒後、子万次郎盛成、文政十二年十月十五日、初て見えとてまわり、同し

年十二月廿四日、家繼て、わなしき廿八日、從五位下の大和守ふ任せ、後左衛門尉嘉永二年七月

十日、城主とある、安政五年正月廿一日、致仕し、子孫次郎盛徳、安政二年十一月十一日、初

て見えとてまわり、同し年十二月十六日、從五位下近江守ふ任せ、わなしき五年正月廿一

日、家を繼、後飛驒守、明治二年三月、版籍奉還せ、同し年六月廿三日、福江藩知事ふ任せ、わなし

五島盛成致仕シ盛徳封ヲ襲フ

安政五年正月二十一日

五五三

安政五年正月二十一日

五五四

しき四年七月十五日、廢藩ふよりて知事職を免せらる、東京貫屬とある、

〔安政年録〕○内閣記録課所藏本

正月廿八日、

一今已上刻、御表に 出御、月次之御禮相濟、

御白書院

家督之御禮

金貳枚
卷物貳

五嶋近江守

隱居之御禮

金馬代

五嶋左衛門尉

名代 遠山美濃守(友談、苗木藩主)

右畢布 入御、

〔脇坂安宅日記〕○子爵小笠原長生所藏本

正月廿八日、

御書院

五嶋近江守

家督之御禮

〔朱書〕
御太刀 二枚
卷金物 二枚

〔朱書〕
家督之御禮申上候

〔朱書〕
御太刀 金馬代

五嶋左衛門尉

名代 遠山美濃守

〔川越藩日帳〕○伯爵松平直之所藏本

正月廿九日、昨夜々大雪、○中略

一五嶋近江守様・同左衛門尉様・同御惣容様、近江守様同氏左衛門尉様御家督御隱居之御禮無滞被仰上候御怡、爲御知之御挨拶旁家來迄、御名々奉札遣之、(松平直院、大和守、川越藩主)

二十二日己未幕府、堺奉行關行篤出雲守ヲ小普請奉行ニ轉ズ。

〔將軍申渡〕○内閣記録課所藏本
安政年録所載

御座間

堺奉行

關 出雲守

〔高麗環雜記〕
溫恭院殿御實紀

〔脇坂安宅日記〕○子爵小笠原長生所藏本

正月廿二日○中略

安政五年正月二十二日

五五五

關行篤ヲ小普請奉行トナス

安政五年正月二十三日

一御座間御上段 御着座、○中略、

小普請奉行
岡田備後守跡

堺奉行

關

出雲守

五五六

右之通、御直之被 仰含、披露御取合等例之通相濟、

二十三日庚子 出雲國鳥根郡西川津村 推惠大明神二正一位ヲ授ク。

〔神階抄〕○孝明天
皇紀所載

推惠大明神吉田家
執奏 夏長作

推惠大明神

右可正一位

中務、威輝邦國、靈護人民、禋祀雖古、令德倍新、宜授崇位、用旌明神、可依前件、主者施行、

安政五年正月廿三日

〔中御門經之手記〕○侯爵中御門
經恭所藏本

正月二十日、酉、晴、○中略、

一吉田侍從(良熙、神祇權大副)入來、

神階披露被賴、廿三日披露、廿五日 神位記持參、廿七日御禮、

吉田良熙來
訪

推惠大明神
二正一位ヲ
授ク

右之通、商量之事被賴、

正月廿三日、子、晴、

一出門已剋、參入太閤殿、御法會着座已下伺書內覽、無思召、次參入殿下、同上、○中略、

一參 內、(清閑寺、權右中辨)兩寺御法會伺書、披露之、

一神階披露了、過剋殿下參入之便、內覽之、

一宣下事、吉田へ以捻文申入、參合ニ付直進入、

出雲國嶋根郡、推惠

大明神、正一位神階之事、

勅許候、仍而者申入候也、恐惶謹言、

正月廿三日

(吉田良熙)
新 三 位 殿

右於 神階者、御禮之義、兼而無參之旨、不書之、

一切紙躰、

安政五年正月廿三日 宣

出雲國嶋根郡

安政五年正月二十三日

經 之

五五七

神階披露

安政五年正月二十三日

推惠大明神

被奉授正一位記

職事經之

右殿下、武傳廻覽等之、

一上卿坊城黃門、兼而吉田方入魂之、

安政五

宣旨

出雲國嶋根郡推惠大明神

宜奉授正一位記

藏

奉

位記、來廿五巳尅、新三位亭へ持參之事、參合二付、直進入之、

一披露之事、無賴、武傳内見無之、

中奉書四折、美濃紙包、

出雲國嶋根郡

推惠大明神神主

藤原國重

消息宣下

右當社、正一位神階奉願上候、

尤消息

宣下願上候、例書別紙致注進候、

右一紙、

神階 宣下例、

陸奥國閉伊郡、荒神大明神、

天保十五年十月一日、被奉授

正一位位記、

右消息 宣下、

右一紙、右兩通、包一紙之、

此儘内覽、奏聞、殿下、寫呈之、

〔京都所司代通達〕

○東京帝國大學所藏本
九條家記録所載

○正月十二日武家傳奏へ

正月十二日、

出雲國嶋根郡、推惠大明神社正一位神階之事、彼社之神主被相願候間被執 奏度由、吉田

安政五年正月二十三日

神階勅許ノ
件關東へ通
達

三位書付并 宣下例書・神躰由緒書等、差出之、被相願候之付、被及御披露、勅許有之候
而、差支有之間敷哉之旨、先達而、被仰聞、則關東に相達候處、正一位神階之儀、勅許有之
候而、差支無之候間、其段御兩卿へ御達可申旨、年寄共々申越候事、

〔平田職修日記〕

○宮内省圖書寮所藏本

正月十五日、○中略

一吉田良熙卿々、以使、

出雲國嶋根郡西川津村、

推惠大明神々階 宣下ニ付、廿日中ニ柳宮御調進、

右之趣、申來也、

一右柳宮、木具八江申付也、十八日中、出來申付、

廿日、

一本多一、吉田良熙卿亭江參、

神階柳宮 一合

右差出處、金三百疋被渡也、

〔吉田家日記〕

○孝明天皇紀所載

正月二十日、○中略

出雲國島根郡、推惠大明神者、往古勸請社壇、松江城内御鎮座之處、中古西川津村山中半腹
遷座候、社邊古樹多生、尤數度靈驗有之故、領主格別崇敬之社御座候、所祭素盞鳴尊天之尊
根神御座候、

名古屋藩主德川慶恕

權中納言 後慶勝

幕府ノ諮問ニ對シ、外交措置ハ開闢以來ノ
重大事タルヲ以テ、勅裁ヲ仰ギ、之ヲ決スベキヲ答申ス。

〔名古屋藩主德川慶恕答申書〕

○公爵德川順順所藏本 防海雜記所載

（正親、名古屋藩家老）
今般竹腰兵部少輔を以、段々御懇諭之趣、謹而拜承仕、先以忝仕合御禮申上候、當今外夷之
事情、不一形深

御心痛被盡御廟護候旨、如何計奉恐察候、元より三親藩之儀を、御同一躰を、御休戚を同
く仕候儀を、申迄も無御座候得共、何分一大事件之義、且格別御懇之御事候得を、猶愚存
之趣無伏藏別紙に申上候、不惡御諒察御參考之一端にも相成候へ、辱仕合奉存候、

正月

尾張 中納言

○別紙

抑夷狄之慾を無厭、夷狄之願ハ難足、石炭薪水を求候々初り條約御取交、其後三港被開、又

夷狄ノ慾ハ
厭クナシ

外人ノタメ
多クノ港ヲ
開ク結果ハ
恐ルベシ

候五港、ミニストル都府ニ被差置方相願、
神祖以來外國にも轟居格別之御嚴制邪蘇之禁をも被解法、教拜所取建、踏繪をも被廢筭相
成、只今迄纔四五年を出以して如此、最初も至微より次第に蠶食漸進致候、既往之手振を
見候も、猶將來彌増、履霜堅氷之勢、明白に思ひやられ候、此上頻に切願仕候へ、遂に
老十港十餘港御許容も可及、墨夷如右候得と、魯蘭英佛を初、同様可相成、左候得者、彼
等方に取候へ、此方沿海に數十之列營を置候程之利便に御座候、是に多人數を籠置、剩
都府之ミニストル本國并右列營に、
皇國之動靜虚實を通達致候儀も自由なるを、右之通、彼に十分之形勝要害を被占取候
上、

皇國如何ふしても御許容難成至難之願望申出候節も如何可相成哉、若是を拒候得と、即兵
端を開、本國之軍艦列營之内應一時頓發するへ、眼前必然之理に相見へ、好亦左に無之候
共、右之通必勝之要害を構候上者、所謂柄頭を被握候如く、其上よてハ縦令兵を不用候も
も、或は厚利を以愚民を欺懷ケ、自然に年貢運上も彼に被致様も相成、又ハ奸商を手附
ケ、此方之大害を成候も、又不慮之候伯を扇動荷擔、又ハ無賴賊徒坏之應援を致し候も
も我國勢を傾せざるふ何之雜作も無之行届候様も可相成、縦令洋人ハ土地に懸念も無之

戦ハズトモ
外人ニ役使
セラレン

諸侯モ幕府
ノ措置ニ中
心悦服セズ

忠義士ノ痛
歎

信義ヲ以テ
外國ヲ制ス
ベシ

商賣筋計也ぞて、此方に於て備なくして不叶筋に有之、且右之通要害に相成候上へ、最早
不戦して彼に役使せられ、如何成難題を被掛候も、謹んで彼に命を守り候外無之、左候
得と、

皇國に取、死に勝り候耻辱を奉存候、深々御案思申上候間、是迄も遮り申達候儀に候得共、
追々御達相成候應接書、并今般群侯伯御呼出等之次第を以て、最早大半御決着相成可申、
群侯伯とても御威令に屈服致可申候に候得共、中心悦服之段へ、甚以無覺束奉存候、其
所以へ、一旦屈辱を忍候も、御挽回之期可有之見込に御座候得者、切齒時節を待可申、是迄
之御手續前文之次第を、其上當時夷蠻之法術を御信用、御主張之機微も相見得候間、終
に左衽之風俗も押移可申哉、忠肝義膽之輩も、竊に痛歎に堪兼候躰略相見へ候間、
種々の御説破を被盡候も、御虚飾遁辭とのみ汲取候半哉、此姿を往々、死を以守る之
節操絶果、御仕向にも拘り可申と御案思申上候、且斯る忠肝義膽之輩を痛く御取押へに相
成候へ、御國威之可奮様有之間敷、其御國威之不振方、御取廻し宜く之御見込に
御座候へ、不圖も秦其民を愚にせる之御手段に相運ひ、禍蕭牆に起る之恐れとも御案思
申上候、斯段々申上候得と、戦を好候様も可相聞哉、所詮ハ信義を被立候得と、俗に申
をり脅きの念慮絶、如何成蠻夷も感徹致し、内外御安堵之場合に可至儀と、夫而已祈候事

開關以來ノ
大事ニツキ
勅裁ヲ仰グ
ベシ

○御座候、乍併兵部少輔ヲ承り候趣ニテ、今日ニ至り、最早右等之儀申上候も、甚以心配
之趣申聞候得共、過慮難忘猶又申上候、御取捨ハ素ニ、思召ニ止り候儀ニ候得共、今般
之御一舉ニ、一ト通り之譯ニ無之、開關以來初發之大變革ニ付、斯御處置相成候も、能々
叡聞ニ被達、
勅令之上御治定素ニ有之御儀ニ可有御座、夫等之御手續、御進止之境、篤与伺置度、然上者
最早可申上様無御座候、猶兵部少輔ニ有之候も、可奉申上候、以上、

正月廿三日

〔海防秘聞集〕○維新史料編纂會所藏本

安政五年正月四日、

尾州ニ御暇

竹腰 兵部少輔

尾藩附家老
竹腰正諲ニ
歸國シテ幕
府ノ外交措
置ヲ藩侯ニ
具申セシム

亞墨利加使節申立候趣等相達候付、尾張殿ヲ兼テ被 仰立候趣有之候得共、其後應接之
次第も有之、然ル處當時御在國之事故、當地之模様并彼方之事情、十分ニ御承知難被成事
も可有之候間、尾州ニ罷越、御所置振を始、一躰之事情能々申上、猶思召有之候ハ、早
々申越候様可被致候事、

〔脇坂安宅日記〕○子爵小笠原長生所藏本

正月四日、○中略

一表廻り詰衆伺御機嫌相濟、芙蓉之間列座、尾張中納言殿家老竹腰兵部少輔ニ、尾州ニ相
越候付、御暇被下拜領物卷物五被 仰付、御序無之ニ付、御目見不被 仰付段、紀伊殿被
申渡、拜領物頂戴、附テ御禮、御奏者番取合相濟、御用部屋ニ引、

〔老中申渡〕○内閣記録課所藏本
安政年録所載

尾張中納言殿家老

卷物五

竹腰 兵部少輔

尾州ニ御暇ニ付、被下之、御序無之ニ付、御目見不被 仰付候、

正月四日、右於芙蓉間、老中列座、紀伊守申渡之、

〔溫恭院殿御實紀
高麗環雜記〕

〔徳川慶恕戊午春日記〕○侯爵徳川義親所藏本

戊午正月八日、

一二人前來、水府順達之由にて、墨應接書三通來、右之儀ニ付テカ、備中守より御内用之義
有之付、兵部少上尾之由申來事、夜雪、

九日、風、曇、

一今朝如例、○中略

安政五年正月二十三日

五六五

竹腰正諲ニ
物ヲ賜フ

竹腰正謚歸藩

建白書成ル

一兵部、十四日着之筈、申來、
 十四日、
 一兵部着、風邪ニ付、明日出、公邊御用申聞之事、今晚、(田宮如雲)桂園同人宅に相越候事、
 廿二日、
 一今朝、兵部出、建白書此通よて子細無之候旨申候付、其通達之事よて、不日ニ東行之旨申聞候、其節申聞候ハ、如此大形之義、此方同志之旨、申聞有之候、

〔防海雜記〕

○水戸藩記録
公爵徳川團扇所藏本

一當廿三日、名古屋カ申參候こと、去十八日、江戸カ竹腰家を被召寄、是迄急用こと一文字
 与申御飛脚參り候得と急變との儀ニ候處、今般早馬ニテ大ニ騒動いとし候、竹腰家主從
 廿人ニテ即刻出府有之候由、尾州家よてと大家ニ候處、右様少人數ニテ出府と、前代未
 聞之由、依之異説紛々御座候由申參候よし、

二十四日辛 鹿兒島藩主島津齊彬薩摩守 申テ幕府ノ諮問ニ對シ、朝廷

尊崇・將軍建儲・貨幣制復舊・武備嚴整等ニ關スル意見十六箇條ヲ建言ス。

〔鹿兒島藩主島津齊彬答申書〕

○公爵島津忠重所藏本
島津齊彬公文書所藏

此度亞墨利加人カ申立候書付、竝ニ御達書御渡ニ相成候旨、(伊達政宗、仙臺藩主)陸奥守カ廻達之趣、委細奉承知候、舊冬申立候通、格別御差支ニ不相成分考、速ニ御差許被仰付候而、萬端之御事も、御變革被仰出、當然之御時節と奉存候、併人心一和第一之御事と奉存候間、末々ニ至る迄、不伏之者無之様、當時萬國之光景、竝異人之事實、厚く御教諭被仰出度、且亦左之條々、乍恐奉申上候、

一朝廷御尊崇被爲在度事、

當時ニテも、御手厚之御事ニ被爲在候得共、加様之御時節ニ御座候間、今一段御尊崇被爲在度御事と奉存候、

一西城建儲之御事、速ニ被仰出度事、

第一、人氣一和之基ニ可相成奉存候、舊冬申上候間、委細不申上候、

一萬端之御法度簡易ニ被仰付度事、

昔カ法度繁きた、民之煩と承り候、漢之高祖之法を三章ニ極め候も、第一人望之爲と奉存候、

一金銀之位、慶長之昔ニ被復、物價引下け候様被仰付度事、

金銀之位いや一き時考、物價高直ニテ、諸人難澁之基と奉存候、其上外國御條約相濟

竹腰正謚出府

朝廷尊崇

西城建儲

法度簡易

金銀價位復舊

武備嚴整

候へ者、後年混雜之一端ても可相成哉、尤急て難被仰出御事と奉存候間、追り慶長之昔て被復候旨、被仰出置度奉存候、

一御武備嚴重て被仰付、諸大名にも急度被仰出度事、

御條約相濟候得者、何とふく諸人心弛と勝て相成候間、是迄も猶又嚴重被仰付度奉存候、

軍艦製造水軍設置

一堅固之軍艦御製造被仰付、水軍之兵士御取建有之度事、

外國人入込候に之、非常之御手當第一て之、殊に海上之御備無之候者、異人制御之義難整、海上不馴て之者、物之用て難立候間、第一て御吟味被爲在度奉存候、

兵器製造所建設

一軍器製造所御取建被仰出度事、

當時之光景て之者、諸大名面々製造仕候も、存分て製造難叶、殊に小身之面々、如何程志御座候も、難及自力、自然と手當等閑て相成候間、便宜之場所に、製造所御取建被仰付候也、願之面々に御下渡相成候へ、人氣も競立、第一御手當之爲可然御事と奉存候、

砲臺築造

一要所之海岸に堡砦御取建被仰付度事、

外國船渡來仕候者、非常之御備無之候者、人心動亂之基と奉存候間、御吟味之上

被仰出度候、

諸侯財政確立

一諸大名勝手立直候様、御吟味有之度事、

諸大名困窮て之者手當難整、乍恐御國之御弱とて御座候間、是又御吟味有之度奉存候、

開港場奉行格式昇進

一商法之爲御開港相成候場所之奉行格式被引上度事、

奉行之權輕く候者、外國人共自然と輕い候道理ゆへ、萬石位之處々被仰付度事と奉存候、

外國貿易平等

一商法御開て相成候上者、外國一同平等て被仰付、諸賣人共便利て相成候様被仰付度事、

諸國平等て無之候者、爭端之基と御座候、且又唐國之商人計之事也、譯も相變候得共、是又御吟味之上、寛容之御所置被仰付度、勿論異人に計寛容之御所置也、國民に是迄之とき御法度て之者、人心不伏之基と奉存候間、唐物嚴禁、竝に外國人に商法向き、御寛容被爲在度奉存候、

海外貿易

一外國に通船被仰付度、且右之御規定委細て被仰付度事、

御開港相成候上者、通船不被仰付候者、富國強兵之御計策難計、殊に外國事情も辨知難仕候間、外國事務之御役乗組て之、士商召列也、通船被仰付度、左候得者外國事實

不開港場制
限

金銀輸出嚴
禁
邪宗門停止

阿片禁制

安政五年正月二十四日

五七〇

も委敷相分り、乗馴候得者、御手當之爲可然奉存候、

一開港之場所者別段、其外に異人共住居、且貨物持越候儀者被仰付間敷事、

此節如何程御治定之相成候も、後年争端者必定と奉存候、まか官人者御約定次第

之事と奉存候、

一無用之貨物不持渡様之被仰渡、且金銀輸出之義嚴禁被仰付度候、

一邪宗門之義、彌停止被仰付度事、

一阿片之義、彌御制禁被仰付度事、

右之條々、誠之恐入奉存候得共、存意不殘奉申上候、尤此度御改革御成就相成候得者、五大洲制御手段、如何程も可有之御時節と奉存候間、乍恐御國中之光景を御吟味有之、外國事情、御照し合せ被遊候も、彼か我儘之申立之乗し、皇國萬全之御計策を御吟味之上、萬事御變革被爲在度奉存候、以上、

正月二十四日

松平薩摩守

是ヨリ先、福井藩主松平慶永越前守大將軍建儲ノ事ヲ高知藩主山内豊信

土佐守ニ諮ル。豊信、斡旋自ラ任ジ、有司ノ間ニ勸説シ、且京都遊説ノ策ヲ

立ツ。是日、慶永、潛ニ藩士橋本左内綱紀○景岳ニ上京ヲ命ジ、同横山猶藏壯克

ヲ伴ハシム。尋デ二十日左内、鹿兒島藩士西郷吉之助前名吉兵衛○隆永○後隆盛ニ上京ス

ルヲ告ゲ、幕府大奥ニ對スル斡旋ヲ謝シ、不在中ハ同藩士中根靱負師質

ト協力センコトヲ依頼ス。二十七日、左内、發程ス。

〔昨夢紀事〕

正月九日、○中略、

一、公、斯く迄は手配りあられしかと、猶いろ／＼と思召運らし給ふ内、兼而外藩の御方山内豊信、高

も申出されたらんにハ、閣老衆の托もはくも改りて善き事もあらんかと托ほせハ、松平土

佐守殿知藩主・立花飛驒守殿監官、御河藩主杯とハ、密々被仰合たる事も坐せしかと、事なくハ外藩よりかゝる

事口さゝれぬ程に、親藩にて事遂くへきの思召ありしか、昨今事急となりけるに、幸此日、

土佐守殿御出ありしかハ、猶深く御論議の上、土佐守殿にハ、明朝、備中殿へ御出ありて、

仰せ立らるへきに定りぬ、

山内豊信慶
永ヲ訪フ

因云、土佐守殿ハ是迄、御詰違ひに被爲成候故、御親しくもあらせられさりしかと、此

年ハ土佐殿御滞府あり、御合詰になりけるに、此候學問を好ませらる故、公の御徳誼を

慕はせ給ひ、御心易被成度との御事なれハ、去年秋比より松平相模守殿池田慶徳、鳥取藩主・立花飛驒守殿

松平土佐守殿前、山内藩主・松平大和守殿杯被仰合、大學の御會讀ありしに、此候學才の勝れ給ふ而

豊信ノ人物

安政五年正月二十四日

五七一

豊信岩瀬忠
震ヲ詰問ス

已ふらす、豪宕卓磊の御氣象あり、義ニ勇ミ信に篤き御方にて、土佐の御國政改革の事
 杯も公へ御相談ありて、莫逆の御交際と被爲成、天下の大義も御討論あれハ、此西城の
 事杯も被仰合たるなり、舊臘盡日、大家より亞米迺迺一條御相談の折も、於營中海防掛
 之方々と大議論を被發、當月四日にも備中殿へ御出にて、大變革の事を御議論あり、備
 中殿も大に辟易せられ、幸に岩瀬肥後(忠實目付)井上信濃(清直、下田奉行)參居候間、此席へ呼出すべく候間、外國
 の事ハ彼等と議せらるへしとて、兩人を呼出されたるに、岩瀬肥州を散々に難詰せられ
 たるに、肥州も怵らへぬ男なれハ、辯論を極め、互ニ聲高なる取合ひとなり果てしふけ
 れハ、備中殿ハもてあまし申され、時の太鼓の比になりぬれば、おのれハ登城し侍るへ
 し、猶論らひ給ひねと申棄て出仕せられしか、土佐殿ハ遂ニ言ひ勝れ、肥州屈服に及ひ
 しとぞ、さて備中殿ハ登城の上、今日ハ土州と肥州と大論にて、暫しハ刃傷にも及ふへ
 きかと、心遣ひせられぬと、物語(セノ下、脱カ)せれしとぞ、此侯の、近習の者を手討にせられたる事杯
 も聞及はれ、兼テ恐怖せらるゝ事を、公も聞知り給へハ、此侯の嚴然として建言し給ハ
 備中様の聞請も宜しかるへしと思し合されて、旁御談しあらせられしふりけり、飛
 驒殿(もカ)と有志の御方とハ稱れと、土佐殿にハ痛く劣られし御方なり、公も左迄に御親敷ハ
 坐さゝるなり、

中根師質ヲ
豊信ニ遣ハ
シ堀田ト會
見ノ狀ヲ訊
ネシム

正月十日、今朝土佐守殿、備中守殿へ御出有けれハ、其折の御様子如何有けん聽かせられ
 ん爲(中根師質、福井藩士)、師質を土佐守殿へ指出され、午時計りに参りたりしに、やかて侯御逢ありて、今日備
 中守へハ、昨日も越前殿(松平慶永、福井藩士)と御談ニ及ひたる如く、大義を宣へ公論を立て、動きなき様に申
 立たれハ、備中ハ辟易して、唯御尤々とのみ答て何の申事もなかりし、されと西城の事
 當時の急務たるハ、思ひ入たるさまに見えたるなりと仰ありしかハ、其段罷歸り申上たり
 しに、公笑はせ給ひ、さる事ならんとおもひしなり、それやかて吾一策を施すへき根種
 ふるハと仰セありけり、

正月十三日、○中
略、

一、同朝、師質を土佐守殿へ被指出、昨日備中殿にて御應答の御次第を被爲聽度との御事な
 り、土佐守殿御逢ありて、昨日は手強き事ハ申出さず、根問葉問して十分ニ押詰見たるに、
 いつになき尤々と計りも不申聞、備中も色々申たるか、其内にも越前殿へも御相談あ
 りし事歟と申せし故、一應ハ相談見しかとも、同人ハ不承知にて取合はず、元來親藩ハ申
 立へき筋なるに、越前杯か不信心ニハ致方なかりし故、外様ながらも寡人か家ハ親藩同
 然の御由緒も有之事故、不顧恐申立る趣に申せしかば、越前殿不承知かと毎度問返へし、

再ビ中根ヲ
豊信ニ遣ハ
シ堀田ト對
談ノ始末ヲ
訊ネシム

大に安心の様子に見え、詰る處兎も角も急にすべき事也との勢へ身に染て見えたるなり、全ク越前殿御説破ありし引續故、かくハ有たるふるへけれど、大に頼母敷見えたる間、其段申上よと被仰たり、公ハ反間の謀稍行はれたりと歡はせ給ひき、

堀田上京ニ
ツキ豊信ニ
京都へノ周
旋ヲ希望ス

事の序に、土佐守殿へ被仰越しハ、此度備中殿初上京ありて追々申上られたらハ、叡慮御安著ハ可被爲在御事ながら、京師の御模様も色々に聞ゆる事も候へハ、如何なる障碍出來なんも計りかたけれハ、當時三條内府公ハ長々武家傳奏も御勤て、(實萬)縉紳中にて賢明の聞え高く、土佐守殿御近親之事にも候へハ、此御方へ御服心之御家臣を被差登、此地の事情を熟く御示諭ふし置れふハ、備中殿奏達之條理

豊信ノ家臣
ニハ上京周
旋ニ適當ノ
者ナシ

朝廷之御聽受もよろしからんか、此事もし指纏れなハ、關東にて内外彼是御不都合之事にも及へき哉との御相談なれハ、其旨土佐守殿へ申上しに、首を傾け給ひ、良久御勘考ありて、越前殿御心付の旨ハ、誠に然るべき事にて、御同意にハあれと、余か家臣に差登すへき程の者おもひ得ず、こハ恥かしき事ふからせん方なし、越前殿の御家臣に然るへき者候はずや、ありて登されなハ内府手前ハ土佐守存意も申含、宜様に取計らはんとこそおもへ、其よしはこれより御談に及ふよしを申上よとの御返答なりき、

一、土佐守殿へ御相談ありし京師の事ハ、公豫ておもほしよりたる御事にて、墨夷の御取

計を付てハ、京師でおゐて關東之御沙汰以外の外よて、

堀田ノ京都
不首尾ハ西
城一件ニモ
影響スベシ

宸襟安からさるふと、端々聞えたる事もあれハ、此度備中殿の御上京ハ、關東の御榮辱にも拘はるへき御大事なる故、朝廷の御首尾如何あるへき哉、自然事の纏れとなりて、備中殿の歸府延引に及はんにハ、諸端の不都合ハ元よりにて、就中西城の御一件などハ、大なる妨害も出來ぬへけれハ、如何にもして上方の一件早く事済ぬへき様にと、深く御憂慮坐すといへとも、備中殿を初歴々の有司、川路左衛門尉、岩瀬肥後守上らるゝ上は、言加へ給ふへくもあらねハ、京師の方人となりて、京師を援るふりして、關東の事情を解釋する手段もあるへき歟と思召せとも、上方へハ然るへき御手筋もなけれハ、幸に土佐守殿ハ三條殿の御掣なる故、其策を仰越されしかと、土佐殿の御返答も亦よきなき御譯に聞ゆれハ、御内人中にも、かゝる御使に遣はされん人ハ多くもあらねハ、おほし煩はせ給ふに、橋本左内ハ先年京攝の間に遊歴して、知己も少ふからず、外國の事情も心得、且才覺も勝れたれハ、此者を遣はさるへきと議せられたり、

橋本左内京
都差遣ノ議

正月廿二日、(忠岡、老中、上田藩主)松平伊賀守殿へ御出、御逢對にて、公仰けるハ、此比備中殿の申さる旨にてハ、兼々冀望致候建儲之義も御伺濟に成たるよし、全く兄にも力を用ひられたる故なるへ

慶永松平忠
固ヲ訪ヒ建
儲ノコトヲ
談ズ

繼嗣ノ人選
ニツイテハ
閣老モ苦心

暗ニ慶喜ヲ
推スノ意ヲ
述ブ

水戸老公ノ
態度緩和ニ
努メラレタ
シ

安政五年正月二十四日

五七七

くと深く歡ひ思ひ候ひぬ、備中殿にも御人柄の儀ハ申されず、こゝ左もあるへき事候へハ、寡人も問ひ候はず、是迄も此一件ヲ付テハ不敬之過言共も申立候ひて、今更恐ある心地に候と御申述ありけれハ、伊賀殿まづ御評議寄りにふり侍る事恐悦之至候得共、夫に付テハ兎角に心痛の事も候ひぬと申さる、公夫ハ如何なる御事カ難量候得共、建儲之儀を被仰上、御人柄之御撰ハ 台慮に任され候半には、さしたる御心用ひは有るまじき事にやと御申有けれハ、伊賀殿されはの事に候ひぬ、 台慮次第とハ申もの、御人柄の事に付てハ、奥向昵近之向なと六ヶ敷申立侍りて、殊ニ骨を折り候ひぬ、 台慮に任セ奉ると申事も、凡伺取の次第も有事にて、南紀ハ幼若にて六ヶ敷と、人望有之御方と兩方に分けて伺候半に、公にハ如何おほしめされん、譬へハまつき物計りならんにハ、其中には善きを取りても濟へけれと、むまき物とまつき物と双へて有んにハ、公にはいつれを取りて聞召すへきやと申さる、 公、然承り侍れハ何事も心得候ひぬ、此上最早申へき事も候はずと申させ給ふ、夫々伊賀殿カ刑部卿殿の御孝心の厚く坐す事抔言出られて、夫に付ても恭廟御代の儀、同殿の如く老公の彼是と御申ありてハもてあつかひかね給ふなれハ、公は兼テ御懇こも坐すよしなれハよきに計ひ給ふへく頼と聞えらるゝ由なとも、語られし故、公ハいつも申させ給ふ如く、老公の御事ハ寡人に任かし給ひぬ、各のおほさん様と

大奥方面ノ
故障多シ

豊信來訪繼
嗣問題ノ前
途ヲ樂觀ス

安政五年正月二十四日

五七七

もかくも命チにかけて取計ひ可申旨を申させ給ふ、 公又此建儲之件表立て仰出されん事ハ、秋頃にも成候半やと、態と延々敷申試させ給ふに、伊賀殿さるのひくしき事にてハ候はず、備中たに歸り侍れハ、やかて仰出さる事にもなり侍るへし、されと近比となりて外藩を初、外御役人共迄も餘りに騒々敷申立る事になりぬれハ、備中か居らぬ程ハ、暫し何事もふき体にて伏せおきて、歸りたるを際に、其事に取懸り侍るへき心構に候なり、表御役人ハ何れも異議無りしかと、奥向にて何くれと障り多くて心焦られ侍りぬ、こハ極めたる秘事にハあれと、 上にハ何の思召もあらせられず、伺も濟さハ直に濟へけれと、上なき重事にも候へハ、御考ありて仰せ出されん方、よろしかるへき旨に申上たる事に候ひき、ふと猶機密の事共も物語られて、 公にも漸御心安着^テて御歸殿ふり、伊賀殿の申されたる趣にては、御人柄の事も定かふれは歡ひ思召事限りなし、 一、此日、御談之事ありて巳ノ時はかりに土佐守殿御出ありて、公の伊賀殿よりの御歸館を御待受あり、さて伊賀殿の申されし様を、 公より密に告させ給ひけれハ、土佐守殿ツト御坐を立せられ、扇打開らきて天下の事定りぬ、あな嬉しあな歡はしと二度三度舞蹈し給ひけり、師質も其席に在て、土侯の忠貞にして洒落なるを窃に感服し奉りたり、土侯かくの如くに候へハ、 公の御歡ひもまた推し量り奉るべし、さて土佐殿との御談ハ、三條

三條家ト山内家ノ關係

説客ノ上京ヲ欲ス

左内ニ上京ヲ命ジ横山猶藏ヲ伴ハシム
豊信左内ニ京都周旋ニツキ注意ヲ與フ

安政五年正月二十四日

五七八

(前ノ一文字ナラン)
前内府公ハ土佐殿の御舅君にて、當時京師におゐて囑望の御方ふるが、兼而關東に於て外國の御取扱方のよからぬ故、京師にてあし様の風説ある趣なと、土佐殿へ申越されたる事もありて、京師の専ら攘夷説のミ行はるれハ、備中殿上り給ひても容易に事ゆくへくもおほされず、夫につきてハ兼而も御談しありし如く、遊説の客を一人遣はされ度との事を御申出あり、公にもおほし設られたる御事なる上、備中殿の歸府遅くなりてハ、建儲の事も仰せ出されかたく、公にハ御歸國の御時節ともなりて御遺憾の御事なれハ、旁京師の事早く濟べき様ころあらまほしけれと思召ハ、様々に談し合給ひて、彌左内を遣はさるべきに議り定め給ふ、

正月廿四日、橋本左内へ上京の事を被命、されと世人の聞きおもはん所も有れハ、表立てハ左之通に師質より申渡せり、

橋本左内

航海術原書爲取調、出坂被 仰付、御用濟次第、早速罷歸候様仰付、

但、横山猶藏儀も致同道可然事、

一、此夕、土佐殿より左内を召されて、京師に於ての事共を仰せ含められたり、
正月廿五日、此夕も再ハ左内を土佐殿へ召て、猶又被仰含儀共ありて、三條公への御直書、

左内發途

并同御内諸大夫森因幡守へ之御直書御渡あり、

正月廿七日、橋本左内、横山猶藏・溝口辰五郎同道上方へ發足す、猶藏ハ左内之門人にて、口才ありて應接に長せし者なる故に、同伴セリ、辰五郎ハ少年の寄宿生也、

○二月七日、橋本左内京都ニ至リ、九日、内大臣三條實萬ニ謁シ、海外ノ情勢ヲ述べ、將軍建儲ノ急務ナルヲ説ク。其顛末ハ之ヲ二月九日ノ條ニ收ム。參看スベシ。

〔中根靱負書翰〕○橋本左内全集所載

(上京ノ由渡書)
別紙の通被仰付候間、呼出申渡候趣に可被心得候、以上、

正月廿五日

中根靱負

橋本左内様

〔橋本左内書翰〕○橋本左内全集所載

○正月二十六日鹿兒島藩士西郷吉之助宛

御直展

拜呈、然ば過日は毎々御苦勞相成、御蔭内廷の御都合逐々宜御模様、千萬御同慶に奉存候、逐一言上仕候處、小拙より宜了得御意旨被申付候、偕、爾後例件御都合別に相變候事は無御坐候、不相替世評は紛々に候得共、所要大本は動搖不申鹽梅、實に頼母敷と存居候得共、

安政五年正月二十四日

五七九

大奥ニ對スル斡旋ヲ謝ス

内用ニテ歸
藩不在中ハ
中根ト商議
セラレタシ

何分大切の事故、寸歩も見放は出来兼候、殊更人情反覆可恐義と奉存候間、此上とも厚御盡力爲國家奉願候、且又、今般弊國內用に付、國元早驅に而罷越、來月下旬迄留守に相成申候、留守中は中根鞞負と申候同志より、萬端御掛合可申上候、此人には小拙同様御打明被下、聊仔細無御坐候、此段出立前以參御頼談可申上存居候得共、逆も其暇なく、不能已以書中得御意候、尤、國元行他へは秘居候得共、極御同志の中故、乍密々相洩置申候、此條御含可被下候、尙、委細は歸府の上萬緒可申上候、乍憚、堀兄（仲左衛門、鹿兒島藩主）へは宜御傳聲奉願上候、右得貴意候爲、早々頓首、

正月廿六日夜認

追而、中根は萬事貴兄の事相咄置候、寡君も承知の義に御座候間、吳々御勞心なき様奉願候、偕、今朝日下部兄御光臨の由、然る處、外向へは不快と申相斷候様、取次へ申付置候故、御人柄も不辨無譯御斷申上候由、實以赤面恐怖の至、何れ他日面謝可仕候得共、此儀貴兄よりも宜被仰上候様相願申置候、實以同志中は不包相語度事に候得ば、必、小拙虚を設御斷り不申上條、御陳告可被下候、何分時候御厭御精勤の程奉希上候、以上、

〔高知藩主山内豊信書翰〕○吉田東洋所載

○正月二十四日内大臣三條實萬宛

幕閣米使ノ
要求ヲ容レ
ントス

禍蕭牆ニ起
ランコトヲ
恐ル

幕府ノ外交
處置ハ已ム
ヲ得ザルニ
出ヅ

○前、登城捧簡之御沙汰に相成、其後閣老衆諸有志及應接候内、彼儀（米國使節ハリス）秦之三寸を奮、或は虚喝を雜、不得已之勢に申立、此節は廟堂衆議も彼可申立通、大抵御許允有之候様奉推量候、然に舊臘御外藩之者も不殘登城被命、僕も登城、閣老衆え面會仕候處、墨國貿易・諸州開港、其他御大政之御變革等被仰出候得共、虚飾を以非を掩候様に而、人心愈解體之姿に相成、僕抔も、此上爲關東良策は存付無御座、萬一事起候節は、平生之赤心、帝城を御警衛仕候より外無之と覺悟極居候、然に方今洋夷垂涎覬覦之時、禍起蕭牆候而、徳川家之滅亡は第二等に而、自然皇國之大患引出候と奉存候、因而越職出位之迂論には御座候得共、墨夷申立一條、御伺に相成候節に、閣下御心得之愚見、別紙に相記奉呈研北候、頓首再拜、

正月廿四日

別紙

謹白、今上天資御英明被爲在候儀は、僕窃拜承仕候、此度關東之所置も、叡慮には決而不被爲稱御事と奉存候、關東に而も不得止、只今之勢に相成候處、俄に御英斷を以、不辱國體様の 叡慮出候而は、將軍家信を被失、彼必兵端を相開可申、又信を不失様にと存候得は、奉背 叡慮、右抵左梧進退窮可申、左様相成候而は、天下之人心瞬息之間、土崩瓦解危疑候は瞭然たる様奉存候、乘此之時、洋夷輻集仕候へば、徳川家は不及申、皇國

安政五年正月二十四日

五八一

叡慮ヲ以テ
外交措置ヲ
幕府ニ御委
任アルベシ

安政五年正月二十四日

五八二

之瘦勞殆不可救に至候と奉存候、此上は拙劣不斷に而、最下策之様に御座候得共、此處は飽迄御宥恕之、叡慮を以、關東に御任せ被仰付度伏而奉冀、乍併、何時頃も彼に屈膝候を甘心仕候はゞ、日本之大辱、雖愚夫憤激之至御座候、因而關東に富國強兵之儀、屹度被仰付置候様奉存候、其策は則別紙越前之建白尤に御座候故奉入電覽候、已後彼猶又貪欲無厭之心を以、皇國併吞之志相見候時、曲直分明なる所に而、斷然と御拒絶に相成、固有武威海外迄も御示被仰付候得は、當今屈膝も伸、白虜却而恐怖候様相成候と奉存候、頓首、

念四

又白、此度之一條、同列えも極密に仕候様被仰付越奉承知候、然に件々國家之大事に而、獨斷仕候も畏縮、幸松平越前守は、僕一見如舊知己に御座候故、一昨日參り極密相談仕候處、同意に而別封之建議、此度廟堂に差出候寫に御座候、同人は天下之賢才有志に而、僕倚頼之者に御座候故、漏泄之御患は決而無御座、不一、

〔高知藩主山内豐信書翰〕

○吉田東洋所載

○正月二十四日三條家諸大夫森寺常安宛

春寒之候、御無事珍重に存候、然者此度松平越前守家來橋本左内と申者、(三條實隆)内大臣に拜顔仕

左内ノ三條
公面謁ニツ

慶永ノ意見
書寫ヲ呈ス

キ執成ヲ依
頼ス

度趣願出候、右は全く越前守(松平慶永)何か密用申上度由に付、是非御逢候儀、土佐守よりも奉願候、因而其元にも、右之段頼申候、不一、

正月念四

土佐

森寺因州

(常安)

座下

〔福井藩士吉田悌藏書翰〕

○橋本左内全集所載

春禧御同様目出度申納候、先以上々様、益御機嫌克被遊、御迎陽奉恐悅候、隨て愈御安康被成御越年、此表御留守御一統御揃御安全御加壽、重疊目出度奉賀祝候、次に碌々瓦全乍憚御安意可被成下候、右歳首御賀詞爲可得貴意如此に御坐候、猶期永陽之時候、恐惶頓首、

正月廿六日

吉田悌藏

(飛、東雄)

橋本左内様

梧下

再伸、目出度申納候、楮、舊年來は意外の御無音失敬御用捨可被下候、當境早春より折々火事沙汰、一昨々日は御留守も誠にあぶなき御事、折節北風烈敷、是非共橋詰迄はなきもの

安政五年正月二十四日

五八三

墨夷一件ハ
難問題

に致し居候處、先々及鎮火、御同慶此事に御坐候、拙宅、早春四五軒隔て失火、間違なく烏有と存候處、是も幸に逃れ、大慶致候事に御坐候、

一、儲、墨夷一件追々六か敷御様子、嘸々御惱慮遠察事に御坐候、偏地においては、猶更一便々々如何相成候哉と、兼て覺悟とは申ながら、憤悶御推察可被下候、是迄、天下の事心上にかゝる事多々御坐候へども、此度程に迷亂致候事は無御坐候、舊臘も猶藏子迄御傳言申事にて、千古天下一變革に候へば、尤角（應）あるべき筈とは奉存候へども、實に工夫の至らざる慚愧の至、黍離云、知我者竭我心憂云々、悠々蒼天此何人哉、實に諸人忠厚の情、角あり度事と、又々思返候事に御座候、夫に付去暮、野村淵藏兼て京地に罷居候親類共、病氣に付上京致候に付、此度林家の上京、京地光景逐一申越候様に申遣候處、當廿日立京飛脚（下）に別紙（揚）の通風説相認相廻申候、萬一御心得にも相成可申哉と寫取御廻し申候、京地にては林家の上京をアメリカの來る様に被思召候と相見へ申候へ共、趣意と申せば、ミニストルを京都へは御指留と、大坂近邊に代港御難澁の二條に出でずと存候、ミニストルは御指留に相成様子なれば、大坂邊代港一條に候へ共、主客の勢、堀田侯も江戸表にて處置被致候とは事替り、萬事其都合には參る間敷、殊により六ヶ敷義、出來不致とも不被存、天下の勢、どうしても致方無之と申さば申され候へ共、縉紳家の内にも列藩君侯の賢否、其外人物有

野村淵藏ノ
京都報告書
寫ヲ送付ス

堀田ノ上京
モ成功覺束
ナシ

縉紳家活動
ヲ始ム

無抔、極内調られ候様子、其間には事の間違も出來可申、蕭牆の間、却て氣遣敷、京坂へも御手廻り候て、少し氣のある人指出し置度事に御座候、是に付ても鈴木（主税、安政三年二月死）の遠行、御互に残念至極、兎に角浩嘆の至、餘は永春と、早々縮筆、目出度、可祝、

別 啓

市村、村田子（白三郎）今般御登用、御同慶、今壹人定て御地にて出來候事と奉存候、此間人才無之ては、分襟の節も御咄の通り、是非共片つりに相成可申、前條天下の勢餘り迫り候へば、少々人心も落着させ度事に御座候、

一、京地光景

主上は乍恐餘程御シツカリと申御沙汰、栗田口親王（尊親大親王）も中々御タクマシク被爲在候様承候、未だ地に不落所有之候哉と御行末念禱、何分夫となく少々氣のある人を京坂へ御出しに相成候様專禱致候、別紙薩州は悉く手が廻り申候、夫而已ならず御宣候へば、猶更御察申候へば、御勘考所祈御座候、以上、

○本書中ニ所謂別紙ハ、下ニ掲グル野村淵藏報告書ヲ指ス。

〔福井藩士野村淵藏京都報告書〕○標本左内
全集所載

○正月二十日同藩士吉田悌藏へ

安政五年正月二十四日

人ヲ京坂ニ
出スベシ

京地光景

林家上京に付、京師にて承り候廉々、其餘は風聞、

一、林大學頭殿、十二月下旬廿六日上京有之、關白殿へ對面致、夷情の次第を申上、達
 叡聞候上にて、叡慮を以諸侯方をなためられ候積りの處、案外、關白殿御逢無之、所司代
 屋敷において傳奏方斗言上の趣御聞被成候御積りにて、林家御召有之、逐一御聞有之候上
 にて、間違候ては不宜候間、書取に致し可指出旨にて、正月二日書取出候由、其書取は未だ
 手に入不申候得共、其趣意は、舊冬、江戸表において異人と應對の次第の由、其内一二ヶ條
 は傳奏より御尋有之候由、我等存意にて尋候筈には無之候得共、氣付候故相尋候との事に
 て、アメリカ申立の趣、我國を大切に存候よりの事に候へば、ミニストルを置き、初め尤ら
 しく候へども、ロシヤ初諸夷又々申立候儀は必定、其處置は如何いたし候哉を御尋有之候
 處、御答六か敷御様子、又代港は何方へ致候哉と御尋の處、異人よりは大坂の事も申立候
 得共、大坂は差留、堺なりとも致し候と御答有之候處、堺は大坂よりはいか程違ひ候哉、兼
 て申達置候通、浪華并近國は可相除と申置候處なり、如何に候哉と再御尋有之處、それも
 御答出來不申と申事、其餘大抵準之候様子、右に付林家ことごとく意外に相成、其趣江戸
 表へ申遣候と申事に御座候、又黃白も夥敷持參の處、とんと不行候との沙汰に御座候、又
 傳奏御問合の内、夫にては御國も合衆國に相成候にては無之哉と被申聞候には、林家一向
 不申候、

林傳奏ノ
質問ニ答フ
ルヲ得ズ

御返答無之と申事に御座候、

一、尾州侯より林家上京以前、近衛殿へ御直書被進、御都合宜敷候由、
 一、水戸老公よりは、太閤殿へ御直書被進候由、是も林家上京以前の由、
 一、長州侯よりは、久我殿へ御直書被進候由、其外にも有之候と申事に御座候得共、相分り
 不申候、

尾侯水老公
ヨリ京都へ
直書ヲ贈ル

一、御國よりも、定て何方様へ御直書等も被進候哉と、人々申居候由、
 一、異人より 禁裡へ別段に書翰指出候と申事に御座候、其文體は格別丁寧と申事、併其
 書翰未だ京都へは御指出無之、至て祕して有之と申事に御座候、

一、ミニストルを都下に置度と申事も、京都にも置度と申事の由、沙汰仕候、
 一、關白殿下を初、縉紳家には、御老中相見へ候共、ミニストル京都に置候事と、港を大坂
 近邊に開き候事とは、御指留の御積の由、

一、先日江戸表より被差出候書面の内、列侯諸藩に至る迄人心居合候様云々は、取おさへ
 被申候御積りの由、右に付、事により候へば、諸侯方の書上も京都へ御引けに相成候も難
 計、又いよ／＼六つか敷相成候へば、諸侯方をも京師へ御召立に相成候も難計と申事に御
 座候、なか／＼大變の事に御座候、

公使ノ京都
駐劄及附近
開港ハ關白
以下不同意
朝廷ニテ諸
侯ノ意見ヲ
徵シ或ハ召
命ヲ發セン

安政五年正月二十四日

一、此迄所司代交替又は御用にて、御老中上京の節は土佐屋敷にて相濟候處、此度は本能寺へ被入候よし、右に付此頃は普請最中と申事に御座候、此度は御老中も長々被居候積りかと、申沙汰に御座候、

一、此度の上京、堀田侯、川路左衛門尉其外九かしらと申沙汰に御座候、日限は相分り不申候へ共、當月中には上京の沙汰に御座候、大體廿六七日と沙汰いたし候、

一、舊冬江戸表上書の沙汰、肥後侯の御書上第一と申沙汰に御座候、此度は溜りの間御書上もよろしき様に沙汰仕候、

右正月二十日認

別條

一、兩傳奏方御沙汰甚宜御座候、關白殿には不相替餘り不宜候、

一、薩州侯より極内萬一の御用途とし、二萬金計も被指上候様に承り候、

〔水戸藩士〕安島彌次郎書翰○橋本左内全集所載

拜啓、餘寒退兼候處、愈御勇健可被成御奉職、欣喜之至奉賀候、其後は取紛れ心外御無音の段、御容恕可被下候、偕、御呼付候様何共失敬至極に御坐候處、彼の一事に關係内密相同度義御坐候に付、御都合相成候は、明日・明後日兩日の内、御枉駕相願度奉存候、此程參上

左内ニ來訪ヲ求ム

兩傳奏及關白ノ世評薩州侯獻金ノ風評

心掛居候處、少々痛所出來引込居候に付、無餘義失敬を願候事に御坐候、右兩日の内に御坐候へば、痛所失禮の風情なから、何時にても在宅仕候に付、御繰合奉願候、萬、拜眉の節と、此段草略得貴意候、以上、

正月廿二日

安島彌次郎

橋本左内様

〔福井藩士〕村田巳二郎書翰○橋本左内全集所載

○正月二十四日橋本左内宛

新春の御帖相達、辱拜見仕候、先以、上々様益御機嫌克御座被遊奉恐悅候、隨而御安健精勤被成奉拜賀候、自舊臘御勝れ不被成、御引籠と承候得共、此節は定て如舊時に刻々内外の事務御彌縫御勤精と奉存候、兎角天凍日陰の候、有志の氣體尤御障候事にて可有之、何卒自此南風薰釀、氣候も相定り候様萬々所希候、返すく爲天下折角御愛護御座候様奉祈候、墨夷應對一件何共口惜次第感憤の極奉存候、然る處、此危急に臨て誰有て維持の力を伸候者無之、實に一髮千鈞をひく勢と奉存候、士氣の消沮古今無比と奉存候、他は姑く不_基論、當時戚族重望、擧て天下有志の所奉仰の我藩に於ては、實に急流中底柱にして、極めて紀綱振擧・皇道挽回の爲に、充分御努力御周旋不被盡候ては不相濟事に奉存候、右に付、張

福井藩ノ地位重シ

安政五年正月二十四日

西城一件更ニ奮發ヲ要ス

安政五年正月二十四日

五九〇

谷申談、諸執政へ仕懸、當今危急に臨、於我藩は御周旋の廉々、不被殘餘力、十分御努力無之候はては、不相濟、尤西城御事に付ては間然無之御義に候得共、其他一切御行届と申にては有之間敷、たとへ御名望御建白等は何程御格別に候共、今一層充分御擔當御盡力無之時は、御祖先へ被對候て御孝道盡不申、天下の有志も失望解體、且御面目有之間布、萬一如此に候ては、爲臣子者死而有餘罪、此般國家の御大事、如何可被成思召候哉と、申出候處、諸執政何れも忠義慨然被致候て、此なりにして置候ては決而不相濟、何分にも今一層後日の遺憾無之程は盡し申度事と、被申候故、下拙申候は、左候は、今一層充分御周旋可被成に付て、御熟評の上、嚴敷江戸表へ被仰上可相成云々陳述仕候處、執政、是迄相認候處、明廿五日、御用に付罷出候様、御切紙頂戴、忽卒御請に罷出候、偕、昨年兩度まで、無比の蒙、恩命、未知所奉報、萬一、實に惶懼罷在候處、又復明日の降命を蒙り、彌増痛心の至に奉存候、悉く領承、大に義勢宜敷御坐候、委細は今便自執政可申參候、尙又、愚存は雪江君迄申候、偕右充分御負擔被成候て、毎々御建白の如く、愈廟堂上着實御施行可相成候迄御仕詰被成候は、眞正英雄の御手段に無之候はては、決して不相成奉存候、然る處御剛斷は一寸御不足に被爲在候へば、此の邊は老兄専ら御任被成、幕府諸有司御引合を始、有志の列候愈忠義一途に盡力候様、是は老兄例の驚天動地的の御手段を以、充分御幹旋御坐候様、爲天下國家奉萬願候、偕又、上之御釣合と、方今の勢とを相考候へば、上の御釣合は、衆人惑亂中へ御駈入、群動忽靜然致候程

藩侯ヲ輔ケ活動センコトヲ望ム

因循姑息說ヲ除クベシ

慶永ト幕閣ノ關係

進退ノ要ハ大義ヲ明ニシ皇道ヲ回スニアリ

には、乍恐不被爲入、方今の勢は、姑息折合等の說、日々益々浸淫滋潤致候て、遂に自我權欄を被失候事と奉存候、故に此邊を救藥するには、一日にても指急ぎ引返度事に御坐候、然るに苦藥瞑眩せば、當年御滯府の命、今一層進んで御參謀と參り可申、左候得ば爲天下幸甚、然共、水龍公先蹤を以て愚考仕候得ば、他は徒らに天下屬望の重きを取る計り、又姑く有志の心を慰し候のみにて、廟堂上眞實に御委任と申義は少も無御坐、故に廟龍兩ながら失し玉ふと奉存候、兎角右等の半上落下疑似顛覆之地に立て、遂に能大義を昭明し、正統を挽回するに至つては、唯唐の狄仁傑之を善す、其愚不可及所と奉存候、故に幸に廟議御滯府等の命有之候共、姚崇の十字約を以て鑿とし、龍公前日の參謀を以て、警と爲べき事と奉存候、此般の進退驅引悉く其可に當り、所要は大義を明にして、皇道を回すに至り、所謂、糾合諸侯・一匡天下・齊桓管仲之力也、仲のする所、老兄自ら其略あり、偏に爲皇國充分御幹旋の所奉萬祈候、先書自是捨身變形、彼ペートルの志に倣ふと、益御雄心は慨嘆の至に御坐候へども、是非々々今度は、前文の趣に御決心御座候様、吳々所希に御坐候、是小子一身而已ならず、東葵張谷邊一致同契の必論に御座候、此段可然御聞取可被下候、

一、方今の事務、如右御引受候て、當年の所、東地に御居殘等否やの義は、御地の御手都合

安政五年正月二十四日

五九一

大野藩洋學盛ナリ

に被成候て可然御事に御坐候、偕、夫に付、洋學の事先書御引受可被成云々の仰の通りに、重々の御世話に奉存候得共、御托可申上哉、此邊は如何様とも御再考可被下候、近邊山本(九郎三郎、立三)庚、洋學爲致候處、大に奮發、是非御地へ出、一修行仕度旨内達に及候、且又加賀・井原邊も、頻りに東地遊學願達有之候、近頃大野藩洋學大に被行、六拾人斗も生徒有之候由、加賀義は東地又は此方なりとも參り、無他念修行致度旨懇願に御坐候、大野の方は一通り承候所にては、隨分盛んの趣に聞え候へども、未委細の事は相分不申候、右三生の事抔も、宜御勘考の上、重便可被仰下候、

正月廿四日

村田巳三郎

右は取込中、追々相認、甚亂筆、前後御推覽可被下候、以上、

○附録

〔村田巳三郎書翰〕○補本左内
全書所載

新禧千里同風目出度申納候、先以上々様益御機嫌能遊御超歳奉恐悅候、隨て愈御安健御越年目出度奉存候、次に此表社中無異罷在乍憚御休意可被下候、舊臘は貴書毎々御投辱奉謝候、繁勤中御報延引に及び、失敬の至御海容可被下候、偕、御出府以來、諸々有志輩御出會、御研學の由、自橋本氏承り、甚以御全意の至、近頃追々御學意御上進と毎に想像仕居候、如仰安陪榭原の列、折角研學罷在候、明道館休日中も本多源四郎殿宅に於て四五輩申合、日々會業等相催

立花壹岐ノ人物

薩藩ノ學政振ハズ

士氣ノ衰廢極マル

學者ノ迂濶ヲ關クベシ

弘庵岩陰等ノ消息如何

申候、偕、(親雄、初河藩老臣)立花壹州には毎々御出會、大學會業も被成候由、此人稍々粗暴の風は可有之哉に候得共、天資英邁、議論激烈に至つては、列藩大夫中に稀成人物と奉存候、(續井左四郎)小楠翁も其段稱居申候、此節嘸々感慨と奉存候、御序に宜敷御傳言被下候、薩藩堀桑山等は見識も有之由、何か學校の政改革正致度旨物語候由、如何にも彼藩の學政は甚不振、學校中の人物殊の外世間風波を畏れ、依之時務經世等の事、學者の論じ候事を甚いやがり申候、故に學者無用に志慨無之候、然し學政革正も無其人しには、法不徒行所に御坐候、彼藩も教官に可成人は尤乏敷事に御坐候、古今共教官は其人を難んする事にて、夫故に多くは弊のみ有て、無用に成行申候、此邊甚以心痛の至、學者尤盡力所此等に御坐候、且又近頃國體も卑弱の極、世道大變の候に當て、士氣の衰廢は前古有之間敷、依之堂々たる霸府、外國一介の使節舌頭に挫折せられ、只彼の説所に隨從して違あらず、然るに如此慷慨無限の境、天下の人心恬然として不怪是、天下の不幸にして大丈夫の愧所に非ずや、方今救濟天下之急の好真手に乏敷のみならず、侃々の正論能士氣を振作する是又乏し、孟子曰、善言而距楊墨者舜之徒也、此言可味、孟子異端を聞き、人心を鼓動誘引する親切成所也、方今因循姑息を主とするもの、第一關くべきのみならず、學者の無用にして迂濶なるもの、是又關くべきものならずや、如何々々、偕又、時勢の可憂、古人云、金遂以和愚宋、々遂以和自愚にすると、今日は畏難を以て自愚にすと存候、可痛可憂、李退溪云、世間之窮通得失榮辱利害、一切措之度外、朱子云、欲整頓一時之弊、譬如常洗滌不濟事、須是善洗者、一々折洗、乃不枉了、庶幾有益、大丈夫の言往々如此、此邊學者深考ふべき事に奉存候、如何々々、(私慮)近來、藤森恭助鹽谷甲藏又は長沼流兵學者小野寺備齋等には、御出會無之哉、備齋は品川東海寺中住居に候筈、近日は如何と奉存候、孔孟彼の中國を遊歴し玉ふ時、定めて知る、天下許多の人物雄才悉く見得出し、一人も不殘了る、孔明も、梁父吟中に、彼善天下の人才、時務、大略胸裏の間に了會す、故に三分の業を濟得出す、聖賢豪傑の事如此、學者可猛省所に御坐候、此他得御意度義も山海御坐候へども、今般數通相認候故、是迄關筆仕候、尙期永日候、頓首白、

正月三日

村田巳三郎

安政五年正月二十四日

五九三

安政五年正月二十四日

横山 猶藏 殿

二白、餘寒折角御自愛奉專祈候、乍憚三岡、堤(石五郎)(五市郎)も宜御傳言奉托候、以上、

〔福井藩士横山猶藏建言書〕

○橋本左内
全集所載

○安政五年春藩主松平慶永へ

乍恐謹而大抵見積りの通り申上候、

一近年西洋諸國大に相開き候而、萬國通交致、次第に強大の姿に相成候、其中にも魯西・英吉・墨夷の三ヶ國に御座候而は、益富國強兵の勢に御座候て、互に合従連衡致候事、既に五大洲をも併吞仕らんと致候、是必其本源有之候と被考候、然るに此時に當りて、乍恐日本の御國體不相立、幕府の御政體日々に因循、御勇斷の御長策不相立、唯々爲彼被制候勢に御座候、是又深根源有之候と奉存候、眞に以日本開關以來病弊に御座候、若如此而已の勢に成行候へば、巍々堂々たる神國も必爲彼掠奪いたされ候事無疑と奉存候、左候へば、征夷の御職分不相立、上は以て天朝御代々の尊神に御申分相立不申、下は以て萬民塗炭の苦を如何被遊候や、實以て日本に無人も同様に御座候事、眞に落涙に堪へず、

乍恐當時の御役人に御座候而は、制彼の御工夫不相付、唯彼が兵端を開き候と申に恐れ、彼の申通りに御免に相成候と被考候、萬一如此事に至候ては、吾が有用の者を以て彼に送り、彼が無用の者を以て吾に送り、彼よりして吾國を訓誨致候様に相成候ん歟、左候へば、日本御國中文武の御備不相立、天下の人心日々に涣散仕候而、必内外一致の大壞亂に相成候義と奉存候、其時に至て、譬ひ英雄俊傑の士盡力候共、致方無之候様奉存候、申上候迄には無之候へ共、(松平慶永)御上には徳川家の御家門に被爲在、列藩の御頭にも被立候御身分に被爲在、分て近頃に至候ては、御英名益御盛に相成候而、天下の諸大名并に英雄俊傑の士皆々御徳を仰ぎ奉り候、左候へば神國の安危、天下の有志者の望をも被達候事、悉く、御上の御一心に有之候と奉存候、何卒御盡力被遊、日本開關以來天下の政教文武兵勢の立方を

慶永公ハ天
下ノ仰望ス
ルトコロ宜
シク庶政ノ
改革ニ盡力
セラルベシ

一橋慶喜ヲ
將軍繼嗣ト
定ムベシ

江戸大坂蝦
夷ノ防備ヲ
嚴ニスベシ
諸侯ノ參勤
ヲ三年制ト
改ムベシ
徳川齊昭ヲ
江戸ノ總帥
トナスベシ
尾紀二侯ヲ
シテ大坂ノ
警備ヲ督セ
シムベシ
肥薩ヲシテ
蝦夷地ノ開
拓ニ當ラシ
ムベシ
諸藩ニ命ジ
艦船ヲ建造
セシムベシ

五九四

御改革被遊、有志の大名は不及申、天下俊傑の士を御用被遊、御手前の御備十分に御立被遊、而後制彼の御計策御仕向被爲在候而、再び 神州、徳川家の元氣挽回被爲在候を第一と奉存候、夫れに付候而、乍恐愚策申上候、

一何分徳川家非常の御人に無之候而は不相叶候様奉存候間、御上にも兼而御心配被爲有候様承り及候西丸様、非常の御人撰にて御定可相成、次に御役人は是も御人撰、御改革被遊候を第一と奉存候、兼て承り候に一橋公誠に以而御賢明の由、何卒此御方に西丸様御極り被遊、御上には御後見に被爲有候而、神州の興亡を御意懐に任せられ、天下の政教御改革被爲有候を可然と奉存候、

一其上にて可恐は魯・英の二國に御座候、兩虎の勢并不立、是非日本と戦争相始り候事無疑と奉存候、左候へば、第一彼の罷出候處は江戸・大坂并に箱館蝦夷へ罷出候と奉存候、左候へば右の三ヶ國非常の御備へ無之ては不相叶と奉存候、依て當時の天下の大名大に疲瘦仕候間、少頃く國本へ御歸しに相成、文武兵勢の二つを改革致、嚴重に海防備を相立候様被仰出、其上三年に一度御機嫌爲窺、幕府へ罷出候可然奉存候、其上、水府老公御召出に相成、江戸表の總大將の任悉く御任せに相成候而、御旗本向え非常の御備向被仰出、其上にて文武の學校御開きに相成、非常の人才御人撰に相成、其役仰付られ候て、航海兵勢其外萬國の學問等御開き被遊、天下の人才御教育被遊候を第一奉存候、

一大坂表は 天朝の近邊に御座候間、第一御備無之候而は不相叶候間、當時徳川家三家の内、紀州・尾州を 天朝の總大將に被遊、其外小藩の大名御付被遊、大坂御固めは土州公・彦根公・阿州公に被仰付候第一と奉存候、
一蝦夷表は指當り御開き被遊候を專一と奉存候、此考は當時格別御聰明の肥前公・薩州公御遣され、航海物産の方御開きに相成、其上交易館を立、萬國交易被致候間、富國強兵、且は兵勢の備嚴重に御立被遊候第一と奉存候、左候へば、二侯の交代莫大の費に御座候間、幕府にては御金を被下御助被遊様に奉存候、

一何分海内を擧て御備を被立候様奉存候間、第一諸大名へ分付、軍艦を拵へ候様被仰出、十萬石に軍艦一艘、蒸氣船一

安政五年正月二十四日

五九五

江戸ニ米國
商館ノ設置
ヲ許スベシ
米人ヲ備ヒ
航海術ヲ學
ビ又留學生
ヲ派遣スベ
シ
交易ハ江戸
箱館ノ二ヶ
所ニ免スベ
シ大坂ハ不
可

艘を拵へ、其分に而、百萬石には二十艘の積りに被仰出、航海の術修業致し、且は交代其外遠方へ罷出候費を省、便利の好きを第一と奉存候、然しながら右にも申上候通り、此大名困究仕居候而、幕府より御金を以て御助け被遊候て可然と奉存候、

一今度墨吏の願上候旨、能々御糾被遊、其上御條約御定可相成、江戸表商館を立候義御免し被遊、萬國交通被爲有候を可然と奉存候、此義も中々不容易事に御座候間、御大名御旗本御人撰被遊、其々の役被仰付、急度御條約通りに相成候様可然と奉存候、其上にて墨吏に申付、軍艦蒸氣船數十艘、并に航海術造作に達候人物御召寄に相成、御當地表に於て其人を撰び、折角修業致させ候を、第一奉存候、其外諸藩有志の者御撰被遊、外國へ御遣しに相成、彼的情體、且又實用の戦争、并に學問、兵勢の立方、聞見致させ候を可然と奉存候、

一大坂表は、天朝の御近く、御座候間、交易の義は堅く御斷被遊、江戸・箱館の二ヶ所に而交易御免に相成候様被仰付候て可然と奉存候、若如此にて御手前の御備嚴重に御立被遊、人才を拔擢被爲有、益忠孝廉恥の大道を明に被遊候へば、萬國共辟易致、彼吾か利心を恥、必來て仁義の法に則り候様に相成候と奉存候、左候へば吾神國よりして此大道を明に致し、終に五大洲をも併吞致、神州の恥辱を奉雪、徳川家萬代の御長策と奉存候、愚臣の如は淺知不省の者に御座候へ共、日夜神國の安危を奉思、感慨の至に御座候、誠に過言の罪難道、不顧恐、謹而申上候、伏希一度御勘考の程奉願上候、再拜、頓首、

二十五日寅 大納言・中納言・參議等二勅シテ、外交處置ニ關スル意見ヲ上ラシム。權大納言九條幸經以下二十一人、二月三日迄ニ、各奉答書ヲ上ル。

〔東坊城聰長日記〕○宮内省圖書寮所藏本
正月廿五日、巳半刻參 内、○中略、

大納言以下
現任一同ニ

外交意見ヲ
諮フ

藏人頭ニ勅
問アリ

一外夷一件、現任一同被尋下所存之旨、(前關白圖司政通、關白九條尚忠) 兩公被命、大納言 中山・中納言(公繼) 四辻・參木(隆基) 八條召設、議奏立合申渡、御拜道、二月三日、相揃、同役・太閤へ入覽、

二十七日、○中略、

一外夷一件、(藏人頭南) 兩頭被尋下意見之旨、大閣被命、兩頭召設、於御拜道廊下申渡、

〔徳大寺公純日記〕○臨時帝室編修局所藏本

正月廿六日、晴、○中略、

一現任一同、大・中納言・三木、墨夷申立一件、帳面二冊、書取等相渡、當月中、勅答可被申上、(建通、廣泰) 兩役列座、(久我・子) 廣橋前大納言被申渡了、大納言、(中山召設不參、大炊御門) 中納言第一四辻、三木第一八條等也、(兩役ハ去日申上間、今度不及申上、) 自余攝家分ハ、於非藏人口武傳被申渡了、當役不立合、

今度、前官大臣ハ、勅問之事ナシ、兩頭勅問ノコト、廿七日被仰出、 前官大臣勅問ナク、兩頭勅問ノコト、邂逅歟、先規可尋、

〔中山忠能手記〕○宮内省圖書寮所藏本、中山忠能履歷資料所藏本

安政五戊午年正月廿六日、有 召、依風邪不參之處、入夜家信卿入來、(大炊御門) 兩役列座、武傳光成 傳 宣、亞墨利加國申立之儀關東言上に付、在官參議以上所存被尋下、以一封信月中可言

前官大臣ニ
ハ勅問ナシ

納言參議ノ
上席ニ外交
意見ヲ諮フ

奉答書上呈
ノ期ヲ二月
二日迄トス

安政五年正月二十五日

五九八

上、尤光成卿へ可附由被示云々、依多人數、大納言・中納言・三木等、第一々々へ被示由也、
亞墨利加使節へ及應接候趣、且右に付、使節差出候書付和解、追々申立之趣、○中略
右一通と、

亞墨利加使節差出候書付和解一冊、但、第六則の書也、十二月二日、備中宅にて應接之趣一冊、十二
月四日使節差出候書付和解一冊、但、第十六條之書也、
右等被渡、夫々通達了、

廿七日、當月中之處、堀田上京猶豫に付、二月二日中不苦由也、光成卿夫々申通了、

一二月一日、於省中東坊面會同談、封事大體國內人意可一致様之儀は各有之、精々説諭不
聞時は兵事之外無之、於 上も御沙汰之旨也、

一同日、公純卿内談、 上思召同斷、兎角鷹司殿父子、今一段其邊不同心之氣有之由也、忠
(難斷)順卿之封事、蠻夷を信醉するの意有之由被見其趣有之、尙實萬公と可被談様申合候、

就墨夷申立之儀、

爲商賣定則 六則

一冊

巳十二月二日堀田亭應接

一冊

同 四日使節差出書

一冊

近來世界一變戰國七雄之姿書取 一通

右去正月廿六日、被見下、所存可申上由に付、恐入候得共、先日以一封言上仕候、

〔中御門經之日記〕○侯爵中御門經恭所藏本

正月廿七日、辰、晴、○中略

一 亞墨利加交易、或打拂等之事、兩役并現任大・中納言・參議等へ 勅問被 仰出、二日迄
ニ 勅答之旨へ、兩頭又 勅問之旨へ、

〔橋本實麗日記〕○東京帝國大學所藏本

正月廿六日、癸卯、晴、辰半剋計參後月輪山陵如例、此次詣清水寺、酉剋計新相公被來謁之
處、亞墨利加合衆國通商之儀ニ付、從大樹被伺候事ニ付、見任大・中納言・參議等所意被尋
下候由、尤以廻文被示候得共、先被示且被談之儀有之、各第一々々被召設、於御拜道廊下、
兩役列座、武傳被申渡、且應接和解三冊等被渡、但一通之由故、先大炊御門被持飯由、中山不參云々、愚昧
大炊御門參依之八條相公、武傳扣被借受由、
質誠恐懼之至へ、將明日已剋比ヨリ彼亭江可來集被示了、廻文已下別記、(下三掲之)但意見當月中可
献云々、

應接和解三
冊ヲ渡サル

安政五年正月二十五日

五九九

安政五年正月二十五日

六〇〇

二十七日、甲辰、晴、辰斜八條亭向、墨夷應接和解一覽了、參議人々追々來集、○中略、
廿九日、丙午、晴、午後內府亭向、今度墨夷應接意見二通相認、令談之處、二通之文意取交可
然哉被示之間、從其旨了、直飯家令清書、東坊城亭向、屬于此卿、獻上了、但一封之、一紙別記、
仍于爰略之、

〔外國處置雜誌〕

○橋本實麗手記
伯喬橋本實顯所藏本

正月廿七日、甲辰、晴、辰斜新相公亭向、昨日依招之、同輩各來集、即墨夷應接書取和解被爲見一覽
了、歸家、此次東坊城亭向、和解扣三冊借請、但即今在八條、了、今夕從八條被投、今夜寫取了、
廿八日、乙巳、晴、今日存意書綴了、

廿九日、丙午、晴、所存二通認、午後內府亭向令談之處、兩樣取交候方可宜哉被示、謝芳志歸
家、則清書了、東坊城亭向、附屬于彼卿、獻上了、又右寫一紙被所望、追可差出報了、言上
一紙記左、○奉答書ハ、下ニ掲ゲルヲ以テ之ヲ略ス。

〔亞米利加人願立所存御尋并雜誌〕

○橋本實麗手記
伯喬橋本實顯所藏本

正月廿六日、癸卯、晴、酉剋計新相公被來謁之、今日大・中納言・參議等第一々々被召設、於御
拜道廊下、兩役列座廣橋前亞相被申渡ニハ、亞墨利加合衆國ヨリ通商願立之儀ニ付、從大
樹被伺

叡慮候由ニ付、見任之輩所意被尋候趣、尤以廻章可被示候得共、先被示且被談有儀、尤墨夷
應接和解等被渡由、而一通候間、先大炊御門今日、第一中
山不參云々、被持歸、依之新相公、武傳扣被借請
由之、愚昧之質恐懼之至之、廻文續左、

依召參上之處、別紙之通被申渡、參議一同御傳可申旨ニ候、拜眉之節、帳面類可入覽候
間、乍御苦勞明日已剋後、御勝手光駕可給候、仍申入候也、

正月廿六日

酉剋隆

祐

冷泉殿 (爲理、參議) 日野殿 (資宗、參議) 庭田殿 (重胤、參議) 中院殿 (通實、參議)
橋本殿 (實盛、參議) 野宮殿 (定功、參議) 御方

右即剋、野宮へ傳達、

一紙

亞墨利加使節に及應接候趣、且右ニ付使節差出候書付和解、追々申立之趣、不容易事共
ニ付、厚く御勘考被爲 在候處、近來世界之形勢一變致し、唐土之昔戰國之世、七雄四
方ニ立分れ居候姿ニテ、御當國ニ於ても、已ニ外國与條約御取結御交通被爲在候上者、
古來之御制度ニ而已被爲泥候者、御國勢御挽回期無之、日夜御心を被爲惱候御儀ニ
有之、併非常之切者、非常之時ニ無之候者難成、中興之御大業を被爲立、御國威御更張

安政五年正月二十五日

六〇一

之機會淺亦此時之有之候間、御大變革被爲在度 思召候得共、當時御國人心之居合方淺有之、人心不居合節者、内外何様之禍端を引出可申淺難計候間、先使節申立之趣、追々應接之上、可成丈被取縮メ候筈之者候得共、爲御心得御兩卿に御達可申旨、年寄共より申越候事、

十二月

一紙

於關東、亞墨利加使節書取差出候之付、被爲見下三冊并別紙之旨、兩役列座、廣橋前大納言被相渡候、所存當月中ふ、以一封可申上旨、同卿被申渡候事、

一紙

| | | |
|----------------------------|----------------------------|------------------------------|
| 中山大納言 | 大炊御門大納言 | 廣幡大納言 <small>(忠禮)</small> |
| 四辻中納言 | 烏丸中納言 <small>(光政)</small> | 正親町三條中納言 <small>(實受)</small> |
| 正親町中納言 <small>(實徳)</small> | 甘露寺中納言 <small>(愛長)</small> | 三條西中納言 <small>(季知)</small> |
| 醍醐中納言 <small>(忠順)</small> | 八條宰相 | 冷泉宰相 |
| 日野右衛門督 | 庭田宰相中將 | 中院宰相中將 |
| 橋本宰相中將 | 野宮宰相中將 | |

勅問ニ關スル回達

外交問題ニツキ勅問ア

右和解三冊、借請于東坊城、寫取了、

〔雅俗日簿〕

○山科言成日記 宮内省圖書寮所藏本

正月廿六日、晴、○中略、

一 墨利加國伺日本、就不容易義、現任公卿自兩役言傳、在

勅問云々、

尤攝家納言、役人納言ハ別段云々、諸家大納言第一中

山被召依所勞不參、次大炊御門召云々、中納言第一四辻、參議第一八條云々、

各自議奏被召、武傳議奏兩三人許歟、於御拜道廊下被示云々、

一 兩日中可有 勅答歟、

〔高辻以長日記〕

○子爵高辻 宣齋所藏本

正月廿八日、晴、酉前方雨、○中略、

一 五條中納言方書中來、

彌御安泰令賀候、然之御面働願う候得共、胤長卿、納言之被爲在候節歟、三木之被爲

在候節歟、以一封 勅答被仰上候義有之趣、其事柄も不覺申候得共、先年 御謚號之

節、中院殿方御尋合之義慥之覺居候、右 勅答御文面一寸御寫取拜見希入候、今度亞

墨利加一件 勅問有之候之付、極内々外方より火急之被頼候間、願試候事之候、可相

成ハ只今承度存候也、

正月廿八日

安政五年正月二十五日

勅答ノ書式問合

安政五年正月二十五日

高辻殿

御答承度候、

一寸返書ニ、只今急ニ不覺、尙早々吟味可返答申答、○中

右五條前中納言へ、胤君日記寫取進セ候事、返答ニ挨拶之、○中

一此度異亂ヲ企ニ付、異國 敕問ニ付、大宰 救答當時現任、大臣ハ如何、

、大納言 久我大納言建通卿、（藤原） 一條大納言、二條齊敬卿、九條幸經卿、德大寺公純卿、中

山忠能卿、万里小路正房卿、大炊御門家信卿、廣幡忠禮卿、近衛忠房卿、

、中納言 四辻公績卿、烏丸光政卿、正親町三條實愛卿、正親町實德卿、甘露寺愛長卿、

、參議 八條隆祐卿、冷泉爲理卿、日野資宗卿、庭田重胤卿、（藤原） 裏松恭光卿、中院通富卿、橋

本實麗卿、野宮定功卿ト存候事、

〔外國關係雜誌〕

○橋本實麗手記
伯耆橋本實麗所藏本

二月二日、戊申、晴、言上一紙寫、東坊城亭遣、將又過日借請候、墨夷應接和解三冊令返却了、

從八條又外ニ八閉有之由にて、其内六閉被投、但、從東坊城被借用由、
寫濟予可廻被示由之、 併先内々之旨之、

四日、庚戌、晴、辰巳後飛雪、入夜霽、今曉寅斜、八條ハ廻文到來續、

墨夷應接和解八閉有之候内、壹閉廣橋前亞相被相渡候、急々之儀故、先入見參候、寫自

跡可入覽候也、

六〇四

爲（五條）

定

勅問ヲ蒙リ
シ人々

二月二日ヲ
限リ奉答書
ヲ上ラシム

不承知ノ者
一人モ多キ
ホド可

二月三日、申刻

忠

能

大炊御門已下、十七人充、

右、野宮へ順達了、

五日、辛亥、陰晴、巳剋計、從甘露寺廻文到來、八閉之内又壹閉被爲見由、直正親町に順達了、

（正月） 廿七日、注落、

今朝從八條被申渡候御所意書、來廿九中（九ノ下日脱カ）ト被申渡候得共、只今更來月二日中可差出之

旨、廣橋前亞相、中山に被示候、仍申入候也、

正月廿七日

資

宗

冷泉殿

庭田殿

中院殿

御方

橋本殿

野宮殿

御方

〔東坊城聰長書翰〕

○宮内省圖書寮所藏本
忠成公手録書類寫所藏

○正月二十七日三條實萬宛

略、現任所存被尋下候、昨日申渡置候、夫々御相談被申上候方モ可有之哉、何卒御ツヨク所

存御申上之様ニ致度候、小細工ハイラヌ事、只々不承知之旨、一人ニテモ多分有之方御爲

ト存候、何卒御勘考之御爲申上置候事、○中 略、

安政五年正月二十五日

六〇五

安政五年正月二十五日

六〇六

正月廿七日

御近侍中 極密

聽長

〔德大寺公純書翰〕

○中山忠能履歷資料所載

○二月三日中山忠能宛

口演

御建白御寫、被許拜貸候旨、薰手再三卷舒、誠御精忠之程、遠は貴嶺公、近は愛親公、御祖先にも御超越、十目所指感佩難盡筆紙候、餘子は、碌々不足掛于齒牙之、下官上啓寫、別紙屬電覽候、誠に優々寛々赧顔之事に候、至切令建言度候へとも、觸忌諱令困苦候、別段不及御返候、乍是上、寸忠之程御互奉祈候、書餘屬後鴻候也、頓首、

二、三

公純

水戸論反覆

追市、自餘建白も多端にも、多分同一體にて、今度水戸反覆趣意有之候事なから、多年之忠節畫餅に相成と歎息事に候、定市深意嫌疑相遁候事と存候也、

○權大納言九條幸經以下二十一人、二月三日迄ニ各奉答書ヲ上ル。次ニ之ヲ收ム。

中山殿

〔權大納言九條幸經奉答書〕

○公體徳川園順所藏本
防海雜記所載

幸經

亞墨利加使節追々申立一件就言上、愚存被尋下畏承候、竊惟當今世界之形勢致一變、遍國通交之例ニ在之候共、皇國之、從古昔夷蠻隔絶之儀依爲嚴重、上下相安、不失淳風之處、今般異國交商取結、商館雜居ニ相成候而之、傷風敗俗、後來之成行も難慮候、乍去時勢之變革ヲ以、既條約在之上之、無故拒絶モ難成、但、諸藩之謀議万民之情意會合多き處を以、聊之異同ニ不拘、苟且之計無之、永久之基不損様、御議定所冀候、猶宜在 叡斷奉存候、

(平安戊午光景記)
沿海杞憂

〔權大納言中山忠能奉答書〕

○中山忠能履歷資料所載

忠能

墨夷申立不容易之條々、關東言上に付、御沙汰之趣謹奉候、右一件自始之次第、慥に不承及事に候へは、猥に言上別市恐入候得共、於此儀は、兼々深憂懼仕居候間、不顧恐言上候、元來去嘉永年中渡來呈書條約後、於關東追々和親取結、所望に隨順し、既に使節登城對面も相濟候上、彼是增長、種々難題之條目等申募り候段、皇國を致輕蔑候儀誠以 神州之恥辱、國家之安危此時と存候、今度條目之内、所々に開港、夷の官吏を置き、國中を隨意に

安政五年正月二十五日

六〇七

故ナク拒絶
モナシ難ケ
レバ諸侯萬
民ト謀リ永
遠ノ策ヲ建
ツベシ

墨夷ノ要求
ニ從フハ神
州ノ恥辱

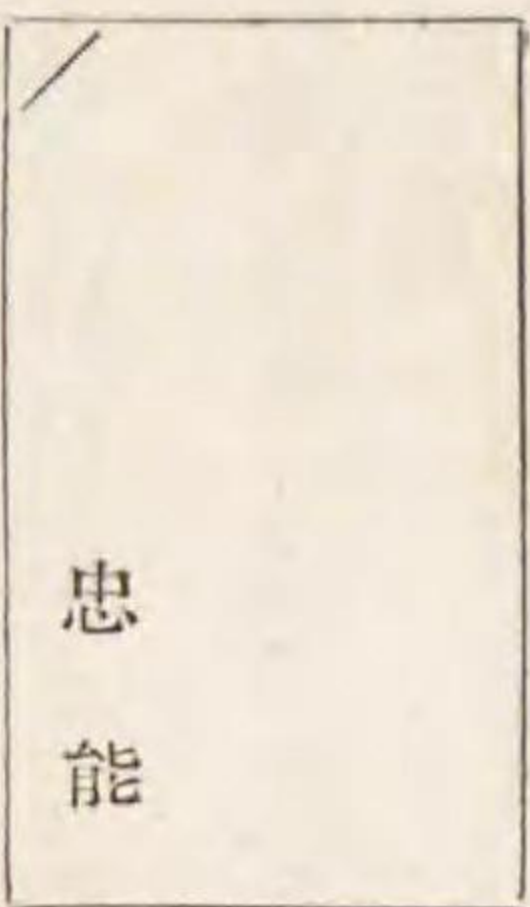
三家諸侯ヲ
シテ評議セ
シムベシ

夷族ヲ謝絶
シテ戰トナ
ラバ之ヲ打
拂フベシ

安政五年正月二十五日

六〇八

往反し、且彼の教法所を建立之儀など、殊更難許儀に候、此上は偏に一州之人意一齊和同し、蠻夷之姦謀を綏服致させ候儀、第一と存候間、早く武邊三家始諸大名、更に格別懇切之示談有之、上下萬民納得し、心を一にして、國體を不損失様、速に改正之所置可有之由、急度 御沙汰可被爲在候様、 聖斷所仰候、唯今之内早く改正無之、苟且因循候は、朝廷之御危難は勿論、於將軍家も、禍害不遠と、深歎入存候、去嘉永年間の條約すら、十分の宥許にて、當然の義にも無之歟、況増長の今に至り、國內の人意不一致儀は必定、内外禍亂に可相成候、方今之時勢人心不居合之趣、實情を以て、一端夷族へ説諭謝絶候儀簡要と存候、其謝絶を不聞して、彼より兵端を開候は、是非之論に不及、遽に打拂ひ、人心一致し防禦の一事に歸し、各誠心を以て、其術を盡し候方、却て萬代安全之策と存候、唯々正路を以て、人事を被極盡候上は、實に 天命之令然る所にして、其時こそ 神國之儀、天助冥感も必可有之候、尤争鬪は不容易儀勿論に候へ共、面前之理世安民を專とし、國家之深謀遠慮を捨置き、此上諸夷追々來集し、猛威を張り、種々難題申立候ては、堂々たる 神國、終に犬羊と伍をなし、國勢長く挽回之期無之候間、何卒早被決定、衆思を集め、群慮を同し、蠻夷を退け、防禦を嚴にして、永く夷狄之深害を除去り、 神州之御瑕瑾に不相成様、厚可被廻 叡慮相願上候事、



二日中の處、依痛所入魂了、

右中奉書四折、同上包、二月三日、持參、附光成卿、○中山忠能 附歴資料

(防海雜記)

〔權大納言大炊御門家信奉答書〕

○防海雜記所載

家 信

亞墨利加申立之條々不容易儀、家信愚昧雖不辨事理、外國浸潤之強請際限無之、其勢更難計、一旦被許下田開港、外國亦其心宜飽而不飽、然而今又閉彼港口、開他諸港、則不知後患如何、以不被許容爲然歟、宜在 聖斷矣、

(平安戊午光景記 沿海杞憂)

〔權大納言廣幡忠禮奉答書〕

○防海雜記所載

忠 禮

此度亞國申立之儀 愚意可申上被 仰下謹奉候、外夷書翰之趣不容易、此上增長願望之儀於有之ハ可拘國體儀候、難果斷候得共、衆人一同於氣合之上と擊拂可然哉、何分此度之儀、國家之大事候間、思慮紛々難辨是非、猶群議宜在 聖斷矣、

(平安戊午光景記 沿海杞憂)

米國ノ要求
ハ許容スベ
カラズ

外夷擊攘ノ
コト群議ニ
ヨリ聖斷ア
ルベシ

安政五年正月二十五日

六〇九

〔權大納言近衛忠房奉答書〕

○防海雜記所載

忠房

開港ハ皇國ノ大事衆議ニヨリ決スベシ

於關東、亞墨利加使節ヨリ、開港・開市等追々申立之儀ニ付、愚意可言上旨被 仰下、恐懼候、此度之儀ハ、實以 御國體ニ拘リ、皇國之御大事不容易儀、愚昧 忠房 兎角之存意モ難言上候得共、此儀ハ何卒諸國大小名之所存被及尋問、衆議決定人心一致之上、兎角之所置在之候ハ、可被爲安 叡念存候間、猶專群議之上、 叡慮可被 仰下存候事、

(平安戊午光景記 沿海杞憂)

〔權中納言四辻公績奉答書〕

○防海雜記所載

公績

新ニ開港ヲ許スハ不可ナリ拒絶スベシ

墨夷申立之儀ニ付、被尋下候趣謹承候、使節申立候開港開市貿易之事、不容易事与存候、自然一旦御差許ニ相成候共、何分夷情難測候間、後々如何様之禍害ヲ相發候儀難計候間、被差止可然哉ニ存候、乍併既ニ先年差許ニ相成候分也、今更御差止ニ相成候テモ、承伏不仕与存候間、何卒新ニ於諸國開港開市之儀也、堅御差止ニ相成候方、國家長久之御良策と存候、其上強情申募、不禮等も有之候者、嚴重被加誅伐、被伸國威候様可然存候、尤海岸防禦之儀、堅固非常之備不相弛様可然相願候、猶宜在衆議存候事、

(平安戊午光景記 沿海杞憂)

〔權中納言烏丸光政奉答書〕

○防海雜記所載

光政

國體ヲ損セザルヤウ衆議アルベシ

亞墨利加使節追々申立候ニ付、自關東申來候旨、不得止事次第ニ候半哉、不容易儀、不能申所存候得共、何分後々迄も 御國躰ニ不拘候様、深く希度候、猶公武共神策ニ向らむ所、宜衆議矣、

(平安戊午光景記 沿海杞憂)

〔權中納言正親町三條實愛奉答書〕

○防海雜記所載

實愛

彼ノ要求ヲ許サバ後害アラシム人心一和遠大ノ策ヲ建ツベシ

亞墨利加使節書取一紙并三冊被爲見下、所存可申上旨謹奉候、實ニ國家安危此時ニ可有之候、古來數自夷國覬覦、或乞通好候得共、鎖國拒絕舊制ニ候處、古今變革時勢も有之、近年既通交有之候儀、於關東も夷情虛實熟察も可有之候得共、段々任申募被許候而也、後患實ニ難測、甚以不容易存候、猶此上永く不損辱國體、四海靜穩、夷族屈伏候遠大之策可有之存候、尤人心不居合候而也不拘許拒、大害可有之存候、國中一心和合之處、厚被見究候而、可有御決定与存候、并蛙寡聞、先年來應接事理巨細不覺悟、今度書取被爲見下候得共、方今處置得失、社稷存亡ニ係り候儀、暗弱微質、不能辨可否候、至言確論被參考、被爲在 叡斷度、奉存上候事、

(平安戊午光景記 沿海杞憂)

〔權中納言正親町實德奉答書〕

○中山忠能履歷資料所載

實 德

武家一致夷族ヲ屈服セシムルノ勅詔アルベシ

近來異國船度々渡來候に付、於關東精々被取鎮候處、莫大之所望申立候由言上、就中所々開港、異國之官吏を差置候義申願候趣意、不容易事に候、既去弘安之舊蹤も有之候間、武家一同一致之上、神國之恥辱無之、夷族屈伏候様、勅詔被爲在專一奉存候事、

(防海雜記)

〔權中納言甘露寺愛長奉答書〕

○防海雜記所載

愛 長

舊弊ニ泥マズ人心ノ歸趨ヲ見テ決スベシ

亞墨利加使節差出候書付和解、六ヶ所開港願出、且口上書ニ申立之趣、無餘儀御宥許ニ相成候様ニ候得共、右様外國人入込候事、國亂之基ニ可相成哉、其他各國追々同様ニ申出候事ニ必定、且 神國ニ、貴賤相別之地、外國人入込居住交通ニ相成候事、神慮之程深恐入候、右様之儀ニ、實天下之大事ニ存候、世界之形勢致一變候折柄、舊弊ニ不泥、先奏聞、次大小名ヘ示諭之上、許不許ニ、天下一心之上被定候ハ、居合不居合ニ其處ニ可有之事、猶程能居合候場合、今日之義ニ可有之哉ト存候事、

(平安戊午光景記 沿海杞憂)

〔權中納言一條實良奉答書〕

○宮内省圖書寮所藏本 實記所載

實 良

二月二日、戊申、亞墨利加一件ニ付、實良趣意書、月番傳奏廣橋前亞相ヘ附之、○僕記

近頃夷族渡來、遮而種々申立候由言上ニ付、所存御尋謹奉存候、愚存不顧恐申上候、過去之儀ハ、不及是非候得共、此上ハ、神州之瑕瑾耻辱ニ不相成、萬民納得安心仕候儀、專一ニ存候、蠻夷追々國內ニ來集、猛威廣大ニ相成、種々難題申立候テハ、彌無致方可相成ト、甚痛心候、何卒唯今之内、更ニ三家始諸大名之面々所意被尋、被考合、人意一同ニ相和候上、被決定候ハ、聊御安心ニモ可被爲在候歟、人心不一致候テハ、内外之禍出來ト存候、深被運 叡慮候様ニト存上候事、

右、正、廿六、勅問、二月二日、武傳卿ヘ被附、仕立如父君(廣橋)願實良

(防海雜記 中山忠能履歷資料 沿海杞憂 平安戊午光景記)

〔權中納言三條西季知奉答書〕

○防海雜記所載

季 知

亞米利加使節申立之事、愚昧之季知、如何共難辨候得共、今度望諸港候段、其情狀難計、假令被取縮、一ヶ所ニテも被許候節、一時穩便之場又可有之候得共、却テ往々大患も出來候哉、今堅く不被許義可然候哉、萬一軍船差向候共、國家之大事、夫々於武家防禦ニ勿論之事与存候、但、當時國內人心之居合方も有之候趣、誠不辨前後申條ニ候得共、猶此上ニ三家之

三家以下諸侯ノ意見ヲ徴スベシ

三家ヲ召シ武門ノ意見ヲ徴シ聖斷アルベシ

中ニ布モ 御召登、武門之評論も被 聞食、於 聖斷ニ、可爲如何哉ニ存候事、

(平安戊午光景記 沿海杞憂)

〔權中納言醍醐忠順奉答書〕

○防海雜記所載

忠 順

近年異船每度渡來 皇國、願商通候處、以 御寬仁御宥許相成有之候上、又々今度申募候
ニ付、被惱 宸襟、各所意被尋下謹奉候、實獻一策、可報 御國恩之時節候、此義多年心付
居、色々察外國様子度、爲 御國患居候儀、誰不變同斷候、併何分存付無之、只々悔愚昧、苦
心無限、尸食而已恐入候、併此御時節只恐愚昧、不致 勅答候も、又々恐入候間、不顧恐、敢
申上願候事只三有之候、無他事、當時外國必々敢難打拂事、雖爲洋夷、存外長居候所有之、
又々難捨之事、當時難爲見 帝都事、此三ヶ條雖不申上、誰知居候義、殊更申願、實嗚呼ニ
相當、深々恐入候、只々伏 聖斷仰願候事、

(平安戊午光景記 沿海杞憂)

〔權中納言九條道孝奉答書〕

○防海雜記所載

道 孝

亞墨利加使節屢以和親申立、應接之書熟覽候處、專國益之爲、亞人交易之所、畿内之地ニ
布、開數港、商館置官吏之趣ニ布ハ、神國清明之域を汚ニ當り、士民淳美之風モ廢候様成

外國打拂ヒ
難シ洋夷ノ
長所ハ捨テ
難シ帝都ハ
見セ難シ

世界ノ大勢
ヲ明ラメ群
議ニヨリ聖
斷アルベシ

浪速開港京
都居留ヲ拒
絶スベシ

諸藩ヲシテ
海防ヲ整備
セシムベシ

行、且四海人情不穩之聞不少、旁以歎ヶ敷次第ニ候、乍然時勢之變革、世界之模様、古今相
違も在之義、先諸藩列國之異同、委曲被及諮詢、自他之分辨無腹臆、趣意於爲明白者、群議
之上、國體不失、人情無睽乖様、御指揮所祈候、猶宜在 聖斷矣、

(平安戊午光景記 沿海杞憂)

〔參議八條隆祐奉答書〕

○中山忠能履歴資料所載

今度於關東、亞米利加使節申立之條々、不容易内にも、諸國要津之浪速に開港之儀申立、殊
更於京都、夷人連綿居留致度との志願、實以恐入候事柄に候、併是等企望之念慮は、於關東
も、斷然拒絕可有之儀とは存候へ共、一體使節申立之趣、應接被取縮候關東之趣意にては、
必竟許容之義と相聞候、然上は、利欲無飽醜虜、是非共用捨難相成廉も、追々強く申立候様
に成行候ては、應接も難調次第に可相成、左候へは、不得止開衅端場所に推移候儀は、必然
之道理に可有之歟と存候、仰願、今度使節申立之件々は、許容致間敷、并 皇國諸藩之大小
名、報積年之仁恩、誠心一致、勉勵忠勤、海岸之防禦運良策可警衛 叡慮之旨、列藩之者共
へも可申聞旨、關東へ被 仰遣候は、可然哉に存上候事、

隆 祐

(防海雜記 沿海杞憂 平安戊午光景記)

〔參議冷泉爲理奉答書〕

○防海雜記所載

大坂京都チ
開ケハ不可

諸侯ト議シ
異人ノ渡來
ヲ嚴禁スベ
シ

今度亞墨利加使節之義ニ付、書取被爲見下、所存御尋恐入謹奉候、遂一覽候處、各不容易事共ニテ、數ケ所開地申立候中ニモ、大坂・京都、此兩地別テ不容易、難相成テ申迄も無之候、元來是迄遠路海上ニ一船顯候而も、嚴重之堅メ有之候位之儀、其邊存候ヘテ、使節申立之義ふトハ、少も宥免不宜存候、左様無之候而ハ、追々異國之者恐不憚、不容易事而已增長、人氣之益相立甚不宜事ト存候、尤於關東も、其心得之趣ニハ候得共、猶此上、諸大名深談合有之、右様不容易事柄申立候異國之者、御近國之勿論惣而 神國ニ不近寄趣向、精々有之候様、御沙汰有度義与存上候事、

(平安戊午光景記
沿海杞憂)

〔參議日野資宗奉答書〕○防海雜記所載

資 宗 上

衆議ニヨリ
決定スベシ

亞墨利加使節不容易義申立候ニ付、所意御尋謹奉候 愚昧資宗申上候も恐入存候得共、彼夷人申願候條々、若於被 宥許テ、後患難計存候間、數年治世之御條目不損様、御衆評之義御決定相願度候事、

(平安戊午光景記
沿海杞憂)

〔參議庭田重胤奉答書〕○防海雜記所載

重 胤

國威ヲ汚サ
ザルヤウ處
置アルベシ

亞墨利加使節ニ及應接候義、所存被尋下、謹奉候、愚昧 重胤、不能評論候得共、申立之趣意不容易義与存候、就中開港之義被取縮候御趣意ニ候得共、自然夷類所々ニ止宿致、國民和親仕候而ハ、其害毒不可測、方今國內之人氣不居合義も難計、實ニ不容易儀、何分 神國之威嚴不汚様、所置肝要ニ存候事、

(高辻以長日記 平安戊
午光景記 沿海杞憂)

〔參議中院通富奉答書〕○防海雜記所載

通 富

國內人心ノ
不和ヲ恐ル
諸侯ノ意見
ヲ徵シ聖斷
アルベシ

此度亞墨利加使節申願候趣意、實ニ不容易儀、天下安危此一舉ニ候様奉存候、當時御政務關東ニ御委任被爲在候得共、若祖先遺法變革ニ相成、御國內人心不和之節ニ、内外混亂、如何様之儀出來候も難計、 叡慮被爲安候期も、不被爲在候哉、深奉恐入候、當時夷狄之事情、往昔トハ相違之儀ニ候得共、已ニ弘安之先蹤も有之候得ハ、先大小名之建議御尋問之上、 聖斷被爲在候ハ、自然衆心輯睦、士氣振作可仕、各一致、力を防禦ニ盡し候ハ、御國辱も不相成、 皇威彌相伸可申候、此段宜群議有之候様、乍恐奉存上候事、

(高辻以長日記 平安戊
午光景記 沿海杞憂)

〔參議橋本實麗奉答書〕○伯爵橋本實麗所藏本
外國處置雜誌所載

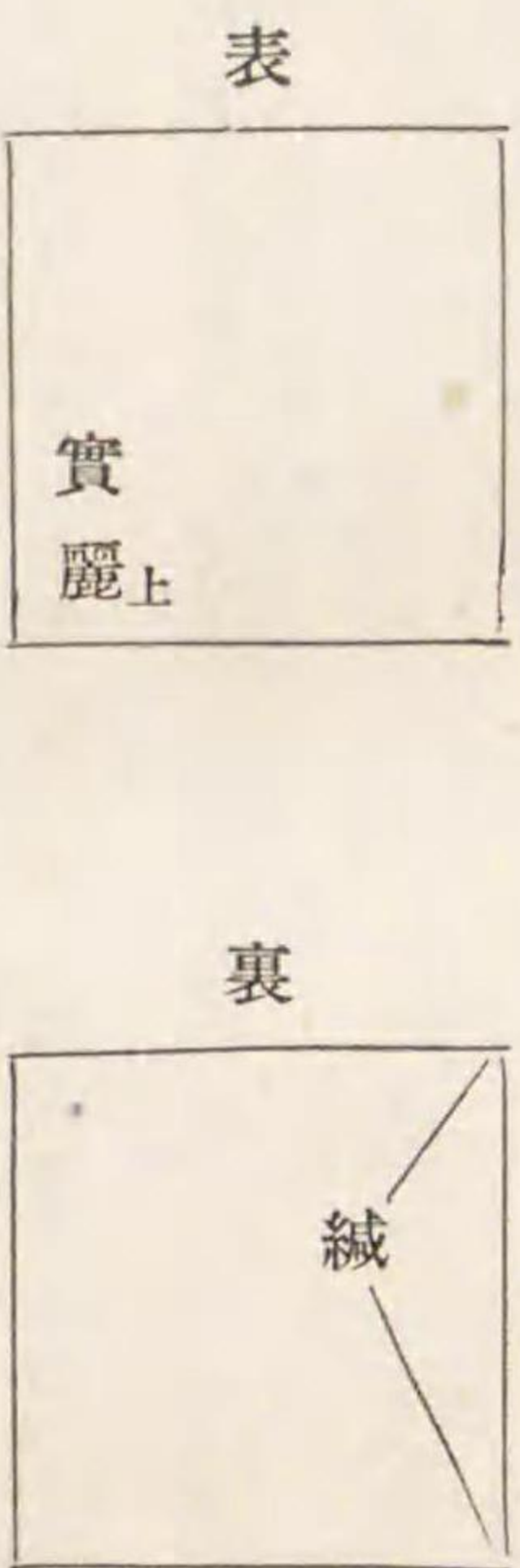
亞墨利加國人願立候儀ニ付、被 尋下候趣謹奉候、不肖 實麗、何共不辨是非候得共、神武天

皇大業を立させ給ひし已來、外夷之 皇國を歸降仕候事、國史等も顯然候得共、未夕夷狄之 皇國を陵辱致し候儀ハ不及承候、然るに嘉永六年十二月、從關東被言上候由、爲心得被 仰渡候にハ、毫髮淺 御國躰を不汚候様被取扱候趣意とハ、相振も候様も存候、時勢を不辨申條に候得共、於下田表商館を建さざ、通商を相發き候由、傳承り候得ハ、是れ以て既に 御國辱のと、誠以歎ヶ敷存候、抑今度彼此商館を建置のを候場所之儀、京師ハ勿論、畿内を爲取建候儀ハ不存寄儀、又懇切ケ間敷利益を申立候儀、元來利潤を甘むし候ハ、天下衆民之通情を候を、從彼利を取らざ候ハ、次第に親睦致し、如何様之禍難を引出し候も難計候哉、交易之儀ハ何程被取縮候共、始終無覺東存候、自然彼意に被爲任候ハ、追々付上り候儀申募り候様も成行候哉と遠察候、所詮條約之儀ハ、弘くこのられ、衆議之多分を被爲任候へてハ、夷情ハ閑、吾國人鬱懷を醸し候端とも相成可申候間、堅固御差免し被爲在間敷と存候也、

條約ハ衆議ニヨリ拒絕スベシ

下田開港ハ國辱ナリ

實麗



正月二十九日、○中中奉書、四ツ折、右、大直シニ包、○外國處置雜誌

(防海雜記 平安戊午 光景記 沿海杞憂)

〔參議野宮定功奉答書〕

○防海雜記所載

定功

今度亞墨利加使節應接有之、差出候御書取等被爲見下、可申上所存旨謹奉候、近來毎々渡來、乞通商候由候得共、其情實難量、後患深爲恐候處、不及防戰、既交易許容之由、一旦和平安穩に候得共、開釁端候儀哉と、深憂歎息之至に候、果而追々數ヶ所開港開市を申立候旨趣、至深謀計策、且驕傲併吞候意味に相聞得、不容易事候、勿論於京都開市之儀も、柳營にも再三評論被盡、警戒許容有之間敷存候得共、他國邊境とても、所々開港相成候ハ、自然亞人 神國に延蔓候哉、左候節ハ、方今國內柔弱、且人心之不居合を見究候、終にハ侵掠候も難測、實以後患可恐、安危不定時節候、有志之族、時勢推移、國體及弊衰候哉と、深懷忠憤候由相聞得候、不失機會英斷有之候ハ、皇國之興復可在此時乎、何分三家并國主已下諸藩之人意を被尋問、裁斷之上、被所置可然候、偏國內衆庶居合一致候、要害を固メ、早ク災殃を令攘除、海内平穩、不汚 神州様專一候、急度被下 勅命可然哉、不顧恐懼言上仕候事、

○次ニ、正月二十七日勅問アリシ藏人頭兩人、廣橋胤保・葉室長順ノ奉答書ヲ掲グ。

(平安戊午光景記 沿海杞憂)

米人ノ神國ニ蔓延センコトヲ恐ル
三家以下諸藩ノ意見ヲ徵シ聖斷アルベシ

安政五年正月二十五日

六二〇

〔藏人頭廣橋胤保奉答書〕○防海雜記所載

胤保

今度於關東、亞墨利加使節申立條々、不容易天下之大事、既去嘉永年中已來、度々不汚神州、不損人民之事、諸社御祈禱被爲在御趣意之義、不拘御國體樣、公武御評決偏所仰願候事、

〔平安戊午光景記沿海杞憂〕

公武ニ於テ評決スベシ

〔藏人頭葉室長順奉答書〕○防海雜記所載

長順

亞墨利加使節ニ及應接候條々謹奉候、申立之趣意、就中不容易事共、無其謂乎、雖非常之期時、古來之制法可有憚候哉、國內人心も不穩候義故、被許候義ニ拘國體候哉、愚昧之義難決、所仰願候事、

〔平安戊午光景記沿海杞憂〕

意見ヲ決シ難シ

仙臺藩主伊達慶邦陸奥守 蝦夷地警備兵交代・領内凶荒處置・邊海巡檢ノ

夕メ、先期三就封ノ許可ヲ幕府ニ請フ。二月二日、幕府之ヲ聽ス。

〔仙臺藩主伊達慶邦願書〕○維新史料編纂會所藏本堀田侍從上京其外聞書所載

正月廿五日、仙臺侯ヨリ御暇御内慮伺、○安政見聞雜記

私儀當年御暇之節、三月中被 仰出候樣被成下度奉存候、此節蝦夷地警備之御用被 仰付

蝦夷地警備兵交代

領内凶荒處置
邊海巡按

先期歸藩ヲ請フ

置、段々差渡候人數も最早交代時節ニ相至り候處、右警衛向手當之儀ニ兼テ厚申付置候得共、未手始之義故十分手配居合不申、依テ此度交代罷越候者共にも、猶又厚申付度義ニ御座候、然レ蝦夷地之儀ニ、邊土遠境極寒之地ニ相聞ヘ、交代之時季相後候得テ、人數一統之難澁ニ相及ヒ歎ケ敷儀ニ奉存候處、當年ニ時節淺相進ミ不申候得テ、當年之通御暇ニテ、右等之手當難行届、尤警衛向御用之儀ニ當時之急務ト聊万事及差圖候得共、領内連々不作之上、去夏中々之不氣候ニテ七拾万石餘之損毛ニ相至リ、國中疲弊ニ相及候、就テ一不通手當向不申付候得テ不相成、且又自國海岸筋之内ニモ當節樞要之場所ニ、自身見置手當仕置度場所淺有之、旁在國不仕候而テ諸事行届不申候間、可相成テ前文之通、三月中御暇被下置、右等之世話仕候樣被成下度候、例年之御暇与テ僅一ヶ月之相違ニ有之、且此節一不通御用多之折柄、斯相願候ニ遠慮至極奉存候得共、何分前文之次第ニテ朝暮心配無據此段奉願度奉存候、表立相願候而モ苦カル間敷哉、先以御内慮得御意度、宜御差圖被成可被下候、以上、

正月廿五日

松平陸奥守

二月朔日、左之覺書添、留守居呼出渡之、

覺

安政五年正月二十五日

六二一

安政五年正月二十五日

表立、月番可被相願候事、○堀田侍從上京、其外聞事

〔仙臺藩士橋本九八郎日記〕○維新史料編纂會所藏本

正月十七日、曉驟雨、陰雨、夜晴、

一風邪御臺御用人之付、同役共へ見繼相頼候事、

一罷出候様被爲 召候趣、秋保方清保、仙臺藩城使ヲ以被 仰出候之付罷出候處、於 御休所左之、但シ、御奉

行衆傍坐御人拂之、

○當御下向、三月之被 仰出候御手入之事、

但シ、伊伊達宗純、前守和島藩主之様へも御打合仕、御警衛方并去年不作等之廉ヲ以御手入可仕、夫とも強

希申立不都合之様子も候ハ、申聞候様こと、被 仰付之事、

○御同席様方、御會合方之付申上候處、被 仰付置候所もとや不及申上候之、御老中方

へ被 仰上儀被相扣候段、被 仰付之事、

但シ、右之御扣之方と、御奉行衆ヲ以内々申上置候所如此、

○堀田様正勝老中、佐倉藩主へ十九日朝夕之内、御逢被 仰入之義、被 仰付之事、○中略

右御下向方御用之義、私之限被 仰付義之付、外々之趣計同役中相傳之事、

同十九日、晴、

六二二

〔安政見聞雜記〕
〔海防秘聞集〕

藩主ノ歸藩
ニツキ内願
ノ件

一堀田様へ御逢、御供秋保方相勤、

同廿一日、雪、晝雷、○中略

一御内用方御草稿入 御覽候處、無御異儀被仰出候事、

同廿二日、晴、○中略

一御内用方之付、志賀殿金八郎、奥右筆頭に罷出御内談仕候上、御草稿入御覽候處可然趣被仰聞、○中略

同廿三日、陰、○中略

一堀田様・伊賀殿松平忠國、老中、上田藩主へ御使者相勤、天神下上田藩下屋敷へ罷越御内用方具之御内談仕引取、於御上屋敷伊

と様之御目通申上置候事、

同廿五日、晴、

一今朝、伊賀殿御勝手へ御暇御願御内慮御伺出役致、波多上田藩公用人と大夫と申御用人ヲ以差出、

御落手被成候事、

二月朔、晴、○中略

一伊賀殿之被召呼御暇御願、表向御月番堀坂安宅、老中、龍野藩主へ可被差出、内々御書取被相添被相渡候事、但シ、

兩御右筆衆愛宕下之申上之事、

一天神下等へ御内々御進物被遣候事、

安政五年正月二十五日

六二三

老中松平忠
固ニ先ヅ内
願書ヲ呈ス

月番老中ニ願書ヲ出ス

安政五年正月二十六日

六二四

同日、陰、雪氣寒シ、

一御月番に今朝前條御願書差出候所、御用人出淵數右衛門ヲ以被成御落手候段被仰出候、御上屋敷へハ直ニ申上候、

但シ右ニ付、三月十二三日頃 上使、十五日御禮と申様仕度との趣ヲ以御手入可仕哉

頃合之所不被仰渡候へ、御手入も相出不申趣直ニ相達候所、右之心得ヲ以夫々御手入仕候様被仰渡候事、

一伊澤殿へ御頼口御進物御使者相勤候事、

一今夜九ツ時頃、御用番方御呼出之上、御暇御願に御願之こと可被下との御附札ニ申、

被相渡候事、

同日、小雨、

一志賀殿へ罷出、一通御願濟之御禮申上、

二十六日卯 申ネテ宸翰ヲ關白九條尙忠ニ賜ヒ、外交ニ關スル幕府ノ

奏請ヲ斥ケ、洽ク衆議ヲ盡クシ、人心ノ歸服ヲ主トスベキヲ諭シタマフ。

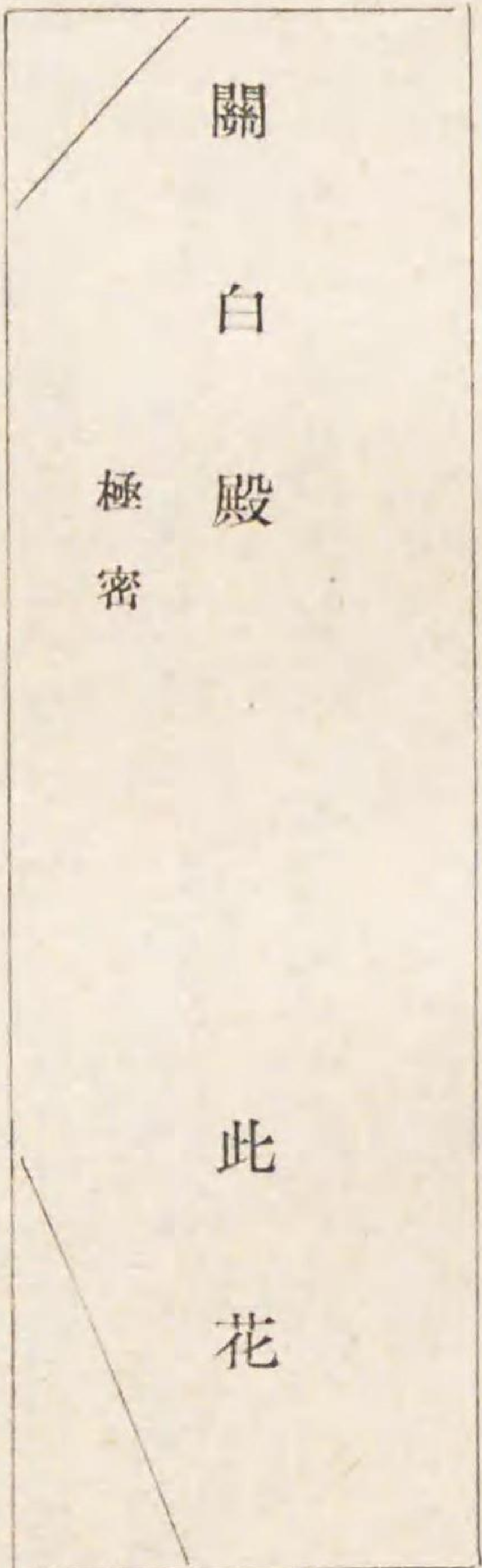
〔孝明天皇宸翰〕〇九條家文書所載

歸藩ノ請ヲ聽サル

米國一件ニツキ宸憂アラセラル

開港開市ハ許スベカラス 三家以下諸侯ノ意見ヲ徵スベシ

〇正月二十六日關白九條尙忠宛



時候專一御用心ニ存候事、如例大亂書、高免御推覽頼入候、吳々モ宜敷々々御勘辨、且右等御含所希ニ候事、何モ荒々、

追々春色加候得共、兎角不順時候ニ候處、倍 尊公御安泰令慶察候、然レ、毎々御面働之義乍令啓候、抑亞國一條ニ付、實以天下一大重事ト、過日ヨリ毎々申候通、乍不及深苦心之事ニ候、

(正月十四日ノ條ニ載ス) 此度各所存書令披見候、尤之申條同意候、仍於愚身淺、兼テノ愚存申述、入于賢耳置候事、何分ニモ、國體不安之時ト、恐縮無限事ニ候、依之開港開市之事、如何様ニモ、閣老上京之上、演舌候共、固ク許容無之様、況畿内近國者、無申迄も事ト存候、此義何レニモ、三家以下諸國大小名、總テ有勅問、各無腹藏處、可有救答様、岐度被申渡可然事、於此場ニ、墨夷申ノ儘許容ニ在いてハ、實以天下憂顯然、々時ハ、於愚身、以何奉對

安政五年正月二十六日

六二五

各自誠心ヲ
盡シ人心ノ
歸服ヲ主ト
スベシ
異人ワカ言
ヲ拒マバ擊
攘スベシ

堀田ノ意見
ニ屈從スベ
カラズ

鷹司太閤ハ
不承知ナラ
シ

伊勢神宮御始明神、申譯無之哉ト、身體茲ニ極、悲痛無限候事、幾重ニモ、各真心ヲ盡、國體
ニ不拘、人心歸服肝要ト存候、若又夷人申立之義、何レニ可許トノ頼ニ相成候者、天下ノ
大事、於愚身者、承知難致候、何レニモ、許容無之様ト存候事、異人之輩、夫ヲ不聞入候ハ
、其時ハ打拂可然哉ト迄モ、於愚身ハ、決心候事、且又堀田備前申條之趣、於無許容者、尤
不快、其上如何様成義申出、俗云おとし候半モ難計存候、乍去天下ノ一大事ノ義ニ付テハ、
備前一人位、如何様申候共、決シテ無當惑、猶更強意返答可然哉ト存候、
吳々も國躰安穩、人心居合肝要、御勘辨頼入候事、
萬一太閤之處、穩便之沙汰ニ成候共、當職之事、無遠慮岐度御きはり無テハ如何カト心配
候事、
此等之旨、宜敷御推覽頼入候事、

〔御附書〕

各勅答、武傳々、入于賢覽候半乍、内々以寫御目ニ掛申候、然シ是ハ極内々、太閤ニハ勿論、
武傳へも、御洩無之用希入候事、何分ニモ、御當職之義、宜御執計所希ニ候事、
吳々も、毎々色々申入、恐縮不少候事、
帳紙之外ハ、太閤へ此通申遣ス心得ニ候所、全太閤不承知ト存候へ共、且レト申遣候、尊公
へ進候事ハ、此節之御事故、今日進候事ハ、内々故、不申候へ共、兼テ夷人之事ニ付テハ、申

入置候事故、万一太閤之方彼是有之候共、尊公御含マテ、此書付も、御引籠邊ニ御覽之様
歟、何卒御賢策ニテ、御應對希入置候事、
太閤此節入來ハ、無氣支ト存候へ共、万一入來モ難計、其節ハ何レ夷人之相談可有之ト存
候、然時愚身モ、右如書取、精々申候積リニ候へ共、是迄之相談事同様ニ、予一言ニ、太閤
多言ニテ、申切ニ成候半ト、其段深心配候、何レニモ、愚存ハ、何國迄も、此所存故、其邊兼
テ御含頼入候事、

正月廿六日

關白殿ニ

此花

極密内々

〔御附書〕
是ヨリ已下ハ、尤不申遣候事、

〔孝明天皇紀〕

長崎駐在蘭國領事「クルチウス」Curtius 參府ノ途ニ就ク。

〔長崎奉行荒尾成允書翰〕

○長崎圖書館所藏本
和蘭領事官參府御用留所藏

〔朱書〕
「午正月廿六日、町便差廻、」

以切紙致啓上候、然者、當地在留和蘭領事官、當春參上之積候處、條約爲取替以來、蘭人

安政五年正月二十六日

六二七

和蘭領事參
府ニツキ京
都町奉行へ
ノ書翰

領事等一行
長崎ヲ發ス

共扱振相替、且是迄之甲比丹とも違ひ、官職有之候もの候間、御取扱并道中筋之儀、件々相伺候趣も有之候處、此節御下知相濟候_レ付、右領事官并筆者蘭人壹人に、支配調役並島田音次郎・同調役下役井上廣輔附添、長崎御役所附觸頭町司定乗通詞共一同、今廿六日、當地^(長崎)出立、長州下關_ノ兵庫迄船路、東海道罷登候_レ付、例之通、其御地^(京都)阿蘭陀宿に止宿、且逗留_ノ致_レ候間、諸事可然御取計有之候様致_レ度、將又其御地_ノおいて、領事官御待遇之儀_ニ付_テ者、御老中方_ノ、所司代衆に、御通達之趣も有之、委細者御勘定奉行より御承知相成候儀与存候得共、猶左之廉々申進置候、

献上物

一蘭人參府之砌、於其御地御渡相成候所司代衆御證文之儀、右_ニ、舊臘中蘭人献上物差立候節、御掛合及ひ候趣も有之候處、献上物之方_ニ、附添之御役所附に御渡、蘭人參府之方_ニ、附添之支配向に、其度々御渡方之儀、御老中方_ノ、所司代衆に、御通達相成候趣、拙者共にも被仰渡候_レ付_テ者、献上物之方_ノ、御役所附に御渡被下候儀与存候、依之領事官京着之上、御證文被下方之儀_ニ、先前通詞共之振合見合、支配向_ニ取計候様申付候_レ付、猶各様に相伺候儀も可有之候間、其節_ニ可然御差圖被下候様致_レ度存候、

進上物

一在留甲比丹_ノ、各様に進上物之儀、先前_ハ甲比丹持參致_レ候處、右進上物、今般_ハ通詞共を以差出、且往返之内、領事官其御役所に罷出、各様に御面會い_テ度旨申立、御下知_ニ

相濟候付、右之通爲取計可申、尤其節手順等之儀_ニ、京着之上、各様に相伺御差圖受候様、附添之支配向に申付置候、且所司代衆に之進上物_ニ、通詞共を以差上候儀、先例之通_ニ、相替候儀無之候、

見物

一甲比丹是迄其表滯留中、市中寺社等見物之儀_ニ、先例有之候外_ニ、附添之_レの_ノ差留來候處、今般之領事官_ニ、前條之次第も有之候_レ付、大要_ニ、是迄之振合_ニ准_レ、市中寺社等、蘭人共相越差支無之場所_ニハ、役々附添出行爲致候積_レ付、御差支之箇所_ニ、附添之支配向に、其御地參着之砌、御達_レ有之候様致_レ度存候、

旅宿取締

一是迄蘭人共旅宿取締等之儀、附添之_レの_ノ、毎々沙汰及ひ候得共、其時々用向_ニ託_レ、蘭人見物之_レ他、他所之_レの_ノ多人數旅宿に立入、或_レ入京出立之節々、宿主并蘭人旅宿に、先前_ノ立入候諸商人共、送迎等_ノ致_レ候趣、右等_ニ都_テ流弊_ニ、殊_ニ當甲比丹_ニ、官吏之身分_ニも有之、別_ニ當方之_レの_ノ是迄之仕癖_ニ相改、諸事不都合之儀無之様、附添之_レの_ノ申付候間、其御心得を以、支配向之_レの_ノ申談候義も候_レハ、其筋々_ニ可然取計候筈、兼_テ御申渡被置候様致_レ度、依之別紙道中奉行御勘定奉行_ニ之御達寫、爲御見合差進申候、

滯留日數

一其御地滯留日數之儀_ニ、往返共用向相濟次第出立之積_レ付、日數_ニ兼_テ難差定、勿論可

附添人

成丈取締候様、附添之ものに申付置候、

一蘭人附添之ものを支配向、是迄て、地役人共之外、手附壹人差添候得共、今般て、支配向兩人差添候て付、壹人ハ阿蘭陀人合宿之積て布、近邊に旅宿壹軒御手當有之候様致し度、若合宿差支候ハ、是又蘭人旅宿最寄に、別段御手當有之候様致し度存候、

右之外差掛候儀を、於其御地、支配向之ものを、各様に相窺候儀も可有之候間、万端可然御差圖可被下候、右可得御意如此御座候、以上、

正月廿六日

荒尾石見守

淺野和泉守様

岡部備後守様

尚以、手附も兩人差添候筈、先比之御文通て申進置候處、右兩人之儀、支配調役並同調役下役て、此度新規被仰付、蘭人に附添出府いし候て付、本文之通得御意候、此段爲御承知申進置候、以上、

〔長崎奉行荒尾成允書翰〕

○和蘭領事官參府御用留所職

〔朱書〕
午正月廿六日、町便差廻、

以切紙致啓上候、然者、當地在留和蘭領事官、當春參上之積候處、條約爲取替以來、蘭人

和蘭領事參
府ニツキ大
坂町奉行へ
ノ書翰

共扱振相替、且是迄之甲比丹とも違ひ、官職有之候もの候間、御取扱并道中筋之儀、件々相伺候趣も有之候處、此節御下知相濟候て付、右領事官并筆者蘭人壹人に、支配調役並島田音次郎・同調役下役井上廣輔附添、長崎御役所附觸頭町司定乗通詞共一同、今廿六日、當地出立、長州下關へ兵庫迄船路、東海道罷登候て付、例之通、其表〔大坂〕て布若銅座に止宿、且逗留も致し候間、諸事可然御取計有之候様致し度、將又其御地おいて、領事官御待遇之儀て付布者、御老中方へ御城代衆に、御通達之趣も有之、委細を御勘定奉行へ御承知相成候儀与存候得共、猶左之廉々申進置候、

一在留甲比丹へ、各様に進上物之儀、先前者甲比丹持參致し候處、右進物今般者通詞共を以差出、且往返之内領事官其御役所に罷出、各様に御面會致し度旨申立、御下知も相濟候て付、右之通爲取計可申、尤其節手順等之儀を、着坂之上、各様に相伺、御差圖受候様、附添之支配向に申付置候、

一甲比丹是迄其表滞留中、市中寺社等見物之儀者、先例有之候外者、附添之もの差留來候處、今般之領事官を、前條之次第も有之候て付、大要は是迄之振合を准し、市中寺社等蘭人共相越差支無之場所にも、役々附添出行爲致候積て付、御差支之箇所ハ、附添之支配向に、着坂之砌、御達し有之候様致し度存候、

一是迄蘭人共旅宿取締等之儀、附添之ものを、毎々沙汰及び候得共、其時々用向に託し、蘭人見物之ため、他所之もの多人數旅宿に立入、或は着坂出立之節々、宿主并蘭人旅宿に、先前より立入候諸商人共、送迎等も致し候趣、右等と都而流弊を、殊當甲比丹と、官吏之身分にも有之、別而當方之ものは迄之仕癖を相改、諸事不都合之儀無之様、附添之ものに申付候間、其御心得を以、支配向之ものを申談候義も候へ、其筋々を可然取計候筈、兼而御申渡被置候様致し度、依之別紙道中奉行御勘定奉行に之御達寫、爲見合差進申候、

一其表滯留日數之儀を、往返共旅具手入等、其外用向相濟次第出立之積を付、日數へ兼而難差定、勿論可成丈取縮候様、附添之ものに申付置候、

一蘭人附添之ものを支配向、是迄ハ地役人共之外、手附壹人差添候を付、一同銅座に止宿致し候得とも、今般を支配向兩人を付、若銅座止宿差支候へ、同所近邊を旅宿壹軒御手當有之候様致し度存候、

右之外、差掛候義を、於其表支配向之ものを、各様に相伺候儀も可有之候間、萬端可然御差圖可被下候、右可得御意如此御座候、以上、

正月廿六日

荒尾石見守

久須美佐渡守様
(前儀、大坂町奉行)

戸田伊豆守様
(兵衛、大坂町奉行)

尚以、手附共兩人差添候筈、先比之御文通に申進置候處、右兩人之儀、支配調役並同調役下役を、此度新規被仰付、蘭人に附添出府致し候を付、本文之通得御意候、此段爲御承知申進候、以上、

〔長崎奉行荒尾成允書翰〕○和蘭領事官參府御用留所職

○正月二十六日大坂銅座詰支配増田金五郎宛

(朱書)
 午正月廿六日、町便差廻、

一筆致啓上候、彌御無異御勤珍重御事候、然と、當地在留之和蘭領事官、自分爲拜禮、筆者蘭人召供、致出府候付、支配調役並島田音次郎・同調役下役井上廣輔、其外地役人共附添、今廿六日、當地出立、先例之通、銅座に止宿逗留可致候、委細之儀を、支配向に申含置候、此段可申伸如斯候、恐惶謹言、

正月廿六日

荒尾石見守

増田金五郎様
(朱書)
(大坂銅座詰支配勘定)

〔長崎奉行荒尾成允書翰〕○和蘭領事官參府御用留所職

和蘭領事參
 府ニツキ大
 坂銅座へノ
 書翰

安政五年正月二十六日

六三四

和蘭領事參府ニツキ京都所司代へ書翰

〔朱書〕午正月廿七日、宿次差廻、

一筆奉啓上候、其御地御平安彌御勇健被成御座、珍重御儀奉存候、然考、當地在留之阿蘭陀領事官、爲自分拜禮、筆者蘭人壹人相俱出府仕候付、支配調役並島田音次郎・同調役下役壹人附添、昨廿六日、當地出立上京仕候間、其御地^{〔京都〕}滯留中相替候儀、御座候考、乍憚可然被仰付候様仕度奉存候、右之趣爲可申上捧愚札候、恐惶謹言、

正月廿七日

荒尾石見守

本 〔本多忠民、京都所司代〕 美濃守様

參人々御中

○「クルチウス」二十六日長崎ヲ發シ、二月三日小倉、同二十三日京都、三月五日駿府、同八日小田原驛ニ至ル。次ニ其道中關係ノ史料ヲ收ム。

〔小倉藩追書控〕

○伯爵小笠原長幹所藏本

二月五日、

一和蘭陀人參府ニ付、長崎御奉行御支配調役並島田音次郎・同下役井上廣輔、大小通詞其外、差添役人、一昨日、爰元止宿ニ付、例之通送狀役を以、音次郎・廣輔に滋飴一陶充、大通詞に鹽鯛一折、小通詞に滋飴一陶被下取計候處、頂戴仕難有奉存候旨、御禮申上候

蘭人參府附添人小倉宿泊

段、申出候、尤昨日、天氣合ニ付、其儘敷泊、今日湊口方下ノ關に無異儀致渡海候段、筋々届出之候、

〔勘定組頭高橋平作書翰〕

○宮内省圖書寮所藏本
川路聖謨京都表御用留所藏

○二月六日大坂銅座詰支配勘定増田金五郎宛

〔朱書〕
大坂銅座へ遣ス

以手紙得御意候、然考、和蘭領事官參府ニ付、其表^{〔大坂〕}に着致し、長崎奉行手附方先觸差出候節、道中筋ニテ猥成品店先等へ並へ置候をも見請候間、^{〔淺草市ニテ市エシギト唱候類ニ〕}領事官見及ひ、評判記等^{〔大坂〕}も書顯し候考、不可然候間、通行之節、右様之品を取入可置旨、間之宿にも宿方より通達可致旨先觸へ添、宿々に相達置候様御談可被成候、右可得御意如此御座候、以上、

二月六日

高橋平作

増田金五郎様

〔勘定奉行川路聖謨等書翰〕

○川路聖謨京都表御用留所藏

○二月二十一日大坂町奉行宛

以手紙致啓上候、然考、和蘭領事官此程御地^{〔大坂〕}に着致し候趣之處、當地御用柄之御程合もい^{〔京都〕}まご相分り兼候折柄、外國人立入、是迄參らざる處、所々徘徊以多し候考、一体之折合

和蘭領事通行ノ際猥成品ヲ店頭ニ置カベカラズ

安政五年正月二十六日

六三五

和蘭領事京
都見物ノ際
ハ先例以外
ノ地ニ立入
ルヲ禁ズ

方こも拘り、意外之意味も有之、甚不都合こ有之候、尤是迄和蘭甲比丹之振合こ候得と、仔細も無之候得共、此節領事官与相成候後と種々申立、前々よりと手廣こ徘徊致度心組之様子こも有之、當節此地坏よて右等之振舞有之候と、何分御差支之場合も可有之と深懸念仕候間、此度若京地に罷出候ハ、寺社參詣市中見物等先格之場所々々ハ不苦候へ共、備中守殿御始、役々在京いちち寺院に旅宿いちち居候場所坏に、立寄候様こ不都合こ有之、假令尋問等有之候とも、右御用不相濟内と一同面會等も不相成次第こ、且と御所廻り其外先格無之場所に相越候様こ不こ宜候間、兎こ角此度と先々之振合こ心得、新規之場所手廣よ徘徊等不致候様可申諭旨、附添之長崎奉行支配向に御申含有之候様致度、尤支配向よ附添之とのにも文通爲致置候、右可得御意如此御座候、以上、

二月廿一日

岩瀬肥後守

川路左衛門尉

久須美佐渡守様

戸田伊豆守様

川路聖謨等
ノ書翰ニ對
スル返翰

〔大坂町奉行久須美祐雋等書翰〕○川路聖謨京都表御用留所取
昨廿一日附御狀、今廿二日已下刻相達致拜見候、然と、和蘭領事官此程當表に着致し候趣

之處、其表御用柄之御程合もいまと御分り兼候折柄、外國人立入、是迄參らさる所坏、所々徘徊致し候と、一体之御折合方こも拘、言外之意味も有之、甚御不都合之次第、尤是迄和蘭甲比丹之振合こ候得と、子細も無之候得共、此節領事官与相成候後と種々申立、前々よりと手廣こ徘徊致度心組之様子こも有之、其表坏こ右等之振舞有之候と、何分御差支之場合も可有之と深く被成御掛念候間、此度若哉京地に罷出候ハ、寺社參詣市中見物等先格之場所々々ハ不苦候得共、備中守殿始、御役々御在京寺院御旅宿之場所坏に、立寄候様こ不都合こ有之、縱令尋問等有之候とも右御用濟無之内と、御一同御面會等も不相成次第こ、且と

御所廻り、先格無之場所に相越候様こ不こ宜候間、兎こ角此度と先々之振合こ心得、新規之場所徘徊等不致候様可申諭旨、附添之長崎奉行支配向に申含候様被成度、其儀御支配向に附添之者にも文通致置候段も被御申聞候御書面之趣、委細致承知候、然ル處、長崎奉行支配向に之儀、蘭人共こ附添今朝辰上刻當表致出立、伏見表に向罷登り最早行違相成候付、右之者其表着之砌可然御申含御座候様致度候、尤當表之儀最前着之節蘭人共相越差支候箇所等、附添之者に相達置候趣相守、押り右場所々々に出行相望候儀も無之、其余之箇所も大要是迄之振合こ相替候儀無御座候、右之趣早々御報可得御意如斯御座候、以上、

和蘭領事大
坂ヲ發シ京
都ニ向フ

二月廿二日

戸田伊豆守印
久須美佐渡守印

川路左衛門尉様
岩瀬肥後守様

〔川路聖謨日記〕

○宮内省圖書寮所藏本

○本文ノ句讀點其他ハ、總テ川路聖謨自筆原本ノ態ニ從ヘリ。

二月廿三日 晴○中略。蘭人參着之。御用向よて。九ツ半時よて調物。七ツ半時過よてふせり候處。蘭人之事○中略。六ツ時過よて被起申候。

〔曇華院日記〕

○維新史料編纂會所藏本

二月廿四日、庚午、雨、

一阿蘭人上京、昨日東山邊遊歩いとし、今日所司代、奉行所へ出候由、三條通行致ス、

〔駿府町奉行大久保忠寛書翰〕

○和蘭領事官參府御用留所藏

○三月十日長崎奉行岡部長常宛

以切紙致啓上候、然者、阿蘭陀人參府之付、去ル五日、府中宿泊○中略旅宿に着之上、府内爲遊覽罷出候由及承候間、直ニ差留爲引戻候上、附添罷在候御支配向島田音次郎旅宿に家來

蘭人京都ニ至ル

蘭人上京所司代町奉行ヲ訪フ

蘭人駿府宿泊

市中ノ遊覽ヲ差止ム

差遣、文通○中略及ひ心得方承り候處、今般之蘭人ハ領事官之儀○中略御條約之趣も有之、御緩優之御取扱○中略品々御伺濟之由、既京坂遊覽之儀○中略江戸表ハ被仰渡も有之候由、其外宿々之儀者、差支有無附添より承り合、差支無之場所爲致遊覽候趣○中略宮驛ハ右音次郎其外附添役人之觸書差出○中略有之候間、當所之儀も、一應拙者方に不申聞段○中略不行届之廉○中略候得共、江戸表ハ被仰渡も無之上○中略外宿々粗同様之心得○中略宿方ハ案内爲差出爲致遊覽候儀之趣○中略既御城端迄可罷出處、差留引戻候間、今般之儀者右○中略事濟申候、尤右附添ハ差出候觸書○中略前日宿方に到來之由候得共、右○中略全宿内之者共迄之儀与相心得、注進も不申出罷在候故、右様途中○中略差留候時宜○中略至候段○中略宿方不行届之廉も有之候得共、當所之儀○中略夫々持場も有之、御城廻り遊覽○中略候ハ、當所御城代にも御通達有之、御城代ハ御加番之向に達不申候○中略ハ差支申候、其外寺社之内、久能○中略勿論、寶臺院・淺間等孰も御由緒之寺社○中略付、前以拙者ハ達○中略置不申候○中略ハ、差懸り附添之役々○中略如何様可及答候哉も難計存候間、以後右様之節○中略前以御達有之候様致度存候、右之段可得御意如此御座候、以上、

三月十日

大久保右近將監

岡部 駿河 守様

安政五年正月二十六日

猶以、支配所内道中筋にて、支配向爲取締差出候得共、本陣に着見届、支配向を引取候後別段罷出候儀故、右之次第に相成候儀に御座候、乍去加番衆持場御堀端迄を罷出内差留候間、無事相濟申候、但、以後之處も市中遊覽之儀を、各様方拙者方迄被仰聞候得共、差支無之候得共、御堀端邊之儀、御城代にも御達、久能山・寶臺院・淺間社三个所之儀を、御伺濟之趣を以、拙者方に御達有之候歟、又ハ御老中方直に御下知御座候歟に無之候を、申達候に不都合之筋も御座候間、此段爲念得御意置候、以上、

駿府町奉行
ノ書翰ニ對
スル返翰

〔長崎奉行岡部長常書翰〕

和蘭領事官參府御用留所職

御切紙致拜見候、然者阿蘭人參府に付、去ル五日、其表泊に、(駿府)旅宿に着之上、府内爲遊覽罷出候に付、直に御差留、其上に附添支配向島田音次郎に心得方御尋問被成候處、今般之蘭人を領事官之義に、御條約之趣も有之、緩優之御取扱に、既に京大坂遊覽之義を、當表方其筋に被仰渡も有之、其外宿々之義を、差支之有無附添之者方承り合、差支無之場所爲致遊覽候儀、同人申述、然ル處、其表之儀も、當表方別段被仰渡も無之故、宿方方案内爲差出、粗外宿同様之心得に爲致遊覽候趣に、既に御城端迄も罷出處御差留、今般右に事濟候趣、尤附添之者方之觸書に、前日宿方に到來之由に候得共、右者全く宿内之者迄之義と心得、注進も不申出、右様途中に御差留引戻候時宜に至候段、且御地之

義と夫々持場も有之、御城廻り遊覽に候ハ、御城代にも御通達、御城代御加番之向に御達無之候を、御差支有之、其外寺社之内、久能を勿論、寶臺院・淺間等孰も御由緒之寺社に付、前以貴様に御達置無之候を、差掛付添之役々に如何様之義可及答哉も難計、以後右様之節を、兼り御達可申旨、御紙面之趣、委細致承知候、以後右様之節を、前以貴様に拙者共と御達申候様可致候、右御報旁可得御意如斯御座候、以上、

三月

岡部 駿 河 守 印

大久保右近將監様

猶以、御端書被御申越候御支配内道中筋にて、御支配向爲取締御差出、本陣に着見届引取候後、別段罷出候儀故、右次第に相成、尤加番衆持場迄ハ不罷越内御差留有之候得共、以後遊覽之節を、貴様迄御達申候得共、御差支無之候得共、御城邊之義を、御城代にも御達、久能山・寶臺院・淺間三ヶ所之義、伺濟之趣に御達申候歟、又者御老中方直に御下知有之歟に無之候を、御不都合之義も有之趣、是亦致承知候、以上、

〔小田原
驛本陣〕片岡水左衛門所藏本

片岡家文書

三月八日、御泊、

一 阿蘭陀人

人數十八人

安政五年正月二十六日

領事官

三ノ二百文

六四二

イ・ハ・トンクル・キユルシユス

四十七

書記方

クルーユ・アン・ホルスフルツク

二十四



フラリマ茶ノ子
但リウインノ藥

御下置候

御檢使

金壹兩 宿料

長崎奉行支配御調役並

嶋田 音次郎様

大通詞

楢林量一郎様

下役

井手 廣助様

小通詞

稻部積次郎様

觸頭

村井 嘉作様

御在勤方

小川善十郎様

定乗

塚本 鐵藏様

右拂人數

三十一人二百
三十一人百廿四
十六人百四十四

全

成瀬 爲藏様

右ニ此度蘭人通行休泊人馬繼立方其外萬事改革ニ布、休泊賄向も前書之通振合ニ相改候
ニ付、宿方へ申談之上、下宿之分ハ不殘御同宿ニ相成候、足錢本陣之義ニ評義中ニ御座候
事、

○三月十日、「クルチウス」江戸ニ到リ、眞福寺ニ入ル。同日ノ條參看スベシ。

前水戸藩主德川齊昭前權中納言 書ヲ大坂城代土屋寅直采女正○土浦藩主 ニ寄セテ、公武

ノ融和ニ力ヲ效サンコトヲ望ム。

〔前水戸藩主德川齊昭書翰〕○宮内省圖書寮所藏本
開見秘録所載

正月廿六日、大坂御城代土屋采女正へ、水戸前中納言殿ヨリ御書翰之寫シ、

舊冬林大學頭等登リ候由之處、又々此度堀田初多人數登リ候由、何ノ御用カハ勿論承知不
仕候へ共、夷狄之義ニ付テ之事ニモ可有之哉ト致推察候、定テ御警衛之儀ニ付テハ、大坂
ヲ巡見可致哉ト被察候へバ、格別貴見杯モ直ニ御面談ニモ可相成候へバ、御力ニ相成候半
ト令遠察候、扱舊冬林大學登リ、又此度老中等多人數登リ候義ハ、如何ノ譯ニヤ、所々御警
衛等ノ巡見指圖ノ爲ニモ可有之哉、又林大學御役輕キ故不行届之事ニテ、老中登リ候ニモ
可有之哉ナド、色々考候へ共、遠境之義不相分、致心配候、世上ノ沙汰ニテ承リ候へバ、

安政五年正月二十六日

六四三

奏聞ノ簡條
或ハ叡慮ニ
反セン

公武間ノ睨
離チ恐ル

公武融和セ
ザレバ外交
内治共ニ失
敗セン

堀田川路等
ニ内意ノ傳
達ヲ望ム

安政五年正月二十六日

六四四

今上御發明ニアラセラレ候由、殊ニ當時ハ御血氣之事故、申上ニ相成候ケ條ノ内、何ゾ
叡慮ニ不叶御義有之、大學等ノミニテ不行届、此度多人數登リ候様ノ義ニモ可有之哉致心
配候、若又 叡慮御尤之義ニ候ハ、公邊ニテモ御用ニ可相成、堀田・川路如才モ有之間
敷、又公邊無御據御事ハ、少々ハ 叡慮ヲモ御曲ケ被遊候事モ無之候テハ、公武ノ御間ワ
レノニ相成候テ、御双方ノ御爲メ尤不可然ト心配仕候、秀吉ノ頃又ハ東照宮ノ實録ヲ見
候ニ、京地トハ悉ク御親シク被遊タル御様子ニ相見、台徳公ニハ姫君迄モ御參内相成候ヘ
ハ、御三代ノ頃迄ハ御親シキ事ト被察候處、太平久敷打續キ物事御手重ニ相成候ヘ、定
例之御事ハ格別ニ候ヘ共、自然御疎遠ニ相成候半歟、前文之例ナド承リ候テハ、ケ様之節
ハ如何可有御座哉ト心配仕候、如何様之事御申立ニ相成候哉、 叡慮如何ニ候哉、難奉測
義ハ勿論ニ候得共、前ニモ申ス如ク、 叡慮御尤ノ事ハ公邊ニモ御用ニ相成リ、又公邊ニ
テ無御據事ハ少シハ 叡慮ヲ御曲ニテ、公武ノ間ワレノニ不相成御和議ニ不相成候テ
ハ、夷狄之義ハ暫ク指置キ、内地ノ治マリ方如何ト御苦勞申上候、尤堀田・川路モ如才ハ有
之間敷事ニ候ヘ共、遠境心配ニ候、其地ハ此方ト違ヒ、京地ニ近ク候ヘ共、ヤハリ御分リ兼
御心配ト存候、若シ堀田・川路等、大坂巡見ニモ參リ候ハ、警衛向等御相談、此旨御咄シ
相成候テヨロシクト存候、此段申進候也、

正月廿六日

水 戸

土 屋

采 女 正 殿

(昨夢紀事)

松代藩士佐久間修理啓○象山幕府ノ對外處置軟弱ナルヲ憂ヒ、老中ニ建言

スルトコロアラントス。藩廳其謹慎中ナルヲ以テ聽サズ。是日、修理、密

ニ書ヲ處士梁川新十郎孟緯○星巖○時
ニ京都ニ在リニ寄セテ國事ニ斡旋センコトヲ求ム。

〔佐久間修理上書案〕○象山全
集所載

口上書取

佐久間修理義、私義に内々各様迄申立吳候様申聞候義は、昨冬、亞墨利加入江戸表參著の
上、登城御目見申上候以來の始末、十二月二日、堀田備中守様御宅に於て應接御座候次第
迄、近日傳覽仕、誠に以驚入候義に奉存候、(嘉永六年)丑年以來の御處置方が御處置方に候へば、此御
次第に至り候事、固より申上方も無之候義には御座候へ共、何事も彼れが申に任せられ、
格別の心入懇篤の至りに候など御挨拶御座候て、交易は勿論、ミニストル差置かれ候事
迄、御聞届に相成候義、痛哭流涕に堪へずなど申も尙愚かに奉存候、但開港場一條、少々御
拒の體に相見え候へ共、是亦、是迄の御様子柄を以て相察し候へば、遂にノ彼れの申出
候通本邦の要領たる大切の地と雖も、開港御聞届に可相成は必然の御勢の様奉存候、其上

米使ノ要求
ニ從フハ殘
念至極

安政五年正月二十六日

六四五

開港場ヲ多クセバ後害アラシ

安政五年正月二十六日

六四六

米使江都ニ滞留我國情ヲ探ル

我ヨリ外國ニ未ダ差遣ノ人ナシ

彼れの望には、開港の場所を數多くし、本邦の人民と交易賣買勝手次第致し度との義に候へば、異日の大害を醸成し候事眼前にて、則ち唐國英夷の取合の節、殊の外苦み候岸奸の起る根元と奉存候、仍てつらく愚考仕候に、丑年已來總て一旦の御無事を被爲求候より、御果決の御勇斷と申もの一切御座なく、舊に依て因循苟且の御事のみ多く、右故に本邦開關以來曾て是なき外國の輕侮を被爲受候て、その國人に至重の土地御借與有之、五里七里の閒氣隨に徘徊相叶候様相成、剩へ此度營中に致出入御目見迄も申上、申立の御返答相待候と號し、月を累ね都下に罷在候をも其申すに任せ、其儘被差置候へば、定て其間に此方の御政事の御模様より、御役人方の賢不肖學不學、其他一切の動靜虛實に心を就け相探り、其自國の心得に致し候は勿論の事と被存候、然る所、此方よりは江戸御建國已來の御法なりとて、一人として外國へ被差越形勢事情探索の義無御座候は、深く怪み奉存候義に御座候、周官の法、王化に服し候内地の諸侯の國だに、大行人の職有之、歲徧存するとして毎年その安否を問ひ、三歲徧頰するとして三年毎にその政治の效を視、五歲徧省するとして五年毎に其風俗の美惡を察し、又小行人をして周く天下諸侯の國に行き、その萬民の利害を探て一書となし、禮俗・政事・教治・刑禁の逆順を索して一書となし、悖違・暴亂・作慝、猶犯^レ令者^ヲ一書となし、札喪・凶荒・厄貧を一書となし、康樂・和親・安平を一書となし、每國

間諜ヲ用ヒ敵情ヲ探ルベシ

これを異別して王に反命し、これを以て天下の事を周知すると御座候、是古聖王の亂を未然に防ぎ、患を未萌に消するの大典と奉存候、況や當今の世、太平はたゞ本邦のみにて、其他世界萬國兵亂絶えざる時節、亞墨利加の如きもの出で來り、左なくとも蒸汽船發明以後は、五大洲も比鄰の國同様に相成候事に候へば、周官の大典等御參考の上、やはり戰國の際に敵國を得られ候思召にて、第一に間諜を用ひられず候ては叶はざる事と奉存候、孫子十三篇、始計を以て篇首とし、用閒を以て篇末に列し候は、所謂五事七計、兵の先著に相違も無御座候へ共、初めに間諜を以て敵人の實を得候にあらざれば、其計の施し方も絶えて無之候、此故に首に始計ありて終に用閒有之候は、易道を以て申さば、全く貞下に元を起すの意と申事に御座候、げにも軍國の間諜は、瞽の相あり、聾の史ある如くにして、瞽に相なきときは、前に水火ありと雖もこれを知らず、聾に史なき時は、うしろに車馬ありと雖も是を省せず、敵國の交に間諜なき時は、敵國の吾を謀り吾に啗はしむるの事、總て知るべきやうなく、敵國の形勢、敵主の仁暴、敵將の能否、敵衆の強弱、敵兵の利鈍、竝に其實を得ず、然る時は、所謂廟算と申もの由て立つべき謂れ無之、和して然るべきや、戰ふにしくまじきや、固守に利あるや、固より論に及び難く候、丑年亞墨利加の事起り候節、修理義、既にこゝに存付候に就き、軍艦御買上げの事に託し、海外に人を出し、當今世界の形勢を

安政五年正月二十六日

六四七

親しく視せしめられ候事、當今第一の急務たるべしと申義、建白仕候筋も御座候へども、御取用ひに不相成、其内土佐領獵師の萬次郎、亞墨利加へ漂流し、數年の後歸國致し候所、御國法の通禁綱せられ罷在候へども、亞墨利加の事起り候故を以て、俄に御召出しの沙汰有之候に付、修理竊に喜び存じ候は、外國渡海の御國禁、表向御除きに相成候には無之候得共、外國漂流のものは迄終身禁綱被仰付候所、萬次郎義亞墨利加へ漂流候故を以て、何かの御尋筋も有之被召出候事、是迄の御大禁先づ相弛み候義と存じ候、萬次郎等一文不通の獵師の子、何等の御用も相辨じかね可申、去らば門人の内漢學も相應に出來、洋學にも志ざし、兵學等も可也心がけ居候者、萬次郎に倣ひ漂流と申ものにて、彼國へ渡り形勢事情委しく探索いたし罷歸り候はゞ、一廉の御國用に相立可申心を盡し候義、大なる纏れと相成り、公邊より重き御咎を蒙り、久々御奉公申上候義も不相叶、御手數のみ罷成候義、重々恐入候義に奉存候、右御咎中、上書等仕候義は、極めて難相成筋承知仕罷在候へども、外國へ係り候御國患の義は、他事と違ひ、世界萬國に比類なき天朝の天津日繼の御安危にも拘はらせられ候義にて、獨徳川家御一代の御榮辱のみに無御座候へば、皇國に生を受け候ものは、編戸の賤民迄も、皆敵愾の心を懷き可申、まして修理義、籌海の義に於ては多年苦心も仕候義、尙又近年屏居仕罷在候ても、初志を廢せず、彼是と研究仕候筋も御座候所に

て、此度の御運びに相成、此儘にては爭亂近きに起り、天下瓦解土崩の勢に可相成、痛心の極に奉存候へば、何分口を箝み罷在候に忍びず奉存候、彌要地の開港御聞届に相成候義にも候はゞ、是非とも、此節別段に、御制度を不被爲改候ては難叶義と奉存候所、亞人と應接對話舊臘二日迄の御様子にては、尙閒課の爲、人を外國へ被遣候御催も無之、扱又航海術海軍等の師を折角和蘭より御招きに相成候義に付、江戸御膝元へ被招呼、新たに御取立に可相成海軍御軍制の義を始めとして、御老中様方御始親しく御相談も被成御座、御旗本方御家人一統へ修業被仰付候程に無之候ては行届きかね候義、又日本の武備は、公儀御一手のみ如何様御行届相成候ても、大小の諸藩一統に御行届無御座候ては、御成就と難申義に付、諸藩方も人選を以て、其技術致講究候様御沙汰可有御座義と奉存候所、夫等の義も之なく、其もの長崎にのみ被差置、江戸表より僅かの御人を被遣、一二年にして交代候様の義、右一二年の修行にて交代致歸府候ものを師範役として、海軍御取立稽古等も御座候よし、童子輩に手蹟を習はせ候だに、其師をば擇み候義、一ヶ年二ヶ年手習致し候兒輩有之候とて、夫を以て師匠には致し申まじく候、まして航海術海軍戦法等の如きは、西洋に於ても大學問と稱し候、然るをいかなる聰明聖智の人也とも、一二年にして會得候義は兎ても難出來候、況や竝々の人にして、いかでか纔の日月にして其術を盡し候事を得候はむ、

洋學ノ普及
ヲ急務トス

安政五年正月二十六日

六五〇

天下ノ有志
者洋書ヲ得
ルニ苦ム

幕府當路者
外國ノ智識
ナシ

開港ト共ニ
内政ノ改革
ヲ要ス

然る所只今に其御心付も無御座候御様子に被存候、又西洋の天文・地理・水利・兵法・器械
學・詳證術等の書は、漢籍同様に日本國中普通に澤山無之候ては、其術一統に開け不申、其
學術開け不申候時は、彼れに對抗し候國力に至りかね候義にて、司馬法にも見物與伴、是
謂二兩之一と有之、敵人の用ふる所の物を見候ては、必ず效うてこれを用ひ、これと倅しか
らむ事を思ふは、いにしへより軍法の第一義にて御座候、然る所公邊にて御詔とて、西洋
書籍御取寄せに相成候へども、當路の御役人偏固狹隘の御心得より、普通の賣買今に無
之、依て偶有之候ても世間拂底の品故に、莫大の高價にて人々手に入り候に至りかね、天
下有志のものと雖も、先第一に洋書の難得に苦しみ候、右之次第故に、速に開け可申學術
も、今日に至り陸々開け不申、學術の開けざるより、西洋詞書一部有之候へば、誰々にもよ
く分り候ミニストル・コンシユル等の事、公邊歴々の御役人方御寄合にて一人も其御心得
なく、十一月六日、亞人對話の節、右等餘りに幼稚なる事ども被尋候、嗚かし亞人の心
は、日本歴々の役人かく迄不學無知のもの歟と異み申すべく候、則ち御國體を恥かしめ候
の大なるものと奉存候、洋學だに普通に開け居候へば、決して此陋無之候、以上箇様に見
易き利害得失も、未だ明ならざる御時節に付、此度要地開港御聞届に相成候ても、別段御
制度を被爲改候所に、恐らくは御心付有御座聞敷、左候は天下瓦解土崩の勢目前に御座

籌海ノ策ハ
多年研究ス
謹慎中ナガ
ラ老中ニ上
書セントス

候義、果して天朝の御安危に拘はらせられ候御事、徳川家御一代の御災患のみに無御座候
義と奉存候へば、日夜憂苦仕り、實に身の措き所を知らず候仕合に奉存候、只今御咎を蒙
り罷在候身分には御座候へ共、一日生命を保障し罷在候も、則ち御國恩の義に付、天下御
大切と存付候義黙し罷在候に忍びず、其上是迄籌海の義に付、存付候筋數々御座候て、或
は上書にも申上、或は文詩にも著し、或は同志に語り候義、一時は其徴なきが如くに候義
も、數年の後に一として愚見に違ひ候義無御座候、左候へば、此度御大切と奉存候筋も、必
らず其徴あるべき義と奉存候へば、彌黙止罷在候ては御國恩にも背き候筋と奉存候間、恐
入候義に御座候得共、右存寄の次第、御老中様方迄上書仕度奉存候、尤も御政事向御制度
の上に多く關係仕候義に付、封書に仕差上度奉存候、此義相叶可申義に有御座候哉、實に
容易ならざる天下の大事に付、厚く御勘辨の上、修理志願相達し候様、御執成之義奉頼度
奉存候、以上、

安政五年戊午正月十五日

依田源之丞

○本書ハ、佐久間修理が其ノ門人依田源之丞ノ名ヲ以テ、松代藩ノ家老ニ提出セシ上書ノ案ニ係ル。

象山年譜

○象山全集所載

安政五戊午年、(二五一八)聚遠樓時代、(蟄居第五年目) 四十八歳、

安政五年正月二十六日

六五一

正月十五日、依田源之丞の名を以て、幕府に封事を上る事の許否を藩老に伺ふ、許されず、

〔佐久間修理書翰〕○宮本璋所藏本

○正月二十六日梁川星巖宛

天下之事
戊午正月下浣密之梁川星巖之贈書草稿

打絶御音問も仕らば候事、嚴まき法禁の係る所、不及是非候次第、定て御原鹽も可被下候、然る所、此度右之禁令を破て極密及呈書候、子細ハ追々世上致傳播候客冬亞人江府參着登城已來の次第、定て其御地こても委細御傳聞可被成、其義こ就ての事こ御坐候、夷患年を追て致浸漸殆と以膚の勢こ相成、皇國の御大事爰こ追ま候様奉存、乍恐兼々杞憂を懷き罷在候、

天朝の御安危こも拘ま可申形勢、獨り

徳川家御一代の御災患のこ無御坐と被存候へハ、當時禁錮の身こハ候へとも、一日性命を保續し候も則 國恩と奉存、此御時節聊う天下こ裨益も可有御座と致料見候義有之候を、無下こ黙し罷在候ハ 國家の洪恩こ奉背候義と致覺悟、當十五日別上ニ載之昏第一号之通、親戚のものを以て重役共迄差出し候所、數日之後志之程尤の事こ候へとも、當節之場難相成旨を以て、右書面被差戻候、是又不及是非次第御坐候、嗣て又傳聞候へハ、林家 御使を被

禁令ヲ破リ
極密書ヲ呈
ス

外交問題ニ
關シ藩老ニ
上書シテ却
下セラレ

丁酉年春月廿三日

丁酉年春月廿三日

天下

打佐の方面は... 徳川家の一門の... 此の情事... 天朝の女老...

徳川家の一門の... 此の情事... 天朝の女老... 中山侯の... 中山侯の... 中山侯の...

中山侯の... 中山侯の... 中山侯の... 中山侯の... 中山侯の...

中山侯の... 中山侯の... 中山侯の... 中山侯の... 中山侯の...

中山侯の... 中山侯の... 中山侯の... 中山侯の... 中山侯の...

天朝の威徳の... 天朝の威徳の... 天朝の威徳の... 天朝の威徳の... 天朝の威徳の...

天朝の威徳の... 天朝の威徳の... 天朝の威徳の... 天朝の威徳の... 天朝の威徳の...

天朝の威徳の... 天朝の威徳の... 天朝の威徳の... 天朝の威徳の... 天朝の威徳の...

天朝の威徳の... 天朝の威徳の... 天朝の威徳の... 天朝の威徳の... 天朝の威徳の...

天朝の威徳の... 天朝の威徳の... 天朝の威徳の... 天朝の威徳の... 天朝の威徳の...

堀田閣老ノ
上京ハ喜ア
ベシ

公使ヲ駐劔
セシムルノ
議

米人ノ言フ
トコロ誤レ
リ

米人ノ非ハ
難詰スベシ

命、舊臘十四日江府發軔にて上京の所、這々の體にて歸府有之、京師へハ堀田閣老被爲
召、川路司農も一同發駕と申事、於是竊喜奉存候へ、

天日未だ地を墜じ、兼く僻遠に罷在候某輩も、のけまくもかこき

(九條尚忠)

御上の御事へ奉申上よも及はじ、殿下之御明敏、并中山卿の御俊拔等耳を轟き罷在候
所、果して此御時節其奇特も相顯へれ候とも被存、難有義に奉存候、竊喜愚察仕候よ、林家
御使にて不相濟、閣老被爲

召候御事へ、定て舊臘二日、堀田侯の第に於て亞人と應接有之候、其第三條ミニストル差
置き候を御聞届に相成候義と被相察候、此ミニストル一段の事へ、某よハ最初亞人申立の
次第傳覽候節、既に愚意存候へ、普天の下王士よあらさるとなく、率士の濱王臣にあら
さるとなりと申候よ、亞人の申よ據り候へハ、ミニストル被差置候構の内ハ自國同様を致
し、日本官府の制度を受けざる趣相見え候、左候へハ邦域の内にて王士にあらはし、
王臣にあらざるもの有之候義に付、開闢以來の大變とも可申、左候へハたとひ當今の時制
已むを得ざる御筋合御坐候とも、先第一よ

天朝へ奏聞を被爲遂、然る後御處置無御坐候てハ濟せられまじき義と奉存候、其上愚管
てハ、亞人申立の次第愚嚇欺瞞の談多く、罅漏致百出候事共候へハ、能く其辭命を修め

辭命ノ功

て其非を詰難し、たとひ勢力の敵均せは候よ、異日御許容可相成義候とも、不筋の次第ハ、是非一時ハ一言もふく申伏せ候様無之候てハ、御國體難立義と奉存候、春秋の際に當て、鄭の小國を以て晉楚の間に介し、その兵禍を受け候事殆ど虚歳なく候ひしを、子産政を執り候に及て、辭命にあらされハ此患の免れぬときを知り、裨謀・子大叔・子羽等の名士を選り用し、創草討論修飾の功を加へ、更に自らもこれに潤色を施し、諸侯賓客交通の間に用ひ候故に、毎々敗事あることなく、定・獻・襄三公を合せて五十餘年の間、兵禍を免れ、社稷人民これに頼て保全を得候事、全く辭命の功と存し候事と御坐候、乍去其辭命を行ひ候よも、膽略無之候てハ埒あき不申、平丘の盟に、子産・承貢賦の次を争ひ、日中よ暮至り候も、富文忠契丹に使して、盛氣を以て獻納の二字を却け候も、此膽略と存し候事と御坐候、當今亞人應接の御役人衆にハ、是等樞要の事、聊う御念慮に及られざる事と竊に致歎息、試て某此局に當り候ハ、箇様にも申談し度、(所見ナシ)第二号の如く草一見候事も有之候、最初よ江戸御主宰にも、此所に思召御坐候ハ、

天朝への御敬禮も被爲届、御國體も相立ち、且亞人の膽を破り候義に付、後々御取扱にもいふ計被遊よき御事可有之と存し候事候處、辭命等聊う御心よのけられは、開關已來天下の大變革に係り候義を、

開關以來ノ
大事ヲ奏請
セザルハ大
義ニ缺ク

堀田閣老ノ
罪死ニ當ル

堀田侯ハ借
ムベキ人物

天朝へ御奏聞も無御坐、江府御一存を以て、外國人へ御返答有之其後よ、
天朝へ被仰上候てハ、乍恐大義に於て難被爲濟御筋と奉存候、大學殿這々の體にて歸府と申取沙汰を以て想像候へハ、
天朝よも必は右の大義を以て被仰出、殊に大學殿儒者の家候へハ、大に耻をのしやうされ候義よも可有御坐被存候、然る所思念爰に及ひ、竊に又憂懼奉危候義ハ、此以下、此度禁を破て及呈書候主意の有る所ニ御坐候、其思食にて御熱覽可被下候、此大義を以て御不審被仰出候時ハ、堀田侯に於て決して御申開き御出來の事被成候義と奉存候、其御申開き逆も御出來兼被成候時ハ、侯に御身を以て其罪を被贖候外有御坐ましく被存候、然る所自然右様の義に至り候時ハ、
天朝御威稜の嚴霜烈日の如くあるハ去る御事候へとも、當今江府よも御人乏しき上、外夷猖獗の時節、堀田侯の如き慥にふる御人物を被失候てハ、差向き御國の御弱と相成り、其御損失亦甚しく候義と奉存候、堀田侯にハ、兼て文武に御志深く、御政事も宜く、御領國人民御撫育もよく御行届き、防海の事よも厚く御心を用ひられ候事、一朝の義に無之、年久しく御苦勞御坐候事、慥に承知候筋も候て、能存知罷在候、然る所揆らば此度

幕吏ニ達見者ナシ

堀田閣老ノ罪ヲ宥シ立功贖罪セシムベシ

人ヲ外國ニ派シ西洋ノ學術ヲ輸入スベシ

外國ノ掣肘ヲ受ケザルヲ官吏ヲ駐劄セシムベシ

安政五年正月二十六日

六五六

の義出來り候事、甚惜ミ奉存候義ニ御坐候、隨分、當今有數の御方ニ御相違もふく候へとも、何を申も其下ニ屬セラレ候御役人ニ傑出の人無之、たま／＼吏才ハ有之候ても將才無之、和漢の事ハ稍知られ候ても西洋の學ニ疎く、邦内の利病をハ心得られ候ても、五大洲の大利害をハ通知セラレ候と申様ニて、當今全世界を總括シ候大經濟ニ通達の仁無御坐候故ニ、建議討論も多く皆故常に拘泥シ候事ノニて、侯の御志を贊成するニ足らざるの所致と被相察候、是等の義、某輩申出候ハ憚多き義ニ御坐候へとも、竊ニ念願仕候ハ、此度天朝ニて被 仰出候御大義ハ御大義ニて、其上の所ハ時節柄格別之御仁典を以て、侯の御不調法の廉被爲宥、此以後の功を以て被贖候様被

仰出、是迄の如き苟且の御故轍をニ幡然と御改めニ相成、總て魯西亞のペートルの規模の如く、廣く人を選て外國へ出シ、其長する所の諸術を學ハセ、旁ら其形勢時情を探索シ、又多く外國の名士を招引シ、襟胸を披て御優待有之、本邦ふき所の藝術の師トシて盛ニ諸學科を興シ、城制を改め兵制を變シ、游民を禁シ、刑罰を省キ、器械學を盛ニシ、工作場を開キ、大艦を多くシ、航海商法を講シ、此方ニ官府の制度を受けざるミニストルを置き候ふらは、此方よりも彼地ニ彼れの制度を受けざる官吏を置キ、行／＼外地の貢賦御府庫ニ

國力ヲ充實セシムベシ

天朝ヲ奉戴シテ舊弊ヲ破ルベシ

禍ヲ轉シ福ト爲スベシ

縉紳家ニ入説ヲ希望ス

收り、御國力の實ニ英・佛・彌利堅にも被爲過候様、年月を期シて被爲行届候様の御處置ニ相成候様仕度ものと奉存候、是等の大經濟、責てハ堀田侯よても無御坐候てハ其任ニ勝えられま／＼、乍去又堀田侯よても御再勤已來やそり故常ニ牽ラレ、衆議ニ因ラレ、當今第一の急務たる用間の事を始めて、今ニ格別の御雄略と被存候義一事も無御坐候へハ、此處ニてハ

天朝の御威勢を戴ラレ候ニ無御坐候てハ、逆も十分 御行届無覺束被存候、雖然堀田侯も慥ニ去る御方ニ候へハ、

天朝の御威勢をたゞ御奉戴御坐候ハ、故常苟且の舊弊を破て、當今遠大之御國是も相定メ候様隨分御行届可被成、左候ハ、所謂敗を轉シて功と成シ、禍を化シて福と爲すの御機關、乍恐

天朝此度の御一舉ニ御座候様奉存候、然らされハ時節柄差向容易ふらさる天下の御損失可有御坐奉存候、彼是の義此節先生より御建策ニハ相成ま／＼きり、追々傳聞候へハ御在京以來、縉紳家より御招待被申候も一方なら候よ／＼候へハ、九条殿下を奉始、中山卿等へも必ク御手寄も可有御坐候、このまてより時事ハ、毎々御苦勞も被成候御事ニ付、御老境へ御入候ても、其段ハ往時ニ御替りハ有御坐ま／＼、此度の義も追々御傳聞、さこそ

安政五年正月二十六日

六五七

を御感憤に被堪聞敷と推察仕候、就てハ某存寄候次第も極密申上候ハ、何と云當今之御補ひに可相成様、御密策も可有御坐奉存候に付、態々此者を走らせ、此呈書に及ひ候義に御坐候、是聊々國に報するの微忠と奉存候、宜く御照亮可被下候、もはや堀田閣老も御京着も可相成候へハ、何と云可相成ハ、火速に回天之御一策奉切望候、時期後れ候てハ詮ふきと成り行き候間、吳々も可然奉冀候、將、申上候迄も無之候へとも、此度の呈書、固より禁を破ての義に付、其人にあらは候てハ、決して御漏泄被下ましく、書生にハ別て御用心可被下候、癸丑の上書、并に甲寅獄中の擬上書草稿、御心扣に可相成義も可有御坐と存候間、手書のまゝ密に掛御目候、是ハ此外に稿本無御坐候へとも、御一涉後直に賤价へ御附還被下度奉希候、舊臘并今春の拙詩録往奉乞正候、詩中相見え候洪範解を國語を以て認め候、初申上候閣老へ上書の義、相叶候へとも差出候へんと心組候もの御坐候、此度密に其稿奉示も仕度候へとも、昏數も多く寫手も差支、第一差向き候義、急き候故不能其義に候、追て可奉供電囑候、國風ハ昨年之作に御坐候、御流義違に候へとも備御一咲候、是を緒紳家の盛評をも得度ものと奉存候、書不盡意、惟々天下の御爲、一と御苦勞被下候様奉企望候外他事無御坐候、頓首、

正月廿六日

回天ノ一策
アラマホシ

犯禁ノ呈書
漏洩ヲ恐ル

上書稿本ト
詩歌ヲ一覽
ニ供ス

省譽錄抄ヲ
添付ス

省譽錄抄

是も祕物に候へとも、子弟抄出致し置き候有之候まゝ、何その御心扣こと、是又掛御目候、是ハ猥に御他見たよ不被下候ハ、其儘御留置られ候ても、外に稿本有之候間、不相妨候也、

○二月二十四日、梁川新十郎（星巖）、書ヲ佐久間修理（象山）ニ復シテ京都ノ情勢ヲ報ス。同日ノ條參看スベシ。

〔佐久間修理書翰〕

○象山全集所載

○正月十六日松代藩士山寺源大夫宛

今日は大に緩かに御座候、倍御健安と奉想像候、然ば、一昨日は不相替別條蒙御惠示奉感謝候、一覽仕候處、貿易之儀もミニストル被差置候義も、悉く御一使申立通御聞届に相成、但開港場所の事のみ少しく御拒御座候様に候へども、是又是迄の御手振を以てトし候へば、十に九迄は遂に彼れの申に御隨順可有御座と存、痛哭流涕の極に奉存候、此御運びに相成候所にては、もはや如何様の智者出で來り候とも、取返しに難相成勢、誠に不及是非次第奉存候、但、此所にて猶少しく望を屬し罷在候は、天朝の御様子に御座候、今上も兼て御英明の御聞えもいらせられ、攝家の御内にも、御有力の御方も被成御座候歎に仄か

米使ノ要求
ニ隨フハ痛
歎ノ至
望テ天朝ニ
屬ス

公卿ニモ人
物アリ

外交處置ニ
ツイテハ諸
侯ニモ不平
多シ

京都ノ情勢
ヲ知リタシ

星巖ニ致書
セントス

安政五年正月二十六日

六六〇

に承り、其上中山殿と申方、格別豪傑にて、既に千草三位(種)なども毎々御賞美御座候よし、右之御様子に候へば、けく縉紳間には、よく事務に達せられ候御方も可有御座候、左候へば、舊冬江戸ノ御使も相立候所、すら／＼と江府にて被思召候様には、京師の御様子參るまじき様にも被存候、其上に猶薄々風聞候趣にては、此度の御處置、大分國主方にて御不平の事御座候歟にて、參勤御訴訟など御座候御方も御座候とか申事、いづれにも危険の御時節と奉恐懼候義に御座候、右に付候ては、當今差向き 天朝の御様子、并に此度御一使申立て一條、公邊御應接向等の事、京師にて如何致評判候や、又縉紳家に於、何等の議論有之候や、勅答等は如何に候ひしや、又一面如此にて、内邊別に 睿慮も被爲入候御儀や、是等は容易に窺ひ知るべき事には無之候へども、何分も竊に相探り、心得居度ものと奉存候、御國家の上にも、甚御急務の様相考候、高意には如何被思召候や、此義、一二門下の内にも深く致心配候、事に託し西遊候上、星巖は元來、時事にも心を用ひ候老人の事に就き、是などへ便り承り繕ひ候はゞ、同人頗る縉紳家へも立入候事故、知り得べき程の事は相分り可申と奉存候、此義如何可有御座候や、委細は此人の口頭にも可有御座候、右に付候ては相願度事件も御座候との事、孰にも當今の要務とも奉存候、宜く御勘考奉冀候、已上、

十六日認

大星再拜

(山寺源大夫、松代藩士)
懼堂 老 盟 臺 臺 下

附啓、本文不容易事共に付、禁例を破り如此に御座候、御電覽後、速に丙丁に御附し可被下候、至禱、

〔佐久間修理書翰〕

○象山全集所載

○正月二十一日山寺源大夫宛

拜見仕候、如仰又々春寒凌にく、覺候、倍御健安被爲入奉敬慶候、然ば一昨日拜問申上候義、多分相違に有御座まじく候とて、御別紙蒙御惠示、乍例難有奉謝候、九條殿下御様子格別の御人物に被爲入候て、三九など既に已に申上も致し候筈の様奉存候、果して當今五大洲の形勢をも明に御觀察被成御座、江府是迄の御所置一々其是非を御辨明御座候ての御事に候へば、此度堀田侯御始め川岩(山路、皆瀬)二君にも餘程御心配の御事と奉察候、乍去、京師邊此節人に乏しき所にては、いか程明敏の御方御座候ても、又御行届き被成かね候所多く可有之被存候、右等の上に付候ても、誰ぞ睨と致し候者、上京探索の義被仰付候て可然奉存候、(實録太郎)菅鉞(實録太郎)など如何可有之哉、存出候まゝ極密申上候、伊藤面疔の事御別紙のみ一目案立不申、いづれ西洋家の聞え候ものへ託し候方可然候、戸塚静海・林洞海など可宜候、此義被仰遣候はゞ可然候、先草々拜答申上候、別紙任命直に返璧仕候、毎度御多忙の御中、異聞早速に

京情探索ノ
タメ人ヲ派
スベシ

安政五年正月二十六日

六六一

安政五年正月二十七日

六六二

御垂示被成下、御禮可申盡様無御座候、以上、

廿一日

恪 拜復

懼 堂 先生 三席

二十七日^辰 幕府、大目付土岐頼旨^{守丹波}・同井戸覺弘^{守對馬}、目付鵜殿長鏡^{民部少輔}・同一色邦之輔^{直温〇後山城守}ニ琉球人參府用掛ヲ命ズ。尋^{二月二十七日}テ大目付堀利堅^{守伊豆}ヲ以テ覺弘二代へ、更^{三月七日}ニ利堅ヲ罷メ、大目付遠山則訓^{正隼人}ヲ以テ之ニ代フ。

〔安政年録〕^{〇内閣記録課所藏本}

正月廿七日、

大目付

土岐頼旨

土岐丹波守

井戸覺弘

井戸對馬守

名代 田村伊豫守

右當秋、琉球人參府^{久世廣周、老中}之付、御用取扱可相勤旨、於新部屋前溜、大和守申渡之、

御目付

鵜殿長鏡

鵜殿民部少輔

一色邦之輔

一色邦之輔

名代 野々山鉦藏

右同斷之旨、於同席、遠藤但馬守申渡之、^(凱統、若年寄)

〇温恭院殿御實紀・高麗環雜記、正月二十七日ノ條ニモ、同一内容ノ記事アリ。

〔老中申渡〕^{〇内閣記録課所藏本幕府沙汰書所載}

〇二月廿七日大目付井戸覺弘堀利堅へ

御留守居次席
大目付

井戸對馬守

名代 池田播磨守

當秋、琉球人參府御用掛り被 仰付候處、病氣之付、右御用掛り御免被成候、

大目付

堀 伊豆守

當秋、琉球人參府御用掛、被 仰付之、

右於新部屋前溜、大和守申渡之、

安政五年正月二十七日

六六三

堀利堅

安政五年正月二十八日

六六四

〔安政年錄〕○内閣記録
課所藏本

三月七日、

遠山則訓

當秋、琉球人參府御用
取扱、堀伊豆守代り、

大目付

遠山隼人正

右於新部屋前溜、大和守申渡之、

○温恭院殿御實紀・高麗環雜記、三月七日ノ條ニモ、同一内容ノ記事アリ。

二十八日^巳 幕府、鳥取藩主池田慶德^{相模守}ニ暇ヲ賜フ。^{二十、六日、}是日、慶德、登

城、將軍ニ謁ス。尋^{七日}デ江戸ヲ發シ、歸國ノ途ニ就ク。<sup>二月二十八日、
鳥取ニ至ル。</sup>

〔安政年錄〕○内閣記録
課所藏本

正月二十六日、

上使久世大和守

松平相模守

銀五拾枚
卷物貳十

右就御暇、被遣之、

正月二十八日、

一今已上刻、御表^ニ 出御、月次之御禮相濟、

御白書院

御暇

松平相模守

池田慶德御
暇登城

御鷹被下
御馬被下
右、畢布、入御、

○温恭院殿御實紀、正月二十六日及二十八日ノ條ニモ、マタ同一内容ノ記事アリ。

〔脇坂安宅日記〕○子爵小笠原
長生所藏本

正月廿六日、○中
略、

一大和殿、今日松平相模守^ニ國許^ニ之御暇^ニ付

上使被勤候付、一同々先に使遣、退出被致候、○中
略、

正月廿八日、

御書院

御暇 上使老中

松平相模守

披露

被 召寄、

着座、御禮申上時、〔朱書〕
上使ヲ以、御暇拜領物仕、難有、

安政五年正月二十八日

六六五

老中久世廣
周鳥取藩邸
ニ赴ク

上意、(本書)「蒙」上意、難有、

御鷹被下、(本書)「御鷹御馬拜領物仕、難有、」
御馬

鳥取藩公事心覺○侯爵池田
仲博所藏本

正月廿五日、

明廿六日、上使之御沙汰有之候ニ付、熨斗目麻上下用意御座敷へ罷出候事、并惣詰之事、

廿六日、

四時出勤、八前 上使御入有之、無間御歸り、(池田慶徳、鳥取藩主)公直様御廻勤、御留守ニテ御歡謁マテ有之、

今日之上使、御歸國御暇被下候之、○中略、

廿八日、

御暇御禮、御登 城有之、昨日右御下城後、御歡被爲請候段申來ニ付、出勤致候處、右ハ御用部屋出仕之間違ヒニテ、今日御歡ハ諸奉行以上計之由、到來より斷致スニ付、直ニ退出、

鳥取藩江戸日記○侯爵池田
仲博所藏本

正月廿七日、

明日、御暇之御禮被 仰上候様、御老中御連名之御奉書、左之通御到來被成、

御請書御勤役取扱之事、

池田慶徳ニ
暇ヲ賜フ

明廿八日五時、登 城、御暇之御禮可被申上候、以上、

脇坂 中務大輔

内藤 紀伊守

久世 大和守

松平 伊賀守

正月廿七日

御名 殿

御別紙

家來壹人

御目見被 仰付候間、召連可被出候、

(欄外朱卷)

本文、右御奉書被成御到來候ニ付、御出先ハ早乗ヲ以、可申上筈之處、兼テ被遊 御承知候儀ニ付、其儀無之、御歸 殿之上、被遊 御拜見候事、

正月廿八日、

今朝六半時之御供揃ニ布、被遊御登 城、御國ニ御暇之御禮、首尾能被 仰上、御懇之被爲 蒙 上意、其上於 御前、御鷹御馬御拜領、萬々御先規之通被爲濟、池田式部儀も、例之通 御目見申上、御卷物拜領被 仰付、萬々無御滯相濟、御下 城懸ケ御老中方被遊御廻勤、九

慶徳登城將
軍ニ調ス鷹
及馬ヲ賜フ

時被遊 御歸 殿、又七時過松平右近將監様に被遊御出、緩々御滯座、夜四時御歸 殿被遊候事、

鳥取藩江戸留守居日記○侯爵池田仲博所藏本

正月廿六日、○中略、

一上使御出前、左之通、御使者を以御到來被成候、

一卷物二十
銀五拾枚

久世大和守様御使者

右者今日以

上使御拜領之御品、以使者致進達候旨被仰越候、御奏者承之、御勤役取扱之事、

一御前鳳凰之御杉戸内に御出被遊、鶴之御杉戸内に御使者呼出、

御目見久世大和守殿御使者 殿に御奏者披露之、右 御直答被遊、相濟罷歸候、

御直答、

拜領物、御使者を以爲御持被下頂戴仕候、此段宜、

一右御使者に、紗綾貳卷被下之、御勤役取扱此方構無之、

一今朝、御城使代り下役赤崎庄次郎、御本丸罷出、御出入御坊主に申談置、上使御名前、并御箱下り注進、夫より庄次郎儀へ、御玄關前へ相廻り、久世大和守様御下り御跡こ

引續、内櫻田御門前こ御下 城注進申越ス、夫々御先に相立、御出被成候段、御門外に罷出居ル此方に申達ス、九半時頃御出被成候、御前、御門御地覆外へ御出迎被遊、直こ御先立、御小書院に御着座、上意之趣、御拜領物御頂戴被成、一旦御退被成、御菓子兩種御茶出ル、御熨斗御近習役之直こ引取ル、御前御請被 仰上、直こ御歸被成、御先立被遊、御門御地覆外迄御送被遊候、

老中久世廣周鳥取藩邸ニ至ル

上意

但し、上使御先立被遊、御小書院立當時御居間書院上之御間こ、上意之趣御直達被成、夫々御拜領物御頂戴被遊候事、

附り、御拜領物へ、御床に御筋付こ相成候事、

久世大和守様御持被成候 上意之趣、

松平相模守

在所に之御暇被下、拜領物被 仰付、近々 御目見被 仰付候、

御請、

在所に之御暇被成下、拜領物被 仰付、近々

御目見可被 仰付旨、難有仕合奉存候、御請之儀宜、

正月廿七日、

一今朝五半時之御供揃こ、殿様爲御暇乞、田安様・尾州様・紀州様之御出、御通り被仰置、夫々松平民部大輔様に御出被遊、寛々御滯座、御歸 殿被遊候、但、田安様に御先甚太夫罷出候、

附り、田安様・尾州様・紀州様に、昨日懸合之上、御出被遊候事、

田安様御出席

御用人

西尾七三郎殿

御物頭

伊東萬世橋殿

御目付

河野主馬殿

一今八時過、左之御奉書御到來こ付、御勤役々寫相廻候、尤御請之儀と、御勤役取扱こ、
明廿八日、五時登 城御暇之御禮可被申上候、以上、

正月廿七日

脇坂中務大輔

内藤紀伊守

松平相模守殿

久世大和守

松平伊賀守

正月廿八日、

一昨日之依御奉書、今朝六半時之御供揃こ、御暇之爲御禮、殿様御登 城被遊、御召御

斗目御小袖
半御上下 御供甚太夫、着用斗目
麻上下 中之御門より御先に欠拔、御玄關薄縁こ御待受申上、

御附上り直こ大廊下御休息所に御通り被遊、夫々御目付鈴木四郎左衛門殿・駒井左京殿

御寄御案内こ、竹之大廊下に御寄と有之、夫々御黒書院御縁頼こ 御着座、松平相模

守ト御奏者番安藤對馬守殿御披露、夫ト 上意有之、御下段御敷居内に 御着座、以

上使御暇御拜領物之御禮、御用番内藤紀伊守様御取合有之、

益御機嫌能恐悅奉存候と被 仰上、

右之通、被 仰上候と、緩々休息可致旨、上意此時 御直請被 仰上、于時、馬鷹ヲト

上意有之、難有仕合奉存候旨、御直答被遊、御退去、

御居殘御禮被 仰上候付、御部屋に被爲 入、御家老池田式部 御目見相濟、夫々御目

付様御案内有之、黒鷲之御杉戸際こ、御老中様御列座、御暇之御禮、御拜領物并御家老

安政五年正月二十八日

六七二

御目見申上候御禮被 仰上、引續御列座御用番内藤紀伊守様、左之通、被 仰渡、御退散、

黑鷲御杉戸際ニ被、左之通、被 仰渡、

宗門之儀入念候様、并來年參府之節、供廻り多分無之候様、

御黒書院御出席

御老中様方

御披露御奏者番

安 藤 對 馬 守 殿

御肝煎同

増 山 河 内 守 殿

御當番同

水 野 和 泉 守 殿

大御目付

土 岐 丹 波 守 殿

池 田 播 磨 守 様

堀 伊 豆 守 殿

遠 山 隼 人 正 殿

田 村 伊 豫 守 殿

御寄七御目付

鈴 木 四 郎 左 衛 門 殿

駒 井 左 京 殿

式部御披露御奏者番

堀 出 雲 守 殿

黑鷲御杉戸際御出席

御老中様方

御奏者番

水 野 和 泉 守 殿

大御目付

土 岐 丹 波 守 殿

池 田 播 磨 守 様

安政五年正月二十八日

六七三

堀 伊豆守殿
遠山隼人正殿
田村伊豫守殿

御目付

鈴木四郎左衛門殿
駒井左京殿

一御居殘御禮被 仰上候付、御坊主組頭小出善陸迄、其段三七郎申聞、御同朋頭ヲ以、大御目付様に申達候處、御承知之旨、同人申聞候、

一今朝 御目見以前、御奏者番衆を以、御習禮被遊、并御家老爲同斷之事、

一御坊主御拜領之御馬、毛付左之書付、甚太夫に相渡ス、御歸 殿之上、入 御覽候事、

覺

一櫻井青 七歳 四寸五分

津輕立

以上

一内藤紀伊守様々被仰達候儀御座候間、唯今之内、私共内壹人可罷出旨、御用人方切紙到來之付、受書差出ス、即刻三七郎罷出候處、左之御書付壹通、御用人 (ト) ヲ以御渡被成候、

袖ニ松平相模守家來ニ

松平相模守

御暇之付被下候御鷹可相渡候間、今晚八時本庄安藝守宅に、家來可差越候事、

正月廿八日

鷹拜領

一〇中略

一右御達之付、左之通、當分加役岡部糸藏着用服麻上下紗同道、御鷹御掛り若御年寄本庄安藝守様に罷出候事、〇中本庄安藝守様御宅に罷越、糸藏同道之、御寄合藤野喜兵衛一所之御玄關之上、御使者之間に罷通り、御取次を以手札差出、并掛り姓名書左之通差出ス、夫々御用人呼出、御鷹御渡之付、掛り之者召連罷出候旨申述之、〇中御渡席に相廻候様申聞候間、直之御鷹匠召連罷出、御渡一受取之、〇中萬端相濟、元席に扣ル、追而依案内、御渡席次御廊下迄罷越、相扣居、無程安藝守様御出席、〇中御用人披露有之、被下

之御鷹相渡スト御直達有之、退座、○中略

戸田久助預御鷹

上野道太郎

内山七兵衛預御鷹

出口左源太

一瀬川時鴨捉

一右畢布引取、表御門潜り何きも不殘罷出、○中略、行列相立引取、○中略

一右行列ニ布罷歸り、其節右御鷹向方御出門之注進有之、間も無く御屋敷懸之注進ニ布、御式臺鏡板に御家老中被罷出、下座薄縁に御用人始メ一統御役人罷出ル、時ニ御鷹、表御門大扉方附添之面々共入ル、○中略、御目付方御前に申上、御殿斗目、半御上下、被爲召、御次口方御小書院上之御間、御中座被遊、御家老始メ銘々御勤役、御目付・御留守居・御側役御供致し、御内縁に相扣ル、夫より同所御内縁之方々、御鷹匠鷹捉之御鷹据罷歸候、着用之儘罷出ル、御敷居際ニ相扣ル、此時御前、右御敷居際迄御進ミ被遊、其時御鷹匠大緒乍据解、右大緒差上ル、御頂戴相濟、如亦元、御中座に御歸座、御鷹匠以前之通、御内縁通り御杉戸外に退キ、鴨捉之御鷹引替、以前之通り据罷出ルト、先之通御頂戴被爲濟、御鷹匠退ク、御前御次口通り、御居間に被爲入、御家老始御供入候事、○中略

一内藤紀伊守様御用人、左之切紙到來、受書差出ス、○中略

以手紙致啓上候、今日御拜領之御馬、今晚八時、爲牽可申候、此段各様迄可申進旨、紀伊守申候、以上、

正月廿八日

○中略

一過刻御達之通、八時頃、御拜領之御馬、内藤紀伊守様方以御使者爲御牽被遣、右御馬、表御門大扉開キ入、御使者例之通り、御使者之間に通し、御馬を御馬役請取之、切す迄致し、御玄關切石真中に牽出し、右御使者を御奏者同道、薄縁に罷出候節、御前薄縁に御出被遊、御手綱ヲ御取、御頂戴畢布内藤紀伊守様御使者ト、御奏者披露之、

〔鳥取藩江戸御用札控〕○侯爵池田仲博所藏本

正月廿八日之日附ニ布、即日相認、翌朝方御國に之、不時八日割御飛脚差出、御用向左之通申遣ス、

本狀左之通、

洞白井

黄階用裏付

一筆啓上仕候、殿様、倍御機嫌能被遊御座、一昨廿六日、爲上使、久世大和守様御出、

安政五年正月二十八日

六七七

安政五年正月二十八日

六七八

御歸國之御暇被爲蒙 仰、如例品々御拜領被成、今日御登 城、右御禮被 仰上、萬々首尾能被爲濟、恐悅至極奉存候、且又、上々様、愈御安全之御事、乍憚目出度御儀奉存候、御飛脚被成御差出候付、此段爲可得貴意如斯御座候、恐惶謹言、

御家老中

黄階用半切

一同役之之本状右之准ス、
一追而申入候、此度之御飛脚、今日之日附之而、即日相認、明朝方差出申候此段、
一追而申入候、一昨廿六日、以上使久世大和守様、御國之御暇被爲蒙 仰、品々被成御拜領物、無御滯被爲濟、右之付即剋爲御禮、御老中方被成御廻勤候、則御拜領之御品、左之通、

一 銀五拾枚
紗綾貳拾卷

一今廿八日、御登 城御暇之御禮被 仰上候様、御老中御連名之御奉書、被成御到來、并御家老壹人、御目見被 仰付旨、御別紙之申來、則御登 城、右御禮首尾能被 仰上、被

爲蒙御懇之 上意、於 御前御鷹御馬被成御拜領、萬々御先規之通被爲濟、并池田式部儀、御目見被 仰付、御卷物致拜領、無御滯相濟、御退出方御老中方被遊御廻勤候、一右之付、其御地三家御職之衆中、被成 御書候之付、右 御書、今日式部殿に相渡申候此段、

一追而申入候、御國之御暇被爲蒙 仰候之付、來月七日當表被遊 御發駕旨被 仰出候間、左様御心得、例之通宜被成御取計候、右之付、御休泊付、別紙壹通相廻し申候此段、猶以、本文之趣、例被成御申達候面々に、夫々可被成御申達候、以上、

京都、山田赤座に、

一一筆申入候、殿様、倍御機嫌能被成御座候、然者 來月七日、當表被成 御發駕、同廿一日伏見に 御上着、翌廿二日同所被成 御出駕筈之候間、左様御心得可有之候、恐惶謹言、

猶以、御勤役并尻庄介儀、其御地之御使者被 仰付、一日御先出立致し候筈之有之候、且又、榎並禮次、伏見御屋敷に罷出候儀之格別、其外者近年之通、御斷御申達可有之候、以上、

右同、

安政五年正月二十八日

六七九

安政五年正月二十八日

六八〇

一 追申入候、殿様、來月七日當表 御發駕、同十九日坂之下御泊、翌廿日水口御晝休、同夕草津驛御泊之處、右廿日傳 奏京地御發途之趣ニ相聞候ニ付、同夕水口・石部邊御泊りも可有之、左候得者、水口驛々草津驛迄之間ニ御行違之御都合ニ相成候處、御同勢込合致混雜、若し子細等致出來候者不相成、天保六未年 御參府之節、石部・水口之間、岩根村与申所に御替し相成候儀者有之候得共、向御方彌何驛御泊与申事も相聞不申、間近く相成候者、御替し道も差支、彼是心配罷在候、然ル處河瀬範左衛門儀、堂上方御家來之内に懇意之者多く有之ニ付、此等之取扱筋辨理も宜哉ニ相聞候間、旁此度之一條、同人に取扱被仰付候、右取扱振之儀、御途中御行違之所者不安心ニ付、可成者、向御方御晝休御小休中ニ、無子細 此御方御通りニ相成候哉、又者 此御方、御晝休御小休中ニ、向御方御通ニ相成候様ニ致し度、其外同人考付之事も有之候ハ、兎角同人に御任せニ相成候間、程克取扱候様、萬一右取扱整兼候哉、又ニ無子細趣ニ雜掌等受込候者も、矢張御途中無覺束様相考候事も候ハ、御替し之外者有之間敷ニ付、大躰御出會場所考合、水口邊々草津迄之間ニ御都合能御替し場所与跡承繕ひ、範右衛門儀、坂ノ下御泊迄出浮、右取扱振等之趣、具ニ申聞候様致し度間、此旨御申渡可有之候、若整兼候處、又能御替し場所迄立兼候事も候ハ、迎も同人出浮候者迄無詮事ニ付、及罷出

不申間、右之様子相分り次第、早々急飛を以、御途中に被申越可有之、左候得者、御途中ニ一日御取縮メ、程能御替し相成候處、又者、宮驛々美濃路通ニ御通行、傳 奏草津驛御通行相濟候上、廿日夕同驛に御泊ニ後可相成間、右様子相分り次第、成丈早々御申越可有之候、已上、

猶以、傳 奏廿日之御發途、多分相延候様も相聞、左候得者、御取扱等も及不申候得共、矢張廿日廿一日御發途ニ、取扱も整兼、範左衛門儀も、御途中に出浮不申方ニ相成候ハ、傳 奏其御地何時御出立、同日何驛御晝休何驛御泊之趣、具ニ御聞繕、早々御途中に御申越し可有之候、且又範左衛門儀、右取扱ニ付、内々賄金入用も候ハ、宜御取計置、追申聞有之候様ニ与存候、已上、

伏見、河田

一 迫申入候、殿様、倍御機嫌能被成御座候、然者來月七日、當表被成 御發駕、同廿一日其御地に 御到着、翌廿二日被成 御出駕筈ニ候間、左様可有御心得候、恐惶謹言、猶以、星野宗以父子其御屋敷に罷出候儀ニ格別、其外者近年之通、御斷可有御申達候、已上、

○二月七日、池田慶徳江戸ヲ發シ、歸藩ノ途ニ就キ、同二十八日、鳥取ニ至ル。次ニ其

安政五年正月二十八日

六八一

池田慶徳江
戸ヲ發ス

〔省山公道中日記〕

○池田慶徳日記
侯爵池田仲博所藏本

二月七日、九ツ時壹分_ニ出立、御門前_ニ伊勢守・淡路守_ニ逢、長屋下に家老初諸士以下徒目付迄出候、順々旅行八ツ時大崎屋敷、寶隆院様御住居に參り、暫之時御咄し申上、御酒・御吸もの等有之、八ツ時八分出立、同刻品川本陣に着、晝食致し、同所七ツ時一分發す、大森和中散七ツ、九時より入 御駕、近ク御目付御行列操越之儀申上候、六時發足、六郷川平水、川幅五十間、船七艘、六ツ時七分無滯渡川、六ツ時八分川崎驛着、廣式より文到來_ニ付、返書さし出、井小石川御二處様に書狀差上候事、

川崎驛ニ至
ル

〔鳥取藩江戸日記〕

○侯爵池田
仲博所藏本

二月七日、晴天、
一今朝六時之御供揃_ニ而、九時被遊
御發駕、御膳被 召上、於 御居間、左之面々に 御目見被 仰付、畢_ニ御人拂_ニ而御用向被 仰付、尤十次郎・武兵衛_ニ者、御留守中心付候様 御意有之、
池田 式部 洞 昇 藤井熊太夫

伊丹甚太夫

加藤十次郎

野間武兵衛

山本三七郎

一右畢_ニ、御供之御用人白井重之進_ニ、
御目見被 仰付、御手熨被遣之、
一右畢_ニ、御三方_{御熨斗}被遊 御取、直_ニ被遊 御發駕、御先立永見重右衛門・西原小三郎相勤之、
一御發駕之節、頭役以上并御馬方迄、爲御見立御門外に罷出、御馬廻り當番之面々者、御式臺に並居、御書役・御祐筆・御仲小姓之面々者、御料理之間に並居、

一御發駕之節、御徒目付、左之面々爲御固御門内外へ罷出、無御別條段申達ス、
御門内 谷 村 源 録 御門外 藤岡源之丞 御門内 有澤直右衛門

一御發駕後、御長屋廻り無御別條、何事も出立致し候段、御跡浚は毛尾利之助罷出、申達ス、
一伊勢守様・淡路守様、前記之御供揃_ニ而、當御屋敷へ被成御出、右御二方様共、於御居間、被遊 御對顔、其節左之面々、例之所に相詰ル、

洞

昇

野間武兵衛

安政五年正月二十八日

六八四

- 一 御發駕之節、右御二方様共、爲御見立御門外へ被成御出、伊勢守様九半時被成御歸、淡路守様之者御廣式に被成御出、暮六時被成御歸候、
- 一 御發駕後、御居間廻り、御小納戸立會、御付、其段式部に申達ス、
- 一 御留守中、猶又火之元彌入念候様、夫々御屋敷御徒目付呼出し申渡し、尤大崎御屋敷御徒目付に申渡し候様、同所同役に申遣ス、
- 一 御留守中、夜御仕廻五時付、夫々御申聞、其段式部に申達ス、
- 一 只今迄差出し候、小使拾八人御用無之差返し候段、并 御留守中、左之通差出候様、御勘定頭に申遣ス、
- 一 小使拾八人
- 一 御簞笥下付、左之通差出し候様、御勘定頭に申遣ス、
- 一 御用之人三人
- 一 御跡賑之御赤飯、何れも頂戴致し、并御供目付へも頂戴致し候様申聞ル、
- 一 右 御發駕被遊候付、兩人共御廣式に罷出、御附を以御歡申上ル、
- 一 今日御機嫌能被遊
- 御發駕候段、御國に之八日割御飛脚相認、白木三通入御狀箱相認メ、今日之日付に、

早道喜三右衛門に相渡ス、

一 今朝木具二汁六菜之御膳、被

召上、被遊 御召替、於

御居間書院、田安様御使者に被遊

御直答、夫々於

御居間、伊勢守様淡路守様に被遊

御對顔相濟、御熨斗差上之、萬之御規式御例之通相濟、畢布式部殿、於

御同所、御目見被 仰付、

御發駕御歡被申上、引續昇罷出、

御留守中御用向被 仰付、諸事入念候様

御意有之、於 御同所左之面々にも同様

御意有之、夫々又御熨斗差上之、

御供之御用人、御目見被 仰付、

御手自御熨斗被遣、相濟靈芝・鬼打豆差上、直に被遊

御發駕候事、

安政五年正月二十八日

六八五

但し、御發駕懸ケ、大崎御屋敷、寶隆院様御住居に被遊

御立寄候事、

御勤役

御留守居 御目付

〔鳥取藩公事心覺〕

○侯爵池田仲博所藏本

二月七日、早ぶれにて、踏込振裂羽織羽二重にて、乗駕籠壹挺・若黨壹人・鎧持壹人・具足箱持壹人御屋敷を罷出、品川御本陣鶴岡（市郎右衛門）申内へ參り、具足箱へ宿懸りへ下けさせ置、駕籠へ御本陣板之間へ上ヶ置らせ、私へ御次へ上り御膳を戴き候事、

殿様、四半過御上屋敷御立、八半頃大崎へ御立寄、七時御本陣へ御入被遊候、則御拜謁罷出、御膳中御暇願ひ、御先へ河崎宿へ參る、暮六過 御本陣へ御着、則御本陣へ出、御拜謁致し退き候事、此へ今日 御立を付、晚之御伺を出候へ、其外へ大井川・伏見・御國御着之日右同様へ、今日詩作被仰付、川崎御本陣にて差上候事○大井川御越之日、掛川御本陣へ御伺、例之通○伏見御上着之日、御屋敷へ御伺を罷出ル○智頭御泊之晚、御伺を罷出ル○二月廿八日御歸 城之日、用ヶ瀬御晝より御先へ出立、上ノ茶やにて支度致し、上ノ茶屋御宿入濟て、直に御先へ叶村迄參り、叶村より御立有之候を見受け、御駕籠之跡を引續

歩行にて入府、

公御馬 御山駕籠 御駕籠

御近習、非番之面々、御儒者、御相手之もの、

右之順にて、若黨始メ具足持迄揃、供之内へ入置く、御歸城之後御拜謁を出、次に御用部屋へ恐悦申、直に引退候事、

二月二十九日、

御歸城翌日付、紋付袴着用、御伺ひを出、御拜謁致し退候事、

（離外記事）

御家老・御用人等へ參るに不及、

〔鳥取藩控帳〕

○侯爵池田仲博所藏本

二月廿八日、御歸城、

- 一 御家老共始、着座之面々爲御迎、例之通り吉成に罷出、并
- 御目見相濟居申嫡子面々者、乾雅樂之助屋敷前を罷出ル、
- 一 御家中之面々、爲御迎例之所に罷出ル、
- 一月番邦之助、今朝登
- 城、御式臺鏡板を御迎申上候事、

但、舊臘廿二日之記を有之通、月番丈ヶ 御城に相詰、御式臺鏡板を御送迎申上候

安政五年正月二十八日

六八八

様、被 仰出候付、當年より相詰候事、尤下ノ渡注進ニ被、登 城、早通シニ被御鎗之間前ニ中座、夫々御式臺ニ罷出候事、

一倍、御機嫌能、八半時被遊御歸城、於 御居間、御熨斗出ル、

一御供ニ被罷歸候御家老御用人を以御伺申上候得共、御家老御供無之ニ付、其儀無之事、一於 御居間、御歸

城御歡被爲 請候付、御供之御用人より昵近之諸奉行迄、順々罷出、御歡申上、相濟、邦之助月番ニ付、右代り但馬壹人罷出、邦之助御役成初布之 御目見被 仰付、右但馬御取合申上相濟候上、御家老共罷出、御歸

城御歡申上、相濟、夫より御旗津田傳兵衛御役成初布之

御目見被 仰付、御用人御取合申上、夫より御舟手岩越次郎太夫・御勤役牧野七平御役成初布之

御目見被 仰付、此時月番罷出居、御取合申上相濟、夫々

御留守殘之御用人始、山部隼太迄、順々罷出、御歡申上候事、尤、御供ニ被罷歸候面々着用羽織・袴、其外

御留守殘り之御家老共始、着用麻上下ニ、畢布御用人を以、御家老共被爲召、御人拂ニ被遊

御逢、相濟、引續御用人并御目付御人拂ニ被罷出相濟候事、

但し、追布外様之面々、右御歡被爲請候節、御家老共始、右之面々右御歡者不申上事、

一左之面々儀御役成初布ニ付、

御目見之儀御用人を以相伺、其段夫々申渡之、

津田傳兵衛 岩越次郎太夫 牧野七平

一牧野七平儀、見習御番可被 仰付哉与、同役方申聞候付相伺候上、其段當人に申渡之、

一御歸 城御禮使者被 仰付置候得者、於御書院

御目見被 仰付等有之候得共、此度江戶表ニ被作り御使者ニ被相濟候付、何爲取扱等無之事、

一江戸に御歸 城御注進之御飛脚、御歸 城即剋不時八日割ニ被差出之、

一田村甚左衛門儀、智頭に爲御迎罷越、例之通り御先に罷歸候事、

一伊勢守様・淡路守様々、例之通御附使者被成、御目付詰所ニ並居、御用人披露之、御直答有之、

安政五年正月二十八日

六八九

一御城代佐藤重藏儀、御弓之間ニ罷在、御用人披露、御意有之、其外御城詰之面々、御筒之間・中之間・金之間ニ並居、御用人披露之、
 一御歸 城ニ付、
 榮岳院様御廟ニ之
 御代參御近習相勤之、

〔安達清風日記〕

二月念八日、晴和、此日午時、殿下安泰至自江戸、滿城歡笑、余曹不堪雀躍、一昨年殿下滯府蒙命之時、余不顧微力、周旋甚力、而遂事不成、今春亦又有滯府之說、訛言相驚、余不堪慷慨憂國之至、夙夜苦心、寢不安食、而有今日之慶、實二州之幸、堀庄二郎・和田瀨内陪駕至自江戸、夜飲于二氏、

三月朔、快晴、此日 公社參、辰半時歸 城、藩士參城、奉賀安泰歸 國、御歸城御○中歡ト稱ス、略、

二日、雨、此日、公詣輿禪・慶安二寺、拜 祖宗之廟、御佛詣○中、ト稱ス、略、

三日、風雨甚緊、今朝有歲首之儀、藩士執政以下登 城、奉賀歲首新正、年頭御禮ト稱ス、

〔贈正二位公御履歷〕

○池田慶徳履歷 侯爵池田仲博所藏本

二月廿五日、御國

藩主江戸ヨリ歸國ス

御使番ノ面々、御發駕御歸城ノ節、御見立御迎ニ、此以後御城内横切石ノ所へ罷出候様、被仰付之、

廿八日、御歸城被遊候事、

但、御歸城御禮使者御差向相成候へハ、御書院ニ於テ御目見等有之候へニ、此度ハ江戸表ヨリ作り御使者ニテ相濟候ニ付、其儀無之、

二十九日丙午 武家傳奏廣橋光成前權大納言・同東坊城聰長前權大納言 京都所司代役

邸妙滿寺 二赴キ、儒役林燿大學頭・目付津田半三郎正路○後近江守 二海外ノ事情ヲ問フ。

〔東坊城聰長日記〕

○宮内省圖書發所藏本

正月廿五日、巳半剋參 内、○中略、

一今度墨夷應接書、且林大學頭申口等、不審之條々、兩役申談、以一紙尋問候處、各返答書(下ニ載ス)從美濃守差越、其内人心居合方一件、面會ふらてハ難申旨、申越候ニ付、兩公へ被申入可面談被命、

二十八日、巳半剋出仕、先參太閤、○中略、

一明日、林大學頭・津田半三郎、面會之爲所司代ニ行向候、右兩人へ御尋之義無之哉、兩公

へ伺候處、別々思召付無之、兩人相心得可尋被命、

二十九日、已剋許參 内、午過早出、

傳奏兩人林
濤等ト對談
「ハリス」ハ
萬國ノ總代
鎖國ノ法一
變人心不和
開港反對者
モ萬全ノ計
策ナシ

一未剋許同役同伴、向本多美濃守假宅妙滿寺方丈、美濃守同席、林大學頭・半三郎面會、大學頭申云、去日申上候通、當今時勢二十年間万国通信有之候付、獨立之日本國通商相願候者、万国同一之事候、渡來墨夷人ハルリス、万国ノ惣代ト相見候、ハルリス申條之通之相成候へハ、先平穩之候哉付、万国一同の爲、鎖國之法令御改革有之、御定合被爲在之可然哉と申處、何分二百年來鎖國之習風、一時御改、人情折合方、老中共心配仕候事候、同役被尋云、折合之處何程之事候哉、大學答申、七分通ハ折合候、予、折合方只今當地之事も甚六ヶ敷、如何之事哉と心配之至候、半三郎申云、不折合ハ夷人ヲ禽獸ト視、無禮之夷人ヲ神國へ上陸致さ努、况商館を開候事不可然哉と申張候者ニ於、本朝ニ生候人よて、國ニ忠ある人トシテ可申候、乍去、左様之人々、左向らハ如何致し候ハ、万全と可申哉、其計策承度と申候へハ、其計策ハ無之候、とてもの事ニ、大戦ニ及國力を傾候ヌ、又此儘ニ通商候ヌ、於御國辱、少よても輕方ニ以多し度、只此御處置ハ、京都關東ノあらざられ候、自餘略之、只要文耳、

美濃守申云、此度之一件、實ニコ、マテニハナラヌ積候、案外ニ深入ニ成何共恐入候

事ニ候、

右之通之次第、兩公可申入參入之處、猶重テ御聞可被成被命、

二月一日、晴、

一參太閤令出逢給、昨日兩士申候趣申入、猶可申上被命、林大學頭・半三郎、別段無御用候

ハ、其趣美濃守へ可申達哉伺候所、其分可然被命、猶又、參 御前序ニ伺候處、可爲勝手被 仰下、

一〇中

一兩人并久我・徳大寺召 御前、言上昨日林大學・津田半三郎所申、且今朝所被申含之條

々、

〔九條家記録〕○東京帝國大學所藏本

正月廿五日、

一廣橋前大納言殿、

昨日被仰聞候御別番之趣、林大學頭・津田半三郎ニ相尋候所、則別紙兩通差出候間、差進之候事、

一御變革之御所置不得止儀候、尤御如才無之候得共、三家を始下々ニ至迄、人心居合方如何候哉、深恐入候御時節ニ候、御模様被成御承知度候支、

傳奏ノ間ニ
對シ林津田
外國關係事
項ヲ答申ス
國內ノ人心
居合方

英露ノ渡來

右者兼御承知之通、二百年來之鎖國御變革ニ付、衆議異同有之、人心之折合方、關東ニおゐて深く被成御配慮、亞國使節ニ茂屢談判仕候儀者、對話書之通ニ御座候、當時萬國之形勢一變仕候事情、夫是參酌仕、相分り候向者追々折合申候、尤種々之浮説、御聞ニ入候儀も可有之ニ付、猶委細之儀者、御逢之節可申上候、

一 亞人手を引候者、英夷必渡來可仕与之事、

亞人被差置候者、英夷之渡來無之トモ、其外魯西亞以下之諸夷者如何哉、御不審ニ候事、

右者、亞墨利加國條約此度相整不申候得者、英吉利軍艦を以切迫之談判ニ可及趣者、去巳十月廿六日、亞國使節申立候箇條書中ニ御座候、

但、亞國條約相整候得者、英夷差逼り候程之儀者有之間敷、亞國同様條約爲取替候儀者相願可申、魯西亞以下之諸夷是又同様之儀与奉存候、

右之通御座候、猶又、御不審之條々者御尋次第可申上候、以上、

正月

林 大學頭

津田 半三郎

墨夷同盟合衆國

一 墨夷同盟合衆國トハ、何之國々ニ候哉、

右墨夷者、亞墨利加洲中之國々一統仕、政治を爲はを以て、亞墨利加合衆國与稱し、又

大統領

合衆國与茂唱へ申候、同盟之儀者、他國与盟約を結ひ候國々ニテ、凡十四五ヶ國程有之由ニ御座候、

一大統領トハ、合衆國全躰ノ大統領ニ候哉、墨夷中ノ大統領ト相見候、慥ニ難被成御分候、

右大統領者、合衆國ニテ「プレジデント」と唱へ、矢張國主ニ御座候、

紀年

一 昨冬、書翰ニ千八百五十五年ト紀年に、切支丹國ヲ本國ト致し、其紀年ニテ年數を立候

由、被及御聞候、不慥候、如何哉、

右書翰者、亞米利加本國ニテ、千八百五十五年ニ認候事ニ御座候、則安政二卯年ニ相當り申候、去巳年者千八百五十七年ニテ、同年十一月中、千八百五十八年ニ相成候、右者西洋各國之教主羅馬人耶穌誕生を起年与仕候由ニ御座候、

一 ハルリス語中ニ、世界第一之合衆國云々有之候、合衆國中ニテハ、墨夷第一ノ國柄ニ候哉、

右亞米利加國者、新開之國ニ候得共、諸蠻ニ手廣く航海仕、五大洲中之一洲を茂領し候ニ付、ハルリス自負之辭与相聞へ申候、

右之通御座候、猶又御不審之條々者、御尋次第可申上候、以上、

正月

林 大學頭

世界一ノ合衆國

安政五年正月二十九日

六九六

津田半三郎

〔東坊城聰長書翰〕○宮内省圖書寮所藏本
忠成公手録書類寫所藏

○正月二十七日三條實萬宛

○上略、明日・明後日之内大學面會仕候、何ソ御尋被遊度御事モ候者、一寸御一筆可被仰下候、
聰長心得ニテ輕ク相尋候事ハ差支不申ト存候、任序相伺候、右御序ニ御伺、否可被仰下候
事、

正月廿七日

老中所存御尋之事、未々御沙汰無之候、

御近侍 中極密

聰長

幕府、中仙道熊谷・深谷・本庄・新町・倉賀野・高崎ノ六宿、美濃路墨俣・
大垣ノ二宿、奥州街道鍋掛宿ノ人馬賃錢割増期限ノ五箇年延期ヲ令
ス。

〔老中達〕○内閣記録課所藏本
安政年録所載

正月二十九日、遠藤但馬守殿御渡御書付、○安政
年録

中山道熊谷宿外五ヶ宿、美濃路墨俣宿外壹ヶ宿、奥羽道中鍋掛宿困窮ニ付、人馬賃錢割増

左之通可請取旨申渡、

中山道

熊谷宿

深谷宿

本庄宿

新町宿

倉賀野宿

高崎宿

美濃路

墨俣宿

大垣宿

奥羽道中

鍋掛宿

熊谷以下九
宿ノ人馬賃
錢割増期限
ノ五箇年延
期ヲ令ス

去ル丑二月方當午正月迄、
中五ヶ年之間、人馬賃錢都
合四割五分増申付置候處、
猶又、當午二月方來亥正月
迄、中五ヶ年之間、是迄之
通四割五分増、

右割増錢申渡候間、可被得其意候、

右之趣、向々ニ可被相觸候、

安政五年正月二十九日

六九七

安政五年正月二十九日

午正月

六九八

〔溫恭院殿御實紀〕
〔鳥取藩公儀御觸書〕

○溫恭院殿御實紀、本書ヲ正月二十六日ノ條ニ收ム。鳥取藩公儀御觸書ニハ、正月二十九日大目付ノ回達ニ、「内藤紀伊守殿御渡候御書付寫」トシテ本書ヲ收ム。今、安政年錄及鳥取藩公儀御觸書ニ從ヒ、之ヲ本日ニ繋ク。

〔延岡藩萬覺帳〕

○子爵内藤政道所藏本

二月朔日、○中略、

一 中山道熊ヶ谷宿外五ヶ宿、美濃路墨俣宿外壹ヶ宿、奥州道中鍋掛宿人馬賃錢割増之儀、御觸有之候付、寫御勘定所に相斷、

〔甲府御用日記〕

○坂田孝吉所藏本

二月十三日、曇天、○中略、

一 中山道熊谷宿外五ヶ宿、美濃路墨俣宿外壹ヶ宿、奥州道中鍋掛宿困窮ニ付、人馬賃錢割増御書付、柿沼友右衛門殿を以、御渡被成候、

仙臺藩、書ヲ幕府ニ上リ、蝦夷地擇捉・國後二島ニ在ル同藩警衛兵ノ冬季撤退ヲ請フ。

〔仙臺藩伺書〕

○維新史料編纂會所藏本
海防秘聞集所載

松平陸奥守、蝦夷地警衛御場所之内、エトロフ・クナシリ二嶋に被差渡置候人數、年々冬ニ

擇捉國後二島ノ氣候風土

仙臺藩兵冬期撤退ノ許可ヲ請フ

引揚置、翌早春ニ至リ差渡候様被成下度と奉存候、右二嶋之義ハ極寒之地ニシテ、風土ニ不馴者共、瘴癘ニ感致病發候もの有之候而ハ、貳百十日より海上通路相留り、療養手當も行届兼候事ニ相見、於陸奥守甚心痛被仕候間、前文之通被成下度奉存候、佐竹右京大夫様御持場之内、カラフトサマ之御人數、冬分ハ一圓ニ被引揚致歸國候事ニ相聞、依而ハ二嶋逆も同様ニ被成下度義ニ奉存候、前ニハ東西寒暖之相違も御座候由ニ候處、近來風土海様ニ亦も相變候ものも可有之哉、當節ニ東西共同様ニ相聞、勿論右時節ニシテ氷海ニ相成、異舶渡來迎も無之候處、萬一氷海相弛ニ異人渡來等も難計節ハ、右人數早々差向警衛可爲仕候、左も無之節、嚴寒中二嶋へ、空數人數差渡置、警衛爲仕候義、千萬歎敷次第ニ有之、自由ケ間敷恐入候事ニ御座候へ共、前書之通人數引揚候様被成下度候、大切之御場所警衛之義ニ御座候へ共、人命ニ拘り候義歎敷義ニ御座候間、御出格之御評義被成下候様仕度、此段可奉伺旨申付候、以上、

〔朱書〕
午正月廿九日

松平陸奥守内

橋本九八郎

〔仙臺藩士橋本九八郎日記〕

○維新史料編纂會所藏本

正月廿八日、晴、

安政五年正月二十九日

六九九

一御登城御供秋保方相勤、
一堀織部正殿(利根、箱館奉行)・河津三郎(箱館奉行支配組頭)太郎殿へ御出會致、品々御内談致置候事、
同廿九日、大雪積盈尺、

一エトロフ・クナシリ御人數引上方御伺書持參、伊賀殿御勝手へ差出申候事、(松平忠國、老中)

米國總領事「ハリス」Harris病ム。幕府、醫師伊東貫齋盛貞○和歌山藩抱醫師○後幕府奧醫師ヲ下
田ニ遣シ、之ヲ診セシム。

〔下田奉行中村時萬書翰〕

○宮内省圖書寮所藏本
川路聖謨京都表御用留所藏

(朱書)
「午正月廿八日、丑上刻到來、」

以急御用狀致啓上候、然そ亞墨利加官吏不快、當表歸着後爲差儀(下田)も無之哉、手療治こ以
勿し、御地より附添罷越し候石川櫻所之診察をも受不申處、今夜五時頃御用所に通辨官ヒ
ユスケン罷越申聞候と、官吏病体甚不宜候間、櫻所差越吳候様、尤官吏と何共不申聞候得
共、甚案し候間、自分心附を以相願候旨申聞候こ付、不取敢櫻所に通詞相添差遣し、容体爲
見候處、別紙之通申聞、助命之程難計趣こ有之、何分掛念こ付、即刻下田町醫師杏庵(淺岡)に調
役・通詞等差遣し、未タ右之否と不相分候得共、彼國に對し候も、療用手當向不行届候も
と不可然義之處、當表醫師と、兼り御承知之次第こ付、右之ものに爲打任候儀甚不案心(マ、)、殊

「ハリス」病
重シ

伊東貫齋ノ
派遣ヲ請フ

こ當節之場合、いつもも御地より伊東貫齋、又こ餘人こも、早々當表に御差越有之候
様、其筋に被仰上候方と、此段不取敢申進候間、猶御勘辨之上、可然御取計可被下候、右之
趣可得御意如此御座候、以上、

正月廿五日

中村 出羽 守印

井 上 信 濃 守 様

猶以、本文申進候通り、調役等玉泉寺に差遣し候得共、猶摸様申越次第、組頭をも差遣候
積、且櫻所儀明廿六日出立致し度段、今朝申立承届候得とも、本文之次第こ付、明日出立
と先爲見合候積こ有之候、以上、

○別紙

亞墨利加官吏容体書

一今暮六ツ時診察仕候處、傷冷毒腸胃熱兼症こ也、全身熾熱皮膚乾燥い多し、脉不齊よし
て無力、舌胎黃白、不食腹軟弱、且自利在之、一体之容子危險之症と見受、助命之程難計
哉こ奉存候、右處方包攝強壯之劑投與仕候、以上、

午正月廿五日

石 川 櫻 所 印

〔下田奉行井上清直等書翰〕

○川路聖謨京都
表御用留所藏

安政五年正月二十九日

七〇一

「ハリス」容
體書

〔朱書〕
〔午二月六日、到來、〕

以急便致啓上候、然之亞墨利加官吏病氣旁下田表に致中歸候處、其後追々病躰不宜候趣之
而、彼地中村出羽守〔正二載ス〕急便をもつて、別紙寫之通、信濃守に申越、右書狀官吏容躰書とも、
今曉到來之付、不取敢爲御心得、寫差進申候、備中守殿にも早々被仰上候様存候、此段得貴
意度如斯御坐候、以上、

正月廿八日

井上信濃守印

鵜殿民部少輔印

永井玄蕃頭印

土岐攝津守印

川路左衛門尉様

岩瀬肥後守様

猶以、官吏病氣爲御尋、御老中方より御書面、并御品被差遣候間、爲御心得、右御狀寫差
進申候、以上、

〔老中達〕

○川路聖謨京都
表御用留所載

○正月二十八日和歌山藩城附并下田奉行へ

伊東貫齋下
田差遣ノ件

紀伊殿御城附に

亞墨利加使節病氣不相勝趣に付、伊東貫齋儀是迄治療も致し手馴候儀之候間、下田表に罷
越療治致し遣候様御申付候様可被成候、此段可申上候、尤下田奉行可相談候、

正月

下田奉行に達

同文言

右之通紀伊殿

御城附に相達候間、得其意可被談候事、

下ケ札

△ 伊東貫齋儀、明廿九日發足致し候旨、下田奉行申聞候事、
正月廿八日

〔老中松平忠固等書翰〕

○外務省所藏本
續通信全覽所載

備中守旅中に申遣候趣、

亞墨利加使節病氣不相勝趣、別紙〔正二載ス〕之通、下田奉行申聞候之付、伊東貫齋儀、早々罷越、療治

「ハリス」ノ
病氣見舞、
件

安政五年正月二十九日

七〇三

致し候様相達候、且亦明廿九日、爲御尋、御提重一組鶏卵一箱、奉書を以被遣候積候間、依之爲御心得、(下ニ載ス)扣書付類相添、此段申進候、以上、

正月廿八日

松平伊賀守
久世大和守
内藤紀伊守
脇坂中務大輔

堀田備中守様

右同日、次飛脚遣之、

〔老中達〕

○川路聖謨京都表御用留所載

○正月二十八日下田奉行井上正直へ

井上信濃守に相達候書取○川路聖謨京都表御用留

正月廿八日、松平伊賀守殿被達、左ノ通、

下田奉行
井上信濃守○安政見聞雜記

亞墨利加使節、病氣御尋之達書御品共、明廿九日下田表に刻附宿次を以差立可申、右宿次到來以前、若使節病死(イ奉)以多し候ハ、達書御品共通辨官に相渡、格別御厚意之事(イ奉)付、本國

「ハリス」病
死ノ際ノ措
置

に差遣、身寄之者に相渡候と、政府に差出候と、取計方も可有之候間、都合能様申諭、懇篤之御取扱有之候段、彼國政府にも貫通致し候様可取計旨、中村出羽守に能々申遣候様可被致事、

正月廿八日

〔老中松平忠固等書翰〕

○川路聖謨京都表御用留所載

○正月二十九日米國總領事「ハリス」宛

亞墨利加使節に達書

〔安政見聞雜記〕
中山忠能履歷資料

一覽仕候

川路左衛門尉
岩瀬肥後守

亞墨利加合衆國全權兼
コンシユル・セ子ラル

トウンセント・ハリスに

其許、下田表到着以來、病氣同篇之内、殊(イ昨令)昨日別相勝レ不申候由、下田奉行急便を以申越、御配慮被在之、醫師伊東貫齋差急其地に被遣候條、治療等十分有之度、依之、爲御尋目錄之通被下候、尙加養專要候、謹言、

伊東貫齋ナ
遣シ「ハリ
ス」ノ病ヲ
診セシム

安政五年正月二十九日

安政五年正月廿九日

七〇六

松平伊賀守花押
 久世大和守花押
 内藤紀伊守花押
 脇坂淡路守花押

「ハリス」ニ見舞品ヲ贈ル

目録

蒔繪提重 一組

〔朱書〕
葛粉砂糖入

鶏卵 一箱

〔朱書〕
三百入

蒔繪提重と御買上、葛粉砂糖と御有合相用、鶏卵ハ道中損し候程も難計候間、箱計差遣、鶏卵と下田表と支度致し候様、下田奉行に相達候事、

扣

中村出羽守に申遣候趣

亞墨利加使節病氣不相勝趣を付、爲御尋奉書を以、御提重一組、鶏卵三百入一箱被下候間、

下田奉行へノ書翰

其段可被達候、尤鶏卵と道中と損候程も難計候を付、箱計差越候間、其地と支度被申付、早々相達候様可被致候、以上、

正月廿九日

連名

中村出羽守殿

〔海防秘聞集〕

○維新史料編纂會所藏本

一 亞墨利加使節下田表に歸り候處、廿五日夜病氣別不相勝、餘程六ヶ敷様体御座候由、廿九日爲御尋、宿次奉書を以、

蒔繪提重一組、葛粉二重、砂糖二重、鶏卵一箱、三百入、但、損し候付下田と申調ル、

一 紀伊殿醫師伊藤貫齋差急被遣候條、治療十分有度旨被仰出候由、廿九日下田に出立、

〔高麗環雜記〕

○東京帝國大學所藏本

正月廿九日、昨夜中雪降出し、今夜入止、稀成大雪、

〔遠藤胤統、若年寄〕
但馬守殿、御賄頭に御渡、

亞墨利加使節に被下、

葛粉
病氣に付被下候由

砂糖

安政五年正月二十九日

七〇七

米國使節へ病氣見舞品

伊東貫齋下田に赴ク

但、箱共、

右支度之事、

正月廿九日

下田表在留亞墨利加使節に被下、

梅之鶴蒔繪

一提 重 四重物 一組

内 二重 葛粉二升詰

二重 太白砂糖六斤四拾匁詰

一玉子 三百 箱入

〔盛岡藩士 山崎忠吉 江府詰合私録〕○維新史料編纂會所藏本

二月三日、大雨、○中略

一去月廿一日、蕃所調所發足以多一候アメリカ官吏、下田表を疫病相煩、昨今相勝不申旨、官吏に附添を被遣候醫師石川櫻所を早飛脚を以、去月廿八日朝御用番内藤紀伊守殿に申來候に付、即日伊東玄朴實子伊東貫齋（養子ノ謬）、紀州殿御醫師に被召抱、蘭學格別宜旨達上聞、昨年八月、御目見被仰付、御用番様に

伊東貫齋下田ニ赴ク

御呼出に被療治被 仰付、貳時半之支度相蒙、同日暮頃、早駕籠を被下田表に發足被致候由、

但、右官吏万一病死よて、昨年登城之一件に付、公邊向何角御不都合之儀被爲在候に付、何分療治無油斷様との御嚴達之由、

〔柿崎村名主日記〕○子爵澁澤榮一所藏本

一正月廿七日、北風晴天、今日異人拜領物御付添菊名様・高橋様御役所御着に付、人足六人惣役人代百姓代茂平、今曉七ツ出立箕作村迄出迎に出役致ス、

今日玉泉寺々、異人掛御役人様方御呼出に付、名主參上仕候處、被仰渡候ハ、異人病氣に付、掛り役人相詰候間、辨當六人分、是を支度致可申旨仰渡され候、尤一兩日以前方御詰被成候處、右辨當ハ又助方々差上候、今日方村方へ仰渡され候、尙又村役人御呼出に付、小三郎參上仕候處、異人馬貳疋江戸表々來り候間、先達を之通、新左衛門厩へ入置可申候、勘定合之義も先々之通被仰渡候、

（欄外記事）
異人馬、今日方新左衛門方へ來ル、

一同廿八日、北風、明日九ツ時御奉行様玉泉寺へ御越被成候旨、御役所方御書付到來致候、次へ先達を廿五日病氣之趣御役所へ訴へ置候、淡路國相川直乘徳左衛門船水主石松附

玉泉寺滞留
ノ異人病ム

安政五年正月二十九日

七一〇

舟宿長右衛門方ニ申今七ツ時病死仕候ニ付、小三郎・忠右衛門書付ヲ以御訴へ申上候處、御聞濟之上川上謙一郎様・金子鉄太郎様御出役、御檢使御見分相濟、口書等差上候上ニ申、早々取置可申旨被仰渡候、依之、玉泉寺地中彌陀堂ニ取埋置候、
一同廿九日、北風、雪交り大雨、今日御奉行様玉泉寺へ御出被遊候積りニ付、忠右衛門・新左衛門御案内として御役所迄參り候處、大風雨ニ付延引ニ相成候、

〔醫師石川櫻所淺岡杏庵上申書〕

○川路聖謨京都表御用留所取

「ハリス」

容體書

○「ハリス」容體書

〔朱書〕
午正月廿八日、酉中刻到來、

高熱譫語

亞墨利加官吏容體、昨夜奉申上候後、夜半頃診察仕候處、大熱炊渴譫言妄語等之諸症相發申候ニ付、清涼鎮啓之水藥與置申候、一鉢之様子追々神經熱ニ相變可申哉ニ奉存候、
右今朝迄之容體如斯御座候、以上、

正月廿六日

石川櫻所
淺岡杏庵

〔朱書〕
午二月二日、辰中刻到來、

危篤狀態

亞墨利加官吏病症同前之外、昨廿六日之朝々全身所々ニ紫色之斑點相見候處、午時頃ニ至り益多く、即腐敗熱合併之症ニ相成候ニ付、收斂強壯之煎湯液與置候處、暮頃より熱發甚、人事不省、終夜煩悶、且三日來食氣全絶、脈細數、全身甚衰弱仕候ニ付、今朝より麝香龍腦之散劑兼用罷在申候、右容體如斯御座候、

午正月廿七日

石川櫻所
淺岡杏庵

〔朱書〕
午二月二日、辰中刻到來、

亞墨利加官吏、昨廿七日晝八ツ時頃々精神始ニ醒覺ニ多し、一時許之間人事を辨候處、其後又復危險之諸症相發候ニ付、暮六ツ時頃々カストリウム之散劑相用居候處、今朝ニ至り病勢稍退レ、脈力を生し、諸證健信ニ御座候、但重病之儀ニ、此上之變化も難計候得共、今日之容體、兩三日相續候ハ、快復可仕候哉ニ奉存候、右昨今之容體書如斯御座候、以上、

正月廿八日

石川櫻所
淺岡杏庵

病勢稍薄ラ

安政五年正月二十九日

七一